
三兄弟の事件簿

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三兄弟の事件簿

【NZコード】

N1044D

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

高橋空は、二歳のときに今の両親に引き取られた。自分が三つ子だと知ったとき。彼は兄弟を探す決意をする。そんな中、空は学校で起きた怪事件の犯人に疑われてしまう！ 果たして犯人は？ 兄弟の行方は？ 学校を舞台にしたライトノベルミステリー。 完結

プロローグ

蝉がいっせいに鳴き出した。山の中腹に位置するこの墓地に、その鳴き声が響き渡る。生ぬるい風が墓地を通り過ぎた。

墓地の間の道を、ゆっくりと歩いていた少年が、通過していった風に眉を顰めた。

暑い。箒と塵取りを握っている手が汗ばんでいる。汗が額や背中を流れる感触が気持ち悪い。見上げると日は中天より少し西にある。午後一時。日中では一番暑くなる時間帯だ。暑さに自然と田線が下がる。足下には小さな自分の影があった。

ふと前を歩く同い年の弟が、速度を落としたような気がして、少年は顔を上げる。少年の弟は手にしたメモ用紙と、墓石に刻まれた文字を見比べながら歩いている。そのためなかなか前に進まない。少年は前を歩く弟にまだ見つからないのかと、声をかけようとした。だがそれより早く、弟が立ち止まり、こちらを振り返った。

「なあ、ここちゅうつか？」

言つて田線で墓を示した。そんな弟からメモを受けとつて、少年は墓石に刻まれた名を確認する。

「ここだな。先に掃除始めようか」

弟にそう言つて、少年は手にしていた塵取りを地面に置く。弟は少年に領き返し、墓に供えられていた、枯れた花を抜いて塵取りの中に入れた。持ってきた花を変わりに活ける。

流れてくる汗を何度も拭いながら、一人は手早く掃除を終えた。箒とゴミの入った塵取りをひとまず脇に置いて、一人は墓と向き合つた。

「ここに眠つてるって、変な気分やな……」

「うん……」

急に静かになつたと感じて、すぐにその理由を思いつく。蝉がいつせいに鳴き止んだのだ。

二人は同時に墓の前にしゃがみ込むと手を合わせた。目を瞑ると途端に周りの音が大きく聞えてくるような気がする。しばらくして目を開けると、隣の弟に視線を向けた。

弟は立ち上がった。それにつられるように立ち上がった少年とともに、先ほど来た道の向こうを見る。目を細めて見る先に、墓石が立ち並ぶ以外人の姿はない。しばらくそうして、二人は黙つて立っていた。その沈黙を破ったのは少年だった。一度口を開き、だが躊躇うように口を閉ざす。また風が吹いた。弟と良く似た、薄茶色の髪が揺れた。

「なあ、アイツなんで、飛び降りたんだろ?」

「はあ?」

急な問いに、意味がつかめなかつたらしい弟が訝しげな声を上げた。だがすぐに察しがついたように、はつと目を上げた。

「ああ、アイツのことか」

ここにはいない二人の弟のことを聞いたかつたらしいと、弟は気づいたようだ。少年は、頷いた。

「そう。アイツが校舎の屋上から飛び降りた時、俺、マジで自分が死んだような気がした。本気で怖かつたんだ。アイツは怖くなかつたのかな。死ぬこと……」

あの事件が起こつたあと、この話を少年と弟は互いに避けていた。どうして今、少年はこの話をしだしたのだろうか。だが、弟はそんな考えを追い払い、少年の独り言のような問いに答えた。

「どうやろ。もう、麻痺してたんかもな。怖いって感覚も悲しつて気持ちも」

「それならそうといつてくれた良かつたんだ。辛かつたら辛い、悲しかつたら悲しいって、溜め込むからあんな事になるんだ。俺たちは、たつた三人きりの兄弟なのに」

「……そやな」

弟の同意の声を最後に一人は黙り込んだ。

視線はずつと誰もいない細い道に向けながら。

第一章 写真

たかはしそう
高橋空がその写真を見つけたのは、去年の夏だった。その写真是両親の部屋にある小さな机の、引き出しの奥に入っていた。父に頼まれて、老眼鏡を取りに来た時の事である。写真には小さな赤ん坊が三人並んで写っている。寝転んでいるのを上から撮つたようだ。裏を反して見ると鉛筆でこう書かれていた。

『三つ子ちゃん零歳冬』

写真に書かれた言葉に空は驚いた。もう一度写真を表にかえして、空は写真に写る赤ん坊を見る。

皆眠っている。

あじけない顔はどれも似ている。その赤ん坊の内、一番左端で眠る赤ん坊が自分なのではないかと空は思つた。心臓が早鐘を打ち始めた。自分が赤ん坊の頃の写真は、この家はない。空がこの高橋家に一歳で養子に貰われてきたからだ。家には一歳以降の写真ならたくさんあるが、それ以前のものはないと思つていた。

その為、今手にしている写真に写った赤ん坊が、空本人なのかどうかは分からない。自分が三つ子だったという話しも、聞いたことはなかつた。

呆然とその写真を見つめる空の背後に、一向に戻つてこない空に痺れを切らしたのだろう。一階で待つていたはずの、父が近づいてきた。

「おや。空その写真……」

驚いて空は後ろを振り返つた。

「ゴメン父さん。勝手に……」

謝りうとした空は、言葉の途中で父に止められた。

「いや。いいんだよ。かわいいだろ？。一番左が空だよ」

「やっぱりこれ俺だつたんだ」

妙な気分だった。自分の赤ん坊の頃の写真なんて、見ることはな

いと思っていたのだから。

「父さん。裏に書いてあるのって……、俺に兄弟いたの？ 三つ子
つて書いてあるけど」

尋ねた空に、父は優しげな笑みを見せた。

「ああ。そうらしいね。父さんは会つたことないけれど、お前には
血の繋がつた兄弟が一人いるんだそうだ。それぞ別家の家に引き取
られていつたそうだよ」

「……なんでもっと早く教えてくれなかつたんだよ」

「いや、その写真も空が小学生になつたら渡してやろうと思つてい
たんだよ。なくしたと思っていたのに。ここに仕舞いこんでいたん
だな。空には悪いことしたなあ」

すっかりしょげてしまつた父に空は慌てて笑顔を見せる。

「何いつてんだよ、父さんはまだまだ若いって。俺がこの本屋継ぐ
までは現役でバリバリ働いてもらわなきやならないんだからな」

空の家は一階の大部分が店舗になつており、父の前の代から本屋
を営んでいた。空はこの本屋の跡継ぎだ。

「ちょっと、いつまで油売つてんの。お父さん、早く店番変わつて
下さいよ。空もそろそろ塾に行く時間でしょう。高校受験のために
塾行きたいって言ったの、空だからね」

そう階下から母に叫ばれて、空と父は大きな声で返事をする。父
は老眼鏡を、空は写真を手に階下へと下りていつた。

そしてあの時手に入れた写真が今も空の手の中についた。

めでたく希望の高校に入学して早一月。五月の暖かな日差しが、
一年一組の教室にも穏やかに降りそそいでいる。

昼休み。校庭でサッカーをしようという友人たちの誘いに断りを
入れ、空は一人教室にいた。

少し考えたいことがあつたのだ。持ち歩いているため、だいぶよ

れよれになつてしまつた自分と兄弟達の赤ん坊の頃の写真を、空は自分の席で見つめていた。

写真を見つけたとき、空は密かに思つていた事があつた。高校に合格したら兄弟を捜そう。

だから偏差値の高いこの高校の受験勉強もがんばつてこれたし、その頑張りのおかげで合格出来たとも思つ。だが実際高校生になつてみると何かと忙しく、なかなか兄弟搜索に乗り出せない。何からすれば良いのか、それが分からぬのが現状だつた。そのため、空は一度一人になつて考えてみたかったのだ。

小さい頃から可愛いといわれ続けていた顔を、空は思いつきり鞏めて写真に見入つた。

「おおーい。高橋。何見てんねん」

声と同時に後ろからひょいと空は持つていた写真を奪われる。

慌てて振り向いた先に、クラスメートの紫藤海しづうかいがいた。中学までは関西に住んでいたという彼は、高校に入つて出来た初めての友達だ。その海が今、してやつたりといった感じの笑みを浮かべている。サツカーに行つていたはずの海が何故ここにいるのかということよりも、空は奪われた写真が気になつた。

「おい、紫藤。勝手に盗るなよ」

「いいやん。ちょっとくらい」

海は爽やかに笑つて空の後ろの席に座ると、写真に目を落とす。別に見られて困る物でもないので、空はそれを止めようとは思わなかつた。逆にいつしょになつて写真を覗き込む。

「かわいいだろ。左端が俺……どうかした？」紫藤

赤ん坊の自分を自慢しようとしたが、なぜか写真を見て固まつた紫藤に、空は訝しむ。海は空の問いに、随分間をあけてから答えた。

「……なんで、お前がこれ持つてんねん」

何でとは変な疑問だ。さつき空は左端が俺だときつぱり言つたではないか。

「だって、これ俺だつて。自分の写真持つて何が悪いんだよ」

「ちやうねん、わつやなくて、コレ、この写真……俺も持つてる…

…」

そう言つて海は内ポケットから携帯電話を取り出してなにやら操作した後、画面を空に見せた。その画面には空の持つていてるのと同じ写真が写つていたのだ。驚く空に、海が追い討ちをかける。

「な？ 俺と一緒にやる。ちなみに真ん中が俺」

「……」

「……」

互いに顔を見合させ、混乱する頭を整理しようとすると、先に海が口を開いた。

「左端が高橋やつたつけ」

「そう。で、真ん中がお前つてことは？」

空の問ひに、また無言になる。そうなると校庭の騒ぎや教室の中でおしゃべりしている女子の声が耳につく。

「この写真の裏、三つ子ちゃん零歳冬つて書いてあるんだよ」

「……俺、実はもうわれつ子やねん。紫藤の家に貰われたのは一歳の時」

さらりとそう言つて、反応を待つように海は空を見る。空は混乱しながらも慌てて口を開いた。

「おっ、俺も。高橋の家に貰われたの一歳の時……」

「俺たちって実は兄弟？」

異口同音に一人はそう言つて、またもや黙り込む。余りにあつさり見つかりすぎて拍子抜けといつか。だがもしかしたら、とんだ勘違いで、間違いだったなんてことも。などと頭の中はいまだ混乱をきたしている。

だが良く見ると空と海の外見には共通点が多い。空は染めていないのに明るい色の髪をしている。髪を染めている人が多い昨今では余り目立つ物でもないので、特に気にしなかつたが、海も空と良く似た明るい髪色だ。空は瞳の色も少し薄い。コレも生まれつきである。海の田も良く見ると空と似た色をしていた。

互いに見詰め合っていた時、第三者の声が空と海の思考をとめた。

「高橋、紫藤。こんな所にいたのか」

その声に真っ先に反応したのは空である。

「いや悪いのかよ。春名」「

空の視線の先には秀麗な顔に縁なし眼鏡をかけた少年が立つていた。クラスメートの春名光はるなこうである。クラスの委員長でもある春名と空はなぜかそりが合わず、顔を合わせると口げんかが始まるのだった。大抵空から突つかかっていくのだが、今日は珍しく春名の方から声がかかった。

「まあまあ、それより何や。俺たちに用か？ 珍しいな」

早くも険悪になりつつある雰囲気を止めたのは海だ。いつもこの二人の喧嘩の仲裁に入っている。

「お前ら一人のどっちか、教室の鍵もってないか？ 教室の鍵がまだ帰ってきてないって担任に言われて……」

「それでなんで俺たちのここ来るんだよ」

相変わらず空は、きつい口調で春名の言葉を遮る。だが春名は気にして様子もなく、ポーカーフェイスで答えた。

「他の奴らにはもう全員聞いた。あとはお前ら一人だけ」

どこか偉そうに春名はそう言った。そう言われると、他に言ひこともなく、空は首を横に振る。

「俺は知らない。朝はあつたんだろ」

「ああ、じゃなかつたら今頃締め出しきらつてるだろ」

もつともなことを言われて、空はムッとした。そんな空の表情に気づいたのだろう。海は慌てたように口を開く。

「俺も知らんで、だれか他のクラスの奴が間違えて持つてつたんちやうか」

「……それならすぐに気づくはずだろ。放課後探すしかないが」

最後の方は独り言の様に呟いて、春名は空たちから離れようとした。だが、その動きを途中で止めて、一人の間にある机の上の写真に目を止めた。

「その写真、……」

春名のいつもの無表情が少し驚きに崩れたような気がした。まさか、コイツまで俺の兄弟だった、なんてことないよな。こいつ超金持ちらしいし。もはれることは考えにくい。

まさかとは思つたが、空は春名もまた明るい茶色の髪をしていることに気づいた。彼の性格からして、おしゃれの為に髪を染めたりはしないのではないかと思つ。

「写真持つたらダメだとか言つんじゃないだろ?」

内心の焦りを悟られまいと、空は春名を軽く睨む。

「いや……。かわいいなと思って」

思つても見なかつた言葉をさらうとはいひて、今度こそ春名は踵を返して教室を出て行つた。

後に残された空と海は、教室を出て行く春名の背を呆然と見つめる。

「俺、春名が笑つたところ始めてみたかも」

「俺も……」

二人が呆然と固まつたのは、春名の言葉のせいではなく、その言葉を呴いたときに見せた春名の笑顔のせいだった。空と海は、否クラスマイト達も見たことがないのではないだろうか。春名光の笑顔など。

その笑顔が妙に印象的で、空と海は昼休憩終了のチャイムが鳴るまで、ずっと固まつたままだつた。

午後の授業が終わると、急に眠気が覚めるのは何故だろ?。空はそんなどうでもいい事を考えながら、ゴミ収集所に引きずる様にして持つてきたゴミ袋を置いた。意味もなく手を叩く。

後は教室に戻つて鞄を取つてこなければならない。教室は四階で、さつき下りてきた階段をまた上らなければならないのかと思うと少し憂鬱だ。それに海を待たせてある。人が自分を待つていると思うと妙に焦つてしまつ。

靴を履き替えて、下りてくるの方が多い階段を上る。この階段を四階まで上りきつて角を右に曲がればすぐに教室が見える。

だが空はその曲がり角の手前で足を止めた。話し声が耳に入ったのだ。

「じめんなさい、春名君。私のせい……」

この声は聞き覚えがある。クラスメートの朝倉有紀だ。クラスの副委員長でもある彼女が何故春名なんかに謝る必要があるのだろうか。

「いや。朝の鍵開け、君に頼んだ僕も悪かつたし」

春名の答えで何となく察はついた。昼休憩の時、春名が探していた鍵のことが原因らしい。おかげで鍵をなくしたのは朝倉だったのだろう。

言っていることは優しげだが、春名の声は冷たい。表情は見なくとも分かる。春名お得意のポーカーフェイスだ。

そう考えてふと今日の昼休憩の時に見た春名の笑顔が頭に浮かぶ。笑った顔は結構いくてたのに。などと、空は思つてしまつた。そして思つてしまつた自分が妙に腹立たしい。

「でも……私やっぱ先生に謝つてくるわ。だつて私が鍵なくしたのに、春名君が怒られるなんて」

こんな会話を廊下でされたら、通りづらいではないか。海が待つているのに。教室はもう目と鼻の先だが、内容が内容だけに、この二人が立ち話している横を通るのは躊躇われる。春名はどうやら朝倉を庇つていたらしい。空が抱く春名のイメージとは合わない気がして、空は内心首を傾げる。だが、またもや空のイメージからは想像も出来ないような言葉が春名の口から漏れた。

「別に。もう怒られてきたんだからいいよ。先生だつてもう気にしてない。それに朝倉、バレエのレッスンあるはずだつたよな。急がないといいのか」

「あ、うん。でも良く覚えてたね。バレエの話

「記憶力がいいから」

さりとせんなことを言ひて、春名がじからに向かってくの気配がする。どうしよう、どこか隠れる場所。きょろきょろと辺りを見回すが、廊下にそうそう隠れる場所などあるわけもなく、空は曲がつてきた春名に見つかった。

目が合つて、春名が微かにムツとしたような表情を作る。

あ、なんかコイツ怒ってるかも。そう思つた瞬間腕をつかまれて階段まで引きずられていった。

「何すんだよ。離せ」

「言われなくとも離す」

そう言つて力強く握っていた腕を開放された。空はじんとしびれた腕をさすりながら恨めしげに春名を見る。春名はそんな空を微かに睨み返し、口を開いた。

「黙つてろよ」

凄みがあつて怖い。そう空が感じるほどのほつきと聲音で、春名は言つた。空は逸らしたい視線を必死の思いで合わせたまま、とぼける。

「何のことだよ」

「分かつてるんだよ。さつきの話し全部聞いてただろう。ずっと気配があつたからな。あんなところで話してた僕らも悪かつたけど、立ち聞きもいい趣味じやない。せつかく穩便に事を運んだんだ。だれかれ構わず話すなよ」

「わ、分かつてるよ。そんなこと。俺だつて言つてこいこと悪いことの区別ぐらいいつぐ」

そう言つて睨み返してやつたら、春名は何かをはかるように眼鏡の奥からじっと空を見返す。そして春名の方が先に口を開いた。

「……分かつた、信じる。でも、もし喋つてみる。ただじやおかなかからな」

何でコイツこんなに怖いのだ。表情はいつもと変わらないポーカーフェイスなのに、なんどういか、雰囲気が怖い。

空は氣おされて激しく頭を上下させた。それを見て満足したのか、

春名は空を残したまま階段を下りていいく。だが途中で足を止めると、振り向いた。まだ何があるのか。そう思つて見つめると、春名が言った。

「教室の中で野次馬してた奴にも言つといてくれ、さつきの」「言つだけ言つと春名はさつさと階段を下りて行ってしまった。

教室の中で野次馬していた奴って？ そう考えて思い当たった。空を待っている人物。それは絶対、紫藤海に違いない。

空は慌てて教室に戻る途中、見てしまった。教室の前の廊下にいた朝倉が、胸の前で祈るように手を組んだまま放心している姿を。

第一章 騒がれし過去

彼は思つた。ああ、またこの夢だと。
幼い頃の自分を彼は外から見ている。

幼い頃の自分。彼は自分が嫌いだった。小さく、臆病で、ただ弱いだけの存在。

今小さな彼がいる場所。初めて連れて行かれた親戚の集まりの中。他の子ども達と一緒に遊んできなさいと親に送り出された広い庭の片隅。小さな彼は、彼より大きな子ども達に囲まれ、怯えていた。彼は人と接することが苦手だった。喘息もちで、激しい運動も出来ず、家で過ごすことが多かった自分。近所の子ども達とも遊び機会がなかつたせいで、同年代の子ども達とどう接したらいいのか分からぬのだ。

それに今彼を囲んでいる子ども達には、彼を歓迎するムードなど一切ない。小さな彼を、侮蔑を込めた目で睨んでいた。

『お前、孤児なんだってな』

「コジ？」「コジって何。この頃の彼は孤児と言つ言葉を知らなかつた。

『おじ様とおば様はなんだつてお前みたいなスジヨウの知れない子を引き取つたのかつて、お母さん達が言つてたぞ』

年嵩の少年がそう言つた。他の子ども達が同意する。

『病気持ちで、たいした利用価値もなさそつなにつけ』

『どうせ叔父様たちも、すぐに飽きて捨てるさ。こんなのは嫌な笑いが彼の周囲でいくつも起こる。だが、彼の頭の中にはこれしかなかつた。

『ば、ぼくはお父さんとお母さんの子じやないの』

口に出して聞いたら、頭を打ぶたれた。

『当たり前だ。お前みたいな奴が俺たち一族の人間な訳がないじゃないか。気持ち悪い。そのうち、おじ様たちも目を覚ましてお前を

どつかに捨てに行くだろう。『うう

それから彼はしばらく殴られ続けることになる。顔や腕は田に付くからと、服で隠れる場所を何度も。でも、このとき彼は殴られる痛みよりも、実の親だと思っていた両親が本当の親ではなかつたと言つことの方がショックで、心が痛かつた。殴られながらずっと捨てられたくないと思つていた。

怖かつた。一人は嫌だつた。優しいお父さんとお母さんにて捨てられるくらいなら、死んだ方がマシだと思つた。

そこで、彼は目が覚めた。薄暗い室内に彼の呼吸音が大きく響く。乱れた呼吸。久しぶりの悪夢。何故今頃こんな夢を見なければならないのか。彼に分かるはずもなかつた。夢なのに、余りにもリアルだつた。最初は遠くから眺めていたはずが、いつの間にか小さい頃の自分の中に、入りこんでいた。

夢なのだから仕方ないが、夢であるからこそもつといい夢を見たかつた。

現実はこんなにも、容赦ないのだから……。

朝の登校時間は好きだ。特に春は良い。暖かな空気はどこか生き生きとして、たくさんの香りを運んでくる風が心地良い。

高橋空は一人上機嫌で、通学路を歩いていた。そんな空の肩を叩いて、紫藤海が空の横に並んだ。

「おつす。高橋」

「はよつ。紫藤」

挨拶を交わす声が、どこか弾んでいる。それもそのはず。空は今朝、両親からある事を聞きだすことに成功したのだ。

「紫藤、聞いてきたぞ。俺たちがいた施設の住所と電話番号」

昨日の帰り、空と海は自分達が本当に兄弟なのか確かめようと話

していた。互いに知っていたのは、自分達が今の親に引き取られる前にいた施設の名前だった。彼らは同じ施設にいたのだ。そこで空は昨日の夜、親に施設の電話番号と住所を聞いてきたのだ。

「おお。すういやん。えらい。さすが高橋」

「そんな褒めんなよ」

大仰に誉めそやす海に、空はまんざらでもない顔をしている。

「じゃあ、今度行つてみいひんか？」

「ああ。そうしようぜ」

歩きながら、空と海は先方に電話して、都合がいい日を聞いておいた方がいいだろうと話し合つ。そんな会話が途切れたのは、海が春名を見つけたからだった。

「あ、あれ、春名やん」

「本当だ。珍しい。こんな時間にここ歩いてるなんて」

春名はクラス委員長で、大抵朝一番に登校して教室の鍵を開けている。昨日はどうやら違つたらしいが。

「なあ、アイツ何で朝倉を庇つたんだと思う」

春名を見たせいで、昨日の情景が思い起こされて、空は海に尋ねる。昨日海は空が思つた通り、春名と朝倉のやり取りを教室の中から覗いていたらしい。

「あれやろ。朝倉がなくしたつて事になつたら、色々言つ奴も出てくるし。何かにつけて目立つ奴やん朝倉。春名が好きやつて公言してはばからへんし、春名のシンパから結構目の敵にされてるつて知つてたか？」春名は多分知つてたんやろうな。そう言う事情考えてああいう行動とつたんやろ、たぶん。俺結構アイツ見直したわ」

「え？ そうだつたんだ。知らなかつた。でも、朝倉なんであんな奴がいいんだろう。昨日アイツ滅茶苦茶怖かつたぞ」

「ああ、お前脅されたんやつたな」

海は数メートル先を歩く春名の背を見ながら、笑いを含んだ声で言った。

「でも、アイツがモテるの昨日ちょっと分かつた気がしたわ。春名

と話し終わった後、朝倉の奴ぽけーとなつて、乙女モード全開つて感じやつたもんなんあ」

その言葉に空は昨日少し田にした朝倉の姿を思い出す。確かに朝倉は、海が言つているよつに、胸の前で手を組み、惚けていた。

「……俺、今までアイツのこと何か嫌な奴だと思つてたけど、ちょっと仲良くしてみようかな」

その言葉に海は驚きの声を上げた。

「え？ お前入学式の田春名と喧嘩してから、絶対アイツとは仲よくならへんつて断言しどうたやん」

「だつて、アイツと一緒にいたら俺もモテるかもしれないだり

「……春名も可哀相やな」

「あ？ 何か言つた」

「いや……」

よつしや、絶対に友達になつてやると勢い込む空を、海は呆れて見つめる。だが、まあ、仲良きことは美しきかなつて、誰かも言つとつたし、これはコレでいいかも知れへんな。と、海は思うのだった。特別親しい友人を持たない春名のことは、前から気になつてもいたし。これはこれで良いきつかけになるのかもしれない。

「じゃ、さつそく声かけへんか？」

海の提案に空は快諾する。

「おつしゃ、おーい春名」

耳を塞ぎたくなるほどの大聲で、空が春名の背に向つて声をかけれる。驚いた顔で振り向いた春名に、空と海は駆け寄る。

「おはよう。春名

ここにこと笑いかけた空に、春名は訝しげな顔を向ける。

「何なんだ？ 一体

「はあ？ 春名。お前おはよつて言つたら普通おはよつて返すだひ」

常識だろ常識と空は言つ。それに対し口を開ひとする春名よつ

先に、海が口を開いた。

「まあまあ。それより春名。今日はびつしたんや。やけに遅いやんか」

口げんかに発展しそうだった会話の方向を変えようとそう言つたのだが、春名には通じなかつたようだ。相変わらずの無表情で、春名はこう答えた。

「別に良いだろ。遅刻じゃない」

「ああ、まあそうやけど……」

「おい、春名。なんでそういう言い方しか出来ないんだよ。人がせつかくフレンドリーに接しようと思つたってのに」

「……何だそれは。別にそんなの頼んでないだろ」

空と春名の会話を一步後ろで歩きながら聞いていた海は、溜息を吐きたくなつた。

結局口げんかが始まるんや。」「こつらは……。

教室まで続いた空と春名の口論は、教室のドアを開いた瞬間に途切れた。途切れたのは、教室の中から発せられた嬌声にも似た歓声のせいだ。歓声を上げたのはクラスメートの女子たちだ。女子たちは教室の端に固まつて、こちらを見ている。何事かと三人は教室の前で足を止めた。

そこへ、副委員長の朝倉が小走りに近寄ってきた。手には何か雑誌のような物を持っている。

「春名君、コレ春名君だよね、ねつ」

そう言って、朝倉は開いた雑誌を春名の目の前に突きつけた。春名は近づきすぎて焦点の合わなくなつた雑誌を受け取ると、見える位置まで下げる。それを空と海が左右から覗き込む。

その雑誌はスポーツ雑誌のようだつた。雑誌には去年の冬のオリンピック特集が組まれていて、そこに写っているのは確かに春名に良く似ている。

空は写真に写っている、フィギュアスケートの選手と春名を交互に見る。顔立ちは似ているが、雑誌に載っている人物とは随分印象が

違う。雑誌に載っている人物が、眼鏡をかけていないからだろうか。

いや、それだけではない。纏う雰囲気が違うのだ。今空の隣にいる春名のようなトゲトゲしさが、雑誌に載っている人物にはない。そんなことを思つて春名を見ると、彼は没面を作つていた。

「おお、ほんまやつ。ていうか朝倉。思いつきり名前書いてあるやん。本人に確かめんでもさ」

海は春名が持つ雑誌の一部を指差した。確かに名前が大きく出でている。

「そんなのわかんないじゃない。一応確認しなくちゃでしょ」

「確かに雰囲気は違うけど、顔は一緒だし、名前書いてあつたら明らかに本人じゃん」

空がそつ言つと、朝倉に睨まれた。結構怖い。空はさつと目を逸らした。

そんな空の横で一人黙つて雑誌を見つめていた春名は、一つ溜息を吐くと口を開いた。

「確かに僕だよ。それが何か」

そう言つた瞬間、クラスメートからまたもや歓声が上がる。あつという間に三人はクラスメート達に囲まれた。

クラスメート達が我先にと質問を始める。春名と一緒にいたせいで騒ぎの中心に身をおく空の耳には、クラスメートの声の大半は聞き取れなかつた。

春名はそんな声を聞いているのかいないのか。無表情で、どの質問にも答える様子はない。

一向に口を開かない春名に、周りに集まつたクラスメート達の口も重くなつたようだ。だんだんと質問の声が小さくなつていいく。いつの間にか、静まったく声にあわせるように、春名が言つた。

「わるいけど、もうスケートはやめたんだ。僕はスケートの話をするつもりは一切ない」

きつぱりと言われた言葉に、クラスメート達から不満の声が上がつた。だがその声も春名は無視する。しばらく食い下がつていたク

ラスメートたちも、一向に答える様子のない春名から、落胆の表情で離れ始めた。春名はその中に混じっていた朝倉に声をかける。

「朝倉。聞きたいんだけど」

「何？ 春名君」

問い合わせ返した朝倉に、春名はまだ手にしていた雑誌を示しながら言った。

「この雑誌、朝倉が持ってきたのか」

「違うわ。友達に貰ったのよ」

「……コレ、僕にくれないかな」

「え？ どうして」

「欲しいんだよ。それだけ」

「え？」

朝倉が驚いたように声を上げた。

まだ横で春名と朝倉の会話を聞いていた空も驚く。先程、春名がスケートの話はしたくないと言つた時、春名はどこか苦しそうに見えた。きっとスケートをしていた頃の事を思い出したくないのだろうと、空は思ったのだ。だが、春名はその頃のことを思い起させる雑誌を、欲しいといつ。どうにも空には解せなかつた。

「でも、もらつたものだし……」

春名は渋る朝倉に目を合わせた。朝倉見つめたまま口を開く。

「ダメかな。欲しいんだよ、どうしても」

空の目にはつきりと分かるほどに、朝倉の顔が朱に染まつた。おちたな、と空は思つた。

案の定朝倉は首を縦に振る。

「……いいわ。そんなに欲しいならあげる。スッゴク惜しいけど」

前半は春名に、後半は独り言のように朝倉は呟いた。

春名は朝倉にありがとうと誓つと、自分の席には行かず、教室の後ろへ向かつた。

何をするつもりだろうと空が見ている前で、春名は教室隅に置いてある「ミニ箱に、持つていた雑誌を捨てた。

朝倉が息を飲む音を耳で聞いた瞬間。空はキレた。

「おまえ、何やつてんだよ」

そう怒鳴っていた。一瞬教室の空気が凍りつく。まずつたかなと思つたが、一度口に出してしまつた声を消すことは出来ない。

「もらつた物を本人の前で捨てるなんて最低な行為だろ。謝れよ朝倉に」

怒鳴つたままの勢いでそつ言つと、春名の冷めた瞳と田が合つた。
「何故？ 僕が貰つたものをどうしようと、僕の勝手だろ。違うか

「本氣で言つてるのか。それ」

睨み付けて言つてやつたのと、担任教師が教室の扉を開いたのがほぼ同時だった。

担任教師は教室の異様な雰囲気に気づいたのか、一度立ち止まり教室中を見回して口を開く。

「なんだ、何かあつたのか」

「別に、何でもありません」

すぐさまそう答えたのは春名だ。担任は溜息を吐くと、生徒達に席に着くよう促した。空は席に着く前に一度春名を睨んだが、春名はそしらぬ顔で空の視線を無視した。空の言葉など、何も気にしていなかのように。

放課後になつた。終礼を終えるとすぐに、春名^{はるな}光は教室を出た。余り長く教室に居たくなかった。教室は居心地が悪い。

朝、高橋と喧嘩のような騒ぎになつたからではない。朝倉に自分の過去を騒がれたからでもない。教室に限らず、春名にとって居心地のいい場所などどこにもない。自宅にもどこにも、心安らげる場所は、もうどこにもありはしない。

ゆづくつと階下へ下りると、春名は靴箱へ向かう。玄関の周りに

は帰宅する生徒以外にも、今からクラブ活動へ向かうと一田で分かる生徒達もいる。

自分の靴を床へ下した時、不意に後ろから声をかけられた。

「あの、春名君」

春名が振り向いた先に、クラスメートの女子が立っていた。背が低く、おとなしい女生徒だ。余り他人に興味のない春名だが、彼女の名前は覚えていた。飯田倫子だ。同じクラス委員の朝倉とともに仲が良いので覚えていた。彼女は委員会があるとき、いつも必ず朝倉を待っている。その飯田が一人でいるのは珍しい。そう思いながら春名は口を開く。

「何？ 急いでるんだけど」

特に急ぐ用事はなかつたが、春名はそう冷たく言った。そんな春名に、飯田は怯えたように目を泳がせる。だが、春名の前から逃げ出すようなことはせず、決心したかのように春名と田を合わせた。

「あの、一つだけ、聞きたい事があるの」

か細い声でそう言われ、春名は次の言葉を待つた。

「春名君。今スケートやつてないんだよね。それはどうして？ どうしてやめたの」

一瞬胸に氷の刃が突き刺さったような気がした。春名は無意識に胸元のシャツを、片手で握りしめる。だが一瞬の動搖は、すぐに冷たい波にさらわれたように静まった。

「そんなこと聞いてどうするの」

逆に聞き返されると思わなかつたのか、飯田は言葉を探すように口元へ手を当てる。

「……私、あなたのファンだったの。だから、聞いてみたくて。別に騒ぐつもりはないし、誰かに話すつもりもないから。本当よ」

春名は溜息を吐いた。彼女の言葉で分かつたのだ。雑誌を持つてきたのは十中八苦彼女だと。朝倉を使って、春名が本当に雑誌中の春名と同一人物かどうか、確認したのだ。

別におかしくもないのに唇の端が上がり、口元だけが笑いの表情

を作る。

壊してしまったかつた。彼女の中の自分の像を。彼女の中にある
フィギュアスケーターの春名光はるなこうという人物を。

「嫌になつたんだ」

唐突にそう言った。

「え？ どういうこと」

驚いた様に聞き返した飯田に、春名は続けた。

「嫌いなんだよ、スケート。だからやめたんだ。それだけ。……もういいだろう」

そう言うと春名は靴を履き替え、その場に立ち尽くしている飯田を置いて外へ向かう。

飯田は春名の答えに何も言わなかつた。言えなかつたのかかもしれない。これで、彼女の中の自分の像は壊れたのだろうか。分からぬ。分からぬが、彼女を傷つけたのは確かだ。春名が答えを返した瞬間、彼女の顔が確かに歪んだから。

そんなことをしてどうすると、自分の中で問う声がする。しかし春名はその声を、心の奥底へ押し込んだ。

第二章 赤い教室

見上げると綺麗な青空で、見える範囲に雲はない。清々しい春の陽気に、高橋空は心躍らせ登校した。下駄箱で靴を履き替え、職員室の前を通りた時である。クラス委員長の春名光の後姿を発見した。そのせいで昨日の怒りが戻つてくる。せっかく良い気分だったのに台無しだ。

「おひつ、春名」

空は春名を指差すと、大声をあげた。その声で春名は後ろを振り向き、空に田をとめたようである。空は春名に駆け寄つて、開口一番こう言つた。

「お前、よくもノコノコ俺の前に姿を現したな。どういう神経してんだよ」

近くにいた生徒達が何事かと空と春名を見比べる。だが、空は興奮していく気づかない。春名は疲れた様に溜息を吐いた。

「どういう神経つて……。学校なんだからいて当たり前だろ。お前こそ、なんでそんなに朝からテンション高いんだ」

そうかえされると思つていなかつた空は、一瞬言葉に詰まつた。犬のように低く唸る。

二人は一緒に階段を上りながら、言い争いを続けた。

教室のある四階まで続いた二人の言い争いは、教室の方から走つてきた副委員長の朝倉によつて止められた。

「あ、春名君。大変、大変なのよ」

走つてきた勢いをとめきれず、突つ込んできた朝倉は、その勢いのまま春名の腕を掴んだ。

「大変なの。大変なのよ」

それしか言わない朝倉に、春名が聞いた。

「何が大変なんだ？ それと……手、痛いんだけど」

春名の言葉に、朝倉は自分がかなりの力で春名の腕を掴んでいる

ことに気づいたらしい。驚いた顔をして頬を染める。だが気を取り直したように顔を上げ、口を開いた。

「ごめんなさい。それより、大変なの。教室が真っ赤なの」

「教室が真っ赤？ 何だそれ。どういうことだよ」

今まで黙っていた空が朝倉に聞く。朝倉はその声で、初めて空が春名の横にいたことに気づいたらしい。

「あら、高橋いたの……あ、紫藤も」

「おーす。おはよう」

空はその声に振り返る。紫藤海がこちらに近づいてきた。

「何や、朝倉。朝から春名にアプローチか」

ニヤニヤ笑いながら言われた言葉に、朝倉は顔を顰めた。朝倉は海の言葉を無視して、春名を促す。

「とにかく来て。あんたたちも」

そう言つた朝倉は教室に向つて走り出す。空たちは顔を見合せたが、すぐに後を追つた。

教室の前にはクラスメート達はもちろん、他のクラスの生徒までが、教室の入り口附近に集まっている。皆教室の中を覗き込んでいるが、中に入る様子はない。

「何だよ。どうしたんだよ」

空は仲の良いクラスメートの久保を見つけ、声をかけた。

だが久保は無言で空の背を押すと、教室の中が見える位置まで押しあつた。教室の入り口まで来た空は、まずいつもとは違う臭いをかいで顔を顰めた。^{くね}臭い。だが嗅いだ事のある臭いだ。

そして横の人に押されながらもう一步踏み出した空が見たのは、朝倉の言葉通りの光景だった。

「真っ赤だ……」

空はそう呟いた。床も、椅子も、机も、赤くなっている。壁の一部や白かつたカーテンも、その被害を受けていた。まるで大量の血が飛び散ったようだ。

一体誰がこんな事……。

「酷いな……」

いつの間にか横にいた春名が呟く。空は春名を見た。春名は眼鏡の奥の瞳を細め、教室を凝視している。空ももう一度、視線を教室に戻した。

一瞬本当に血かと思ったが、よく考えればそんなわけがない。血なら乾けばもっと赤黒くなるだろう。それに教室の床の殆どが、赤くなっているのだ。こんな大量の血をばらまけるはずがない。それこそ大量殺戮でも犯さなければ無理だろう。

教室にぶちまけられた色は鮮やかな赤い色。そして、この鼻を突くような臭いには覚えがあった。

「コレはアレやな。ベンキやな。酷い臭いや」

春名とは逆隣から、関西弁が聞こえた。空はそちらに顔を向け、話しかけた。

「誰がこんな」と……」

「おいお前ら。そこで何をしている」

背後から聞いた声に口をつぐんで、空は振り返る。担任の黒田が、こちらに向かつて来る姿が見えた。空たちを押しのけ、黒田は教室の中を見て息を飲んだ。黒田は不機嫌な顔を、近くにいた春名に向ける。

「春名。コレはどういってんだ」

「分かりません」

黒田の怒気のある問いに、春名はそつなく答えた。それに怒りをつのらせたのか、黒田は顔を紅潮させる。

「この教室の有様は何だ。え？ 春名」

半ば怒鳴る様に言つた黒田に、春名は恐れる風もなく簡潔に答えた。

「僕には分かりません。さつき教室に着いたばかりなので」

黒田はフンと鼻を鳴らす。

「春名。確か一昨日教室の鍵をなくしたんだったな。そのせいじゃないのか？ コレは」

春名は黙つて担任教師を見返す。

「何故黙つている。もしかして鍵をなくしたと言つていたのは嘘で、本当はお前がやつたんじゃないだろうな」

余りの言われよう、返す言葉を失つたのだろうか。春名は何も言わない。そんな春名を押しのけるようにして、空は黒田にくつてかかつた。

「先生！ そんな訳ないじゃないですか。春名は俺たちと一緒にさつき教室に着いたばかりだし、昨日は俺たちより早く帰つてるんですよ。そもそも、春名がこんなことするわけないじゃないですか。クラス委員長なのに」

大声を張り上げた空の横から、海も教師に言つ。

「そうですよ先生。とりあえず今やらなあかんのは犯人捜しやなくて、この教室をどうにかすることぢやいますか」

空と海の言葉に、黒田は押し黙つた。

その時、廊下の向こうから新たな声が教師を呼んだ。

「黒田先生。山下先生が呼んでます」

「ああ、坂木」

空たちの視線を浴びながら、空たちと同じ制服に身を包んだ長身の少年がこちらに近づいてくる。

空はその人物を知らなかつたが、その人物が三年生であることは分かつた。制服のネクタイが、三年生の学年色である緑色をしていたからだ。ちなみに一年生は赤、空たち一年生は青色のネクタイである。

長身の少年は黒田の前まで来ると、穏やかな笑みを浮かべた。

「山下先生から伝言です。今から緊急の職員会議を開くから、すぐに職員室に戻るようのことです。この教室は使えないでの生徒は視聴覚室で自習をさせるよう言われました。僕が教室の鍵預かつてきましたから、皆を連れて行きますよ」

「ああ。悪いな坂木。後頼む」

そう言って黒田は空たちを見向きもせず、そそくさと職員室へ向

かつた。

空は傍らにいる海の制服の裾を掴んで、引っ張った。

「なあ。あの人誰？」

小声で言つた空に、海は呆れたように小声で返した。

「はあ？ 坂木先輩やう、生徒会長の。入学式のとき前出て喋つとつたやん」

「そうだっけ？」

空は顔を坂木の方へ向け、首を捻つた。入学式の間中、眠くてあまり内容は覚えていないのだ。坂木のことが記憶に無いのも仕方がないだろう。

その坂木は黒田が廊下を曲がつて行つたのを確認したあと、教室のドアへ向かつた。

中を覗くだけかと思つたら、そのまま教室の中に入つてしまつ。誰かがあつと声を上げたが、坂木は気にした様子も無く、教室のほぼ中央の位置まで机を避けながら歩いていった。

教室中にぶちまけられた赤いペンキはもう完全に乾いているらしく、坂木の履いた上履きに赤い後を残すことは無かつた。

立ち止まつた坂木は一度ぐるりと教室中を見回したが、ふと何かに気づいた様に一歩ほど歩き、空たちが見ている戸口を背にしゃがみ込んだ。何かを見つけたようだ。

坂木が立ち上がり戸口を振り返つた。

「これ、この教室の鍵だよな」

「え？ でも鍵は私が職員室へ返しました」

坂木の声に答えたのは朝倉である。空のすぐ後ろから声が聞こえたので、空は朝倉を前に出すよつに、脇へ下がる。

「でも朝倉。それは予備の鍵だろ？」

そう言つたのは春名で、朝倉はほつとした顔になる。

「そうか。じゃあアレが……」

「失くしたはずの鍵つてわけか……」

何故教室の中に力ギが落ちていたのだろう。空は不思議に思つた。

昨日の時点であんなところに鍵など落ちていなかつた。それに春名は鍵を探して、クラスメート全員に鍵の所在を聞いていた。鍵がなくなつていたことはクラスメート全員が知つてゐる事になる。鍵が教室のほぼ中央に落ちていれば、誰か一人くらいは気づいていたはずだ。

坂木はゆっくりとした足取りで、戸口まで戻つて來た。そこで初めて気づいた様に、春名を見る。

「あれ、春名。お前のクラスだったのか」

「はい。坂木先輩」

春名は相変わらずの無表情で頷いた。どうやら春名と坂木は面識があるらしい。

「これ、このクラスの鍵だよな」

春名は坂木に鍵を差し出され、受け取つた。空はそれを横から覗き見る。

「本当だ。うちのクラスの鍵だ」

春名ではなく空がそう漏らした。春名の手の平に置かれた鍵にはプレートが付いており、そのプレートにはマジックで一年二組と書かれていた。空の予想に反して、鍵には何処にも赤いペンキがついた様子は無い。薄汚れてはいるが、それは前からだ。

「さつき失くしたって言つてたな。その鍵」

坂木が言い、春名が頷く。

「はい一昨日。でも教室は全部見て回つたのに、なんであんなところに落ちていたんだろう」

春名の言葉に、空も考える。だが、坂木があつさりと可能性を口にした。

「それは、教室をこんなにした犯人が鍵をここに落としていつたかもしくは置いていつたんだる。何のためか分からぬけど」

「でも……」

春名はそう呟いて、一旦何かを考えるそぶりを見せた。その後、近くで様子を窺つていた朝倉を見る。

「朝倉。教室の鍵は閉まつてたんだね」

「ええ。朝教室の前まで来たら、何人かがここでたむろしていたの。聞いたら鍵が閉まつていて教室に入れないって言うから、私が予備の鍵を取りに行つたのよ」

この学校では、教室の鍵を職員室から取り出せるのはクラスの委員長と副委員長だけだ。春名は考え深げに額に手をあて、口を開く。

「本当にカギは閉まつていた?」

春名のしつこい問いに、朝倉は素直に頷く。

「一度全部確かめたわ。窓も後ろのドアも。鍵を取りに行く前に」「そう」

それだけ言つと春名はまた黙つた。周りでは野次馬たちがざわついている。空は春名が何を考えているか気になつた。話しかけようとしたが、予鈴のチャイムの音に阻まれた。

「さあ、予鈴も鳴つたしとりあえず皆視聴覚室へ行こう。僕が遅刻になつちゃうよ。プリントが教室に置いてあるから。それを仕上げる様について先生からのお達しだ。復習プリントだから教科書無くても大丈夫だろう」「うう」

そんな坂木の言葉に、クラスメートの数人からえーと言つ声が漏れる。勉強しなくてよいと思っていたようだが、それは甘い。

クラスメート達がそろそろと、坂木の後ろをついて歩き出した。しかし春名は教室に目を向けたまま動かない。それに気づいた空が立ち止まって春名を呼んだ。

「おい、春名。何やつてんだ。早く来いよ

「ああ、鍵閉めていくから

「鍵?」

空は春名の方へ戻る。春名はその間に、ドアを閉じた。先程坂木から手渡された鍵を、鍵穴に入れると、なんの抵抗も無く音を立てて鍵は閉まつた。

「閉まつたな……」

春名がそう呟いたのに、空は眉を寄せた。

「何言つてんだ。当たり前だろつ

せりあつせと行くぞと春名の背中を押しながら、空は内心首を傾げた。春名は一体何を考えているのだろうかと……。

空が春名に抱いていた怒りは、この出来事ですっかり消え失せてしまっていた。空がそのことに気づいたのは、もう随分たってからのことだった。

その当時、とても大きく見えたスケートリンク場に、彼は両親に連れられてやつてきた。親戚の家に行き、自分が両親の本当の子でないと知つて以来、彼はずつと塞ぎ込んだままだつた。そんな彼を中心配して、両親は気晴らしになればと、家の近所にあるスケートリンクへ彼をつれて来た。

まだ時間が早かつたせいか、リンクの中にいたのは少女一人だけだつた。その少女は妖精を彷彿とさせるような衣装に身を包み、リンクの中を軽やかに滑つていた。

その姿を目にした彼はしばらく口も聞けずに、その少女を見つめていた。リンクの中で滑る少女は優雅で、見ているものを惹きつける。度々ジャンプをして見せる姿は、まるで本物の妖精がはしゃいでいるように見えた。

『すごいな、きれいだな』

小さな彼を抱き上げていた父が、瞬きも忘れるほど見入っている彼にそう声をかけた。彼は頭をめぐらせ、父を仰ぎ見た。

『あのお姉ちゃんヨウセイさんなの?』

目を輝かせて聞く彼に、父は苦笑いを返す。逡巡の後、父はこう言つた。

『いいや。あの子は妖精さんじゃないよ。あの子はフイギアスケートの選手なんだ』

『フイギアスケートってなに?』

彼の問いに、父はリンクで滑る少女を指差す。

『アレのことだよ。そうだ、興味があるならやつてみないか?』

父がいいことを思いついたと言うように、声を上げる。だがそれを、傍らで黙つて聞いていた母が止めた。

『何言つてるんですか、あなた。この子は喘息持ちなんですよ。出来るわけないじゃないですか』

諫めるように言つ母に対し、父はおおらかに笑う。

『なに、大丈夫さ。この子にやる気があるなら、病氣にだつて負けやしないさ。それに喘息の発作が起こるのは精神的部が大きいと医者も言つていただろう』

『でも……』

まだ渋る母を置いて、父は抱いていた彼をあらし、目線を合わせるようになんがんだ。

『どうだい、やってみるかい』

彼は父の言葉に、首を大きく縦に振つて答えた。

『僕やってみたい。やらせて、お父さん』

これが自分の、最初で最後のわがままだつたのかもしれない。

彼はそう考えた。小さな自分とまだ若い両親の近くに彼は立つていた。コレは夢だ。初めて自分がフィギュアスケートに出会つた頃の夢。あの時父が言つたとおり、フィギュアスケートにのめり込むうちに、喘息の発作は自然と出なくなつた。

だが彼にとって一番嬉しかつたのは、フィギュアスケートの試合に、いつも両親そろつて応援に来てくれるこだつた。どんなに小さな試合でも、忙しい仕事の合間を縫つて、彼の両親は見に来てくれた。そして大会に勝つと両親は惜しみない賞賛を与えてくれるのだ。

彼は次第にこう思う様になつていた。自分がスケートを続け、名を上げていく限り、両親は自分を見捨てはしない。自分が価値のある人間でいる限りは、親戚連中も何も言わない。両親が自分を引き取つてよかつたと思わせるような人間で、居続けなければならないと。彼は堅く心に誓つたのだ。

それなのに……。自分は両親を失望させた。何の価値も無い人間に成り下がつた。両親はいつも辛そうに自分を見る。彼は心密かに怯えていた。いつ、両親が自分を捨てるのだろうかと。

不意に辺りが暗くなる。暗闇の中に立つ自分。コレは今の自分の心中なのだろうか。彼はそう思つのだつた。

教室中に赤いペンキがぶちまけられてから五日がたつた。翌日の中曜日には教室のペンキを落とす作業が業者によって行われ、休日明けの月曜日には教室はいつもと同じ姿を取り戻していた。

五日間で分かったことといえば、ばら撒かれたペンキが隣の空き教室に置いてあつたものだつたということくらいである。そのペンキは、数日前に演劇部の舞台セット用に購入されたものだつたらしい。犯人はそのペンキを、空たちの教室にばら撒いたのだ。

教室の後ろには小さなロッカーがついていて、殆どの生徒が机の中ではなくロッカーに持ち物を入れていた。それが幸いし、個人の持ち物にはさほど被害が及ばずにはいなかった。だが中にはその被害にあつたものもいたわけで、その中に高橋空の名もあつた。

「あー、ムカつく。何だってこんな目にあうんだ」

空は大きめの体操服に身を包んでいる。先ほどまで六時間目の体育の授業を受けていたのだ。たまたまあの日、体操服の入った袋を机の横にかけていたため体操服が被害にあつた。もうその体操服は使い物にならない。注文している体操服が届くまでと、学校から借りた体操服は、小柄な空のサイズより一回り大きいものだつた。氣を抜くとずり落ちてくる体操服を早く脱ぎたくて、空は体育の授業が終わると走つて更衣室に来た。更衣室の中はいつも汗臭い。さつさと着替えて出るに限る。

「まあ、災難やつたけど。お前が教室に忘れんかったら、こんな目にあわんかったんちやうか？ 半分は自業自得やん」

からかう様に隣に立つた海が言つ。さつさと着替え終わつた空は、着替え始めたばかりの海を見て唸る。

「うう。でも、あんなことになるなんて思わねーじゃん。普通」

「まあ。そうやな、一番悪いんは教室をあんなにした犯人やし。犯人誰かもまだ分からへんし」

「そうだよ、警察に届ければよかつたんだよ。そしたらさつさと犯人誰かもまだ分からへんし」

人捕まえてくれたかも知れないのにさ」

おおいくと

「まあ、アレやろ。多分犯人は生徒やし、大事にしたたら来年の受験人数にも響くかもしねへん。学校は保守的やもんな」

「……あー。犯人わかんねーままうやむやになるんだううな。悔しうぎ」

空は乱暴に頭を搔く。着替えを終えた海は話を逸らそうとしたのか、別の事を口にする。

「そういえば、またさぼつとつたな。春名」

その言葉に空も頷く。空も氣づいていた。春名がいつも体育の授業に姿を見せないことに。

たまに姿を見せてても最初のストレッチだけして、その後はいつの間にか姿を消すのだ。クラスでもそれは話題になっていて、こんな噂もあるくらいだ。『春名は不治の病で、運動は出来ない』とか、『授業をサボつても何も言われるのは、親が大金持ちで、学校に多額の寄付をしている為だ』とかそういう内容で、どれも真実味は薄い。

本人に確かめるのが一番手っ取り早いのだが、それを聞く雰囲気が春名には無く、誰も真実は知らなかつた。

二人は連れ立つて更衣室を後にして、教室までの階段を上がる。今日はもう授業は無く、後は終礼をして終わりだ。

教室のドアを開けると、予想通り春名は教卓前の自分の席に座っていた。教室にはまだ春名しかいない。空と海は走つて更衣室まで行つたので、教室まで戻るのも一番早かつたらしい。

「春名。またサボつただろう。体育」

空が大声を出した。春名は戸口に立つ空たちを振り向く。

「……お前らに迷惑はかけてない」

「誰もそんなこと言つてねえだろ。お前入学してから一回もきちんと授業受けてないじゃないか、単位取れなかつたら留年だろ」

「……心配してくれてるのか」

意地悪な顔をして、春名が聞いた。空は頭に血が上るのを自覚す

る。

「だ、だ、誰がお前なんか心配するかー」

怒鳴つた後に、廊下からざわざわと多数の人が近づいてくる気配を感じた。空は口を閉ざす。着替え終えたクラスメート達が戻ってきたようだ。空と海はそれぞれ自分の席に座ることにした。

終礼も終わり、掃除タイムに突入した教室では箒を片手にした空が、イライラと床を掃いていた。終礼前に春名と言い争いしたことまだ尾を引いているのだ。人が心配してやつたのに、言いたいこといやがつて、結局体育をサボる理由も聞けずじまいだつたじゃないか。と、空はさらにイライラをつのらせる。

そして空はふと、掃いて集めたゴミが結構溜まつたことに気づいた。気分を変える様に、塵取りを持つている女生徒に声をかけた。

「飯田。こっちも頼む」

「あ、うん」

空に呼ばれて飯田は廊下で集めたゴミをゴミ箱に捨てる、空の近くまで寄つて來た。小柄な空よりももつと小柄な飯田は、大人しい少女だ。空が彼女の名前をフルネームで覚えられたのは、つい最近だつた。

飯田はゴミの前にしゃがみ込むと、ゴミを入れやすい位置に塵取りを持つてくる。その中に空はゴミを入れた。

一通り塵取りに、ゴミを入れた後、立ち上がつた飯田に、空は声をかける。

「ありがとう、飯田」

「え？ ああ、どう致しまして」

最初なぜ礼を言われたのか分からなかつたようだが、飯田はにっこりと笑つてそう言つた。

なかなか可愛い笑顔だ。

ゴミをゴミ箱へ入れて、机を元の位置まで並べ終えた後。空たち掃除当番の五人は、ゴミの入つた袋をだれが収集所へ持つていくか

を決めるジャンケンに、挑もうとしていた。

五人で円になり、全員で声を合わせる。

「じゃーんけーんほーいっ」

出された手は空からパーが五つ続き、最後の一人がグーを出していた。空はふと気づく。

あれ、なんで腕が六本あるんだ？

空が浮かんだ疑問に答えを出す前に、一人グーを出した人物が声を上げた。

「あー、負けてもうた。で、これ何のジャンケンやったん？」

悪びれもせず、そう言ったのは、無理やり割り込んでジャンケンに参加した紫藤海であった。空は頭を抱えたくなった。

「あー、紫藤。お前ついい奴だな。じゃ、お先」

掃除当番の一人である久保がにかつと笑って海の肩を叩くと、鞄を手に教室を出て行く。

「へ？ 何やねん、俺なんか良い事した」

「そりゃとつても。紫藤君ありがと」

「じゃあ、後よろしく」

などと口々に掃除当番のクラスメート達が帰っていく。後に残つたのは空と飯田と、ぽかんとした海だけだ。

「なあ、何やねん。皆そそくさと教室出ていったけど……」

「あの、紫藤君。言いにくいんだけど……」

「お前がジャンケンに負けたから、『ヨミ』を持つていいくことになったよ。お前が」

「へ？ あれ『ヨミ』捨て決めるジャンケンやつたんか」

今更なに言つてんだと、空は驚いている海に言いたくなつた。

「ええー、皆酷いわ。俺なんやはめられた気分」

「はめられたんじゃねえ。自分からほまつたんだろ。自業自得だからな」

「ひどいわー。うち。知らんかつてんもん」

よよよ、と海は傍らにあつた机に泣き崩れるまねをした。

それを見て、空と飯田は顔を見合させて笑う。しばらく笑った後、

飯田が言った。

「でも、紫藤君掃除当番じゃないし。ゴミ袋、私持つておりようか」

飯田が海を見上げるようになんか申し出てくれた。

だがそれを断つたのは海ではなく空だった。

「ああ、いって。あれ結構重いから。それにさつきも言ったように、こいつの自業自得だから」

「でも」

なおも言ことつのうとした飯田だが、今度は海がその声を遮つた。

「ああ、ホンマにええって。俺が悪いんやし、ちゃんと持つてくれ」

「あ、いた。リンゴちゃん。早く帰ろ、つよ」

教室の扉の方からそう声がかかつて、三人が口をやると、そこにはクラス副委員長の朝倉が立っていた。明るい朝倉と大人しい飯田はなぜか仲がいい。

「あ、うん。待つて」

飯田はそう言うと、海にゴメンねと謝った。飯田は机の上に置いていた鞄を取ると、待つていた朝倉のもとへ駆け寄った。ドアを出る前に一度振り向いて、空を見る。

「バイバイ。高橋君」

そう言って手を振ると、飯田は教室を出て行つた。空はその背に向かつて手を振り返す。その横で、海が羨ましそうな声を上げた。

「なんでバイバイ紫藤君はないんや。不公平やわ。いいなあ高橋モテモテで」

「なつ、バカ言つてんじゃねーよ。手を振られただけじゃねーか」

「でもー。高橋君限定やつたやん」

「そ、それはそうだけど。でも深い意味はないと思うぞ」「照れて赤くなつた空に、海は人の悪い笑みを見せた。

「照れんでもええやん。可愛いなあ。高橋君」

「いつも君つけて呼んでねえ癖に、気持ち悪い事すんな」

「いやーん。高橋君の怒りんぼ」

またもやなよなよと身体を動かす海は、すっかり空の反応を楽しんでいる。空はそれが分かつてわざとらしく溜息を吐くと、口を縛ったゴミ袋を手にした。それを海につきつける。

「さつさと持てよ。早く帰るぞ。今日は家で電話かけるんだから」「ああ、そやつた。早よ持つてくか」

空と海は明日訪ねる予定の施設に、空の家で電話をかける約束をしていた。

一人がかりでゴミ袋をじみ収集所に持つていくと、そのまま校門へ向かう。その時、近くから声がかけられた。

「お、紫藤と高橋じやん」

「久保。何？ 部活じやねーの」

先程まで一緒に掃除をしていたクラスメートの久保は、手に菜つの入ったダンボールを抱えている。

「部活だよ。俺生物部だろ。コレはウサギの餌なんだ」

空は納得した。収集所に行く手前の角を曲がると飼育室があり、そこにはウサギと鶏、そしてなぜかヤギが飼われている。久保はその飼育をしている生物部の部員だった。

「可愛いぜー、ウサギ。なんなら見に来る？」

「あ、えっと、遠慮しとく。俺、小動物って苦手なんだ」

嬉しげに誘ってくれた久保に悪いとは思いながら、空はそう言つて断つた。だが久保ばかりか、海までが意外そうな顔をする。

「ええ？ 高橋って小動物系だからてっきり好きだと思つてたんだけど」

そう久保が言えば、海もその言葉に頷く。

「おお、俺も思つとつた。あれか、同属嫌悪つてやつかいな」

「なにが同属嫌悪だ、失礼な。どうせ俺は背が低いし、童顔だよ」

「あはは、拗ねんなやー高橋。誰もそこまで言つてへんやん」

「そういう所が何か小動物系なんだよね。小さい犬が吠えてる感じつていうの？」

「だから誰が子犬だつづつの。ホントお前ら失礼だよ」

空はふいと顔を背け、さつと踵を返して校門の方へ向かう。

「あ、じゃあ、久保また明日」

「おひ」

後ろでそんな会話が交わされていたが、空は無視して黙々と校門を手指した。

空の機嫌が直ったのは、家についてからだつた。空は一階から自分の部屋へ電話の子機を持ってきた。緑園の電話番号が書かれたメモを持つて、子機のボタンを押す。

夕日の光が、西向きの窓から部屋へ入つてくる。一階のこの部屋から、夕日が良く見えた。海は西向きの窓に添えるように置かれたベッドの上に座つて、夕日を眺めていた。空がかかつたと声を出したので、そちらを見る。

空が繋がつたと声を出さずに顔だけ動かした。

「緑園ですか？ 高橋と申しますが……」

空は普段とは違い、やけに丁寧な口調で用件を告げる。何回か受け答えをした後、空は溜息と一緒に電話を切つた。

「なんやつて？ 緑園の人」

空と海がいた施設は緑園といつ名前だつた。空は施設の職員とした会話を簡潔に口にした。

「明日は忙しいらしいから、土曜だつたら来ていいつてや」

「なんや、延びてもうたな。まあ、しゃあないけど」

海ががつかりした様にそつもりす。空も気持ちは同じだつた。何だか拍子抜けしたような気分もある。緊張感が解けて一気に腹がすいてきた。

「あーなんか腹へつた。紫藤。夕飯食つてくだりつへ。母さんが張り切つてるんだ。可愛い男の子が来たつて」

「可愛いっていうのはちょっとあれやけど、迷惑や無かつたら『馳走にならうかな』

「迷惑じゃねえよ。俺言つちゃつたんだよね。もしかしたら紫藤が俺の本当の兄弟かも知れないって、だから余計張り切つてるみたいなんだ。息子がもう一人増えたみたいでうれしいらしいぞ」

「……そりや、こんなとこで、ぐうたらしてられへんな。手伝いにいつて来るわ」

海はそう言つて立ち上がつた。それにつられ空も立ち上がる。たまには母さんの手伝いをするのも悪くないと、そう思つていた。

時間はさかのぼる。

空がまだ教室で掃除をしている頃。春名光は図書室へ向かつて歩いていた。今日は委員会があり、春名はそれに出席しなければならなかつたのである。副委員長である朝倉はバレエの稽古があるので、欠席することになつっていた。

図書室へ行く途中。春名は体育教師の高田に声をかけられた。
「おい、春名。コレ高橋に渡しといてくれんか」

「え？ これ……生徒手帳ですか」

「ああ。更衣室に落ちていたんだ。お前同じクラスだらう。渡しといてくれ」

「はい……」

春名が生徒手帳をうけとると、そのまま高田はその場を去つていった。春名が授業に出ないことに、何か言う様子もない。

春名は手の平サイズの生徒手帳の間に、何かが挟まつていることに気づく。足を止めて生徒手帳を開いた。

「これ……」

挟まつていたのは、四つに折られた写真だった。この間空たちが見ていた写真だ。赤ん坊が三人写つた写真。

春名はしばらく、折り目のついてしまつたよれよれの写真を眺めたあと、最初になつていていたように四つ折りにし、生徒手帳に挟んだ。それをブレザーのポケットに入れると、春名は図書室へ向かう足を速めた。

図書室へ入ると、既に数名が席に着いていた。春名が何処へ座るかと辺りを見回した時、近くに人の気配を感じた。誰かが春名の肩に腕を回してくれる。

「よう、春名。どうだ、何か分かつたか」

耳に口を近づける様に春名に囁いてきたのは、生徒会長の坂木だった。春名は少し顔を顰めて、肩に回った坂木の腕を外せる。

「何のことですか？ 坂木先輩」

「何のことって、春名。隠さなくてもいいだろう。お前、この間の教室であつた悪戯のこと調べてるよな」

腕を外された坂木は、苦笑いを浮かべながらそんなことを言つ。綺麗な顔立ちをした坂木は爽やかな雰囲気を纏つており、女生徒はもちろんのこと、男子生徒や教師にも絶大な人気を誇る。成績も優秀で、スポーツも万能とくればなおさらだ。

春名は彼を学校に入学する前から知っていた。親戚筋のパーティで顔をあわせ、何度か話したことがあるのだ。誰に対しても穏やかな対応をする坂木は、春名の従兄弟たちと仲がよかつた。その従兄弟達がいくら春名を邪険に扱つても、春名に対する態度を変えることはない。そんな坂木がわざわざ事件のことを口にするとは思わなかつた。

春名は眼鏡を中指で押し上げて、相手をじっと見詰めた。

「調べてませんよ。疑われてはいますけど。鍵をなくしたのは僕つて事になつてますから」

「疑われてるから、調べてるんだと思ったけど。あの日教室の前で何か言いかけてやめただろう。何か気づいたことがあるんじゃないのか」

「気のせいじゃないですか」

春名は氣の無い声でそう言つたが、坂木は執拗に聞いてきた。その目は妙に真剣だ。

「そんなことないだろう。僕が鍵は犯人が置いていったんじやないかつて言つた時、お前、でもとかなんとか、何か言いかけてただろ

「う

春名は少し考へる様にしてから、口を開いた。

「それは、おかしいと思つたから……」

「何がおかしいんだ？」

坂木が少し不思議そうに聞く。春名は続けた。

「朝倉たちが来た時、教室の鍵はかかっていました。密室状態の教室の真ん中に、犯人はどうやって鍵を置いたのでしょうか」

「……鍵は二つあるだろう。鍵を教室に置いて、犯人は予備の鍵で教室のドアを閉めたんじゃないかな」

「そうですね。でも予備の鍵は用務員さんが持つていたはずなんです。その鍵で、最後教室の鍵を閉めたのは用務員さんですから。犯人が用務員さんから鍵を盗めたとは考えにくいんです」

「なんだ、用務員に話しを聞いたのか」

やつぱり調べてたんじゃないかといわれて、春名は肩を竦めてから話を戻した。

「……犯人は用務員さんが鍵をかけた六時半以降に来て、拾った鍵を使って教室の中に入った」

「まあ、そうだろうな」

「でも、その後どうやって密室をつくったのか……。それがあの時は解らなかつたんです。最初、先輩が拾つた鍵が偽物なんじゃないかと疑いました。犯人が本物に似た鍵をプレートにつけて教室に置き、本物の鍵で教室のドアの鍵を閉めた……」

「なる程、密室が完成するな」

坂木が納得したように頷いたが、春名は首を横に振つた。

「そう思つて確かめてみましたが、ちゃんとあの鍵で教室のドアの鍵は閉まりました。偽物でないとしたら犯人が用意した合ひ鍵で閉めた可能性が高いと思つたんです。でも疑問が残りました。あの鍵にどうしてペンキがついていないのか。鍵に赤いペンキが全くついていないのは、おかしいんです。ペンキが乾くのを待つて、犯人が鍵を教室に置いたとは考えられません。僕が犯人なら見つかるのを

恐れてやつやとその場を後になりますね

「それは……確かにそうだな」

「それにしても、先輩はなんでそんなこと気にするんですか」

春名の問いかに、坂木は顔を顰めてこう言った。

「実はあのペンキ、うちの部で使う予定だったんだよ。それなのに全部ぱあだる。腹がたつじやないか」

「あれ？ 先輩、演劇部ですか」

「いや。生物部の部長」

坂木の返事に春名は少し怪訝そうな顔をした。ペンキは確か、演劇部で使うことになっていたと聞いたのだが。考えたところで分からぬわけないので、坂木に尋ねてみる。すぐに答えが返って来た。「動物小屋の色がはげてきたから塗りなおそつと思つて、演劇部の奴らに頼んでたんだよ。一緒に買って来てくれた。まさか赤色のペンキを買って来るのは思わなかつたけど」「色指定しなかつたんですね？」

「ああ。適当にって頼んだからな。あーあ。春名が調べてるなら、犯人教えてもらおうと思つたんだけど。まだ謎つてわけか」「それは……どうでしょうね」

春名がそう呴いた。

その呴きは、坂木の耳に届くことはなかった。

第五章 第一の事件

彼は賞賛の中にいた。たつた今演技が終了し、彼は大きく息を弾ませながらも優雅に礼をする。

拍手が一層大きくなつた。

改心の出来だつたと自分でも思う。昨日の演技は一度もジャンプに失敗し、良い点は取れなかつたが、今日のフリーの演技ではそれを挽回することが出来たようだ。メダル圏内は外れていたが、十位以内には入れたかもしれない、彼は思つた。

客席から投げられる花束やぬいぐるみをいくつか拾うと、彼はリングの外へ行き、コーチと抱き合つた。

コーチとは彼が小学生の頃からの付き合いだ。このオリンピックの舞台に立つ為に、幾度と無く厳しい態度を取つてきたコーチも、今は満面の笑みを浮かべている。

採点を待つ間、コーチと小声で交わした会話を今でも良く憶えている。

『ノンちゃんが家でテレビを見ているはずだ。手を振つてやつてくれ』

ノンちゃんとは彼のコーチの一人娘で、離婚した妻に引き取られているはずだ。彼はコーチに言われるまま、声には出さず『ノンちゃん』と口を動かして、手を振つた。

コーチは妻と別れてからも、娘とはよく会つていた。事あるごとに娘の話題になるのはコーチの悪い癖だ。彼が東京から北海道へ行くことになつた時、コーチは大好きな娘が渋るのも聞かず、自分についてついてくれた。そのおかげで今の自分があるのだと彼は思つてゐた。オリンピックの最年少選手として出場した彼の順位は7位入賞となつたが、コーチはこう言つて励ましてくれた。まだ十五歳だ。これからいくらでものびる。四年後は必ずメダルを持つて帰ろう。そう彼に言つてくれた。

その時の「一チの笑顔を、彼は今でもはっきりと思い出せる。思い出すたびに、彼は胸が痛くなる。もつ見ることの出来ない、「一チの笑顔……。

その「一チの笑顔が遺影に変わった。いつの間にか彼は古い寺の前に立っていた。そこにはお焼香をする為の長い列が出来ている。小雨が音も立てず降り続く。

彼は急に寒気を感じて身を縮めた。先程まで寺の前に列をつくる喪服姿の人々眺めていた。その目線が下がり、いつの間にか彼は車椅子の上にいた。彼は思った。そうだ。葬式の日。自分は車椅子でこの場所へ来たのだ。

また夢を見ているのだろうかと、彼は思った。最近何故こんな夢ばかり見るのだろうか。

そんな疑問を感じながら、彼はこの次に起ることを考えていた。彼の後ろでは父が車椅子を押している。その横で母が、自分に傘をさしかけてくれていた。それでも、小雨は彼の手に当たり体温を奪っていく。悴んだ指が痛かった。

『待つてください』

寺を後にする彼らに声をかけたのは、自分と同じ年頃の少女だった。紺色の制服のスカートが、彼の前で揺れてとまつた。彼は俯いていた為、彼女の顔は見えなかつた。少女は彼らの前で頭を下げたようだ。

『寒い中、父の為にありがとうございました』

その言葉で、彼女が亡くなつた「一チの娘だ」という事が分かつた。「一チがノンちゃん」と呼んで可愛がつていた、「一チ自慢の娘。彼女が今、自分の前にいる。何だか変な気分だつた。こんな場所でなければ、彼も素直に会えたことを喜べただろう。今が「一チの葬式でさえなければ……。

「一チが生きてさえいれば……。

『私、あなたに伝えたい事があつたの』

彼女は彼にそう告げた。だが彼は顔を上げなかつた。上げられな

かつたのだ。コーチの死に、自分が深く関わっていたから。

『お父さんが亡くなる前にこう言つたの、自分が死んでも、必ず二人の夢を実現させてくれって。お父さん……、実の娘が目の前にいるのに、あなたのことだけ言つて死んじゃつた……。でも、それもお父さんらしいと思つて、私それだけ、どうしても伝えたかったの』二人の夢……。もう一度オリンピックへ出場し、今度こそ金色に輝くメダルを取ろう。そう言つていたコーチの顔が頭に浮かんで消えた。

彼はすうっと息を吸い込むと少しだけ視線を上げて彼女に言つた。

『約束するよ。一人の夢は必ず実現させる』

小さな声だつたが、彼女はちゃんと聞き取つてくれたようだ。彼の目に映る彼女の口元が、笑みを作つた。だが彼女の頬に涙の後を見つけて、彼はまた視線を下げる。

『早くケガを治して、また、前みたいに滑つて。お父さんが大好きだつたあなたの演技を、また私に見せてね』

そう言つて彼女は去つて行つた。このとき彼は知らなかつたのだ、自分がもう一度とスケートが出来ない体になつっていたことを……

木曜日の朝は曇り空だつた。天氣で気分が左右されるなんてことはありえないと豪語する高橋空は、開け放つた教室のドアの前で、思い切り顔を顰めた。

教室の空気が異様に重いのだ。教室にはクラスの半分以下の人数しかいなかつた。だがその中で、いち早く空の存在に気づいたクラスメートの女子たちが、あからさまに顔を顰めて何か小声で囁きあつてゐる。

感じ悪いなと空が思つた時、女子の一人が教室の端の一一番後ろの席で、机に突つ伏している男子生徒の元へ足早にかけていく。その男子生徒の周りには数人のクラスメートが立つており、いつもとは

違う冷ややかな視線を空に浴びせた。確かあの席は久保の席だつたはずだ。空はそんなことを考えながら、ただならぬ空氣の教室へ入ることも出来ずに、入り口の前でつつ立つていた。

「おおい、なにやつてんねん。はよ入れや」

後ろから空に声をかけてきたのは、どう考へても紫藤海に他ならない。

「紫藤」

振り向いた空の顔に、紫藤は顔を顰める。

「なんや、何かあつたんか」

よほど悲壮な顔でもしていたのか、空の表情を見ただけで、何かを察してくれたらしい。だが、説明しようにも、空も何が何だか分からぬのだ。

ガタン、と教室の端で音がした。見ると、机に突っ伏していたはずの久保が顔を上げてこちらを睨んでいる。どうしたというのだろう。つい昨日まで親しく話していた久保が、怒りを露に空を睨んでくるのだ。

「なんだよ、どうしたんだよ。久保。皆も」「だが空の問いに答える者は無く、久保は机を避けながら一心不乱に空の前まで来ると、空の胸倉をいきなり掴んだ。

「お、おい、久保。いきなりなにするんや」

驚きの声を上げる海には目もくれず、久保は空に怒鳴つた。

「なんで、あんなことしやがつたんだ。ええ？　なんであんな惨いことが出来るんだよ」

そう言つて久保は胸倉を掴んだまま、空を搖さぶり机に向かつて突き飛ばす。

空はその勢いのまま、机にぶつかり尻餅をつく。けたたましい音を立てて机も一緒になつて転がつた。女生徒の悲鳴が起る。

空には何がどうなつてしているのか全く検討がつかなかつた。ただ呆然と、荒い息を繰り返している久保を見上げた。

「何か言つことはないのかよ」

もう一度怒鳴る久保に、空も怒鳴り返した。

「あるわけねーだろ、何が何だか分かんねえのに、何を言えつてい
うんだよ」

急に怒りが込み上ってきた。何故学校へ来て早々、突き飛ばされ
なきやならないんだ。何も悪いことなどしていないのに。こんな理
不尽な事はない。

「しらばっくれやがって、お前がやつたのは分かつてるんだよ」

久保が苦々しげに吐き捨てた。空はそんな久保を見つめ、眉を顰
める。何が起こったというのだろう。久保の話は脈絡が無くて、こ
っちはさっぱり分からぬ。

空たちの近くで睡然としていた海が、我に返つた様に久保の肩に
手を置いた。

「お、おい、久保。一体何があつたんや」

「何があつたかだつて？ そんなのコイツに聞けよ

「俺は何も知らねえつづつてるだる」

空を示す久保に、空が吠えるように言つて久保を睨む。

「なあ、そんなピリピリせんとせ、ちょっと落ち着いて話してくれ
や。こつちは何がなにやら分からへんねん」

力を込めて久保の肩を握りながら、海がそう久保に訴える。久保
はそんな海に目を向け、苦しそうに顔を歪めた。

「こ、こいつが、トロ吉やカメ子を殺しやがったんだ」

殺したとは穏やかではない。指をされた空は訝しい表情を作る。

海は眉間に皺をよせ、久保に聞いた。

「トロ吉とカメ子つて誰のことや」

だが久保は、空を見る目に力を込めたかと思うと、未だに立ち上
がつていなかつた空に殴りかかるとした。それは誰の目にも明らかで、慌てて海はそれを止めにかかる。だが他のクラスメート達は、
誰一人として海に手を貸そとはしなかつた。

なんやねん、一体。海はわけがわからないまでも、何とか久保の
腕を引く。だが、もちろん久保は抵抗する。久保が腕を振るい、海

もまた久保に突き飛ばされてしまった。

派手な音を立てて机にぶつかった海を見て、空の堪忍袋の緒が切れた。

「てつめー。何すんだよ」

怒鳴つて立ち上がると、久保に掴みかかる。またもや女生徒から幾つかの悲鳴が漏れた。

「おい、やめろや」

慌てて起き上がり止めに入ろうとした海より早く、二人の間に割つて入った人物がいた。

春名だ。ノンフレームの眼鏡をかけた顔に珍しく、不機嫌そうな表情が浮かんでいる。

「何やつてるんだ。お前らは」

二人を引き剥がして、一人をきつい目で睨んだ。それだけで、空はびくりとして戦意を消失してしまう。それは久保も同様だつたらしく、両の腕を下ろし、うなだれてしまつた。だが久保はすぐさまキッと顔を上げ、空に指を突きつけた。

「こいつが悪いんだよ。こいつが。こいつがカメ子やトロ吉たちを殺したんだ。殺したんだよ……」

そう言つた久保の目から、涙が溢れてきた。立つていられないといふように、久保は膝を抱えて座り込んでしまう。

そんな久保を見下ろし、春名は咳く。

「カメ子とトロ吉つて確か……」

その咳き声が聞えたらしい。久保がそつだよと、嗚咽の合間に口を開く。春名は先を続けた。

「学校で飼つてるウサギの名前だつたな」

空はこんな時ではあるが、思わずつっこみたくなつた。なんでウサギの名前がカメなんだ。

「ウサギが殺されたのか？」

もう、久保は話せないと見てとつたのだろう。春名は成り行きを教室の隅で眺めていたクラスメートに声をかける。クラスメートの

一人、久保と仲がいい三宅が頷いて口を開く。

「そりなんだ。オレも久保に教えてもらつたんだけど、久保が朝ウサギの餌をやりに飼育小屋へ行つたら、ウサギが無残に殺されいたらしいんだ。この間の教室みたいに、ウサギ小屋が殺されたウサギの血で赤黒く染まつていたらしい」

空はその情景を思い浮かべて、背筋を寒くさせる。だが、それと自分と何の関係があるのか。

「ちょっと待て、何でそれが俺のせいになつてるんだよ。ウサギ小屋なんて行つてないぞ、俺」

空はそう怒鳴っていた。クラス中の視線が空に集まる。辺りは騒然となつた。ふと気づくと教室の入り口付近にも野次馬がいる。

「でも、久保が見つけたんだよ。ウサギ小屋の中にお前の生徒手帳が落ちていたのを」

三宅の声に空は戸口向けていた視線を逸らし、三宅に顔を向ける。「生徒手帳だあ？ 生徒手帳ならずつとポケットに……あれ」

空は生徒手帳を探すべくポケットに手を突っ込んだが、目的の物は何処にも無い。

「うそ、無い。何で……」

空の慌てた声に、久保が泣きはらした目を向ける。

「お前が落としたんだよ。カメ子たちを殺した時にな

「だから俺じやねーつて言つてるだろう」

「お前が言つてたんじやないか。小動物が嫌いだつて、だからつて殺さなくとも」

「違う、嫌いじやなくて、苦手だつて言つたんだよ。それにいくら嫌いだからつて、なんで俺がウサギを殺さなきやならないんだよ」「だからそれは小動物が嫌いだから」

「だから嫌いつて言つたんじやなくて、苦手つて言つたんだつて会話がループしている。そのことに気づいた空は、久保に反論した後黙り込んだ。

いつの間にかなくなつていた生徒手帳のせいで、厄介なことに巻

き込まれてしまった。そもそもいつ生徒手帳がなくなつたのだろう。まさか生徒手帳が歩いてウサギ小屋に行つたわけでもあるまいし。

「生徒手帳なら僕が持つてた」

空と久保を交互に見ながら、そう言つたのは春名だつた。空と久保、そしてことの成り行きを見ていたクラスメートや野次馬達が、いつせいに春名に注目する。

「何だつて？」

「だから、高橋の生徒手帳だつたら昨日の放課後まで僕が持つてたんだよ」

「な、何でだよ」

生徒手帳を落とした憶えがない空には思つてもいらない言葉だつた。皆が注目する中、春名は堂々と言葉を続ける。

「委員会に行く途中で、高田先生に会つて渡されたんだよ。高橋は更衣室に生徒手帳を落としていたんだ」

「ええ？ 僕全然気づいてなかつた」

「お前慌てとつたもんなあ。あん時」

海がそう茶化すように言つた。空は頭を搔いた。確かにあの時は大きすぎる体操服を早く脱ぎたくて、急いでいたけど。まさか生徒手帳を落としていたなんて。しかもそれに気づかなかつたなんて、自分の注意力散漫さに腹が立つ。気づいていれば、こんな言いがかりを受けずにすんだはずだ。しかも生徒手帳には、大切にしていた写真が挟んであつたのに。

「だったら、何で春名が持つているはずの生徒手帳が、ウサギ小屋にあつたんだ」

春名の言葉に驚いて、すっかり涙の止まつた久保がそう言つた。

「それは分からぬ。委員会が終わつて気がついたら、生徒手帳が無くなつていたんだ」

「無くなつてた？ 本当はお前が殺したんじゃないのか」

凄む久保に春名は恐れた様子もなく告げた。

「いや、僕はやってないよ。どういう経緯で高橋の生徒手帳がウサ

ギ小屋にあつたのかは分からぬけれど、犯人は高橋ではないと思う淡々と告げる春名に、久保はまたもや涙の浮かび上がった目を眇めた。

「じゃあ、一体犯人は誰なんだよ。カメ子、トロ吉……」
久保の悲しみにくれる声が教室に響いた。

その時校内放送が流れ、久保の鳴き声を一時消した。

『一年一組高橋。一年二組の高橋。至急校長室へ来なさい』
学年主任の声だ。空はつい縋るように近くにいた春名に向ける。春名はその視線を受けたからかは分からないが、空はひう言つた。

「僕も一緒に行くよ。どうせ、ウサギ殺しのことを聞かれるんだろう。きっと先生達も高橋がやつたんだって思つてゐる」

「俺はやつてない」

思わず怒鳴つた空に、春名は表情一つ動かさずに頷く。

「ああ、分かつてゐる。弁明する為にも、僕の証言が必要だらう」
春名の言葉に、空もようやく納得する。春名は空を助けようとしてくれてゐるのだ。先ほども、クラスの皆に宣言するようになんとこと言つう必要はなかつたのだ。黙つていれば、空の生徒手帳を春名が持つていたことなんて誰にも知られずにすんだ。自分が不利になるのを承知で、春名は皆に聞えるように言つたのだろう。

「ありがとう、春名」

教室を出て少ししたところで、空はそつと口を開いた。少し後ろを歩いていた春名にも声は届いたのだろう。後ろから声が聞こえた。

「別に。僕が高橋の生徒手帳を持っていたのは、高田先生が知つてゐるし遅かれ早かれ、僕にも疑惑は向くよ。その前の教室の事件も僕は疑われているみたいだし」

「え？ そうなのか。なんで」

驚いて空は春名と並んで歩くべく、足を止めて春名が追いつくのを待つ。

「僕がカギをなくしたと言つたから」

「それで何で春名が犯人になるんだよ」

「鍵をなくしたのは嘘で、鍵を持っていた僕が、夜に教室に忍び込んでペンキをぶちまけた」

「何で春名がそんなことしなきゃなんないんだよ

「……鬱憤晴らし？」

「何？ お前なんか鬱憤たまつてんの」

少し背の高い春名の顔を覗きこむようにすると、春名は顔を顰める。

「別に、先生達がそう思ってるだけだよ」

「なんで先生がそう思うんだ」

「うるさい」

春名がそう凄んだので、空は黙った。朝礼が始まることを告げる本礼が校舎に響く。おかげで、廊下や階段に人はいない。一階まで下り、職員室の奥にある校長室の前に着いた。

「行くぞ」

春名がドアをノックすると、ドアの向こうから入出を許可する短い返事が聞えた。

「じゃ、話してもらうで校長室であつた事」

放課後。空と春名は掃除も終わり、人気の無くなつた教室いた。海が二人に、校長室での話を聞きたいとせがみ、一人のけものなんて寂しいわと駄々をこねたのだ。海は一度言い出すと聞かず、空も春名も仕方なく海に校長室でのことを話し始めた。

校長室では担任の黒田と学年主任が壁際に控えており、重厚なデスクの前には校長が一人静かに座つていた。

担任の黒田は、春名まで一緒にいたことに驚きすぐに教室へ帰るようになつたが、春名はそれを拒否した。春名は空が呼ばれた理由

に、自分が関係していると主張した。

空はそれをはらはらと見ていたが、春名は動じた風も無く、退出する気配も見せない。校長は諦めて話を進めることにしたらしい。空に生徒手帳を見せ、君のだねと確かめた。

手渡された生徒手帳は所々に赤黒いしみがついている。これはもしかしたら殺されたウサギの血かもしない。そう思ふと空は生徒手帳を放り出したくなつた。だが生徒手帳に挟んでいた写真のことが気がかりで、空はそつと生徒手帳を開く。生徒手帳の見開きのページは学生証になつており、そこには確かに空の顔[写真]がついていたが、挟んでいた写真はなかつた。

空が確かに自分の物だと答える。黒田が何か言いたそうな顔になつたが、春名がそれを制するように教室で話したこと教師達に告げた。すぐに体育教師の高田が呼ばれ、春名の言葉を裏付けた。

空はあらかた話終ると、急に眉を寄せ声をあげた。

「でも、校長たち春名のことを疑わしいみたいに言い出すんだぜ。俺頭来て怒鳴つちゃつたよ」

空はその時の事を思い出して、机をドンッと拳で叩いた。

「なんて怒鳴つたんや」

海が好奇心にかられた目を空に向ける。

「春名が犯人な訳ねえだろ。頭固いな。犯人だつたらわざわざ自分分が不利になる発言するわけねえだろつて」

「ふむふむ。さすが高橋。男らしいやん」

「何が男らしいだ。校長達の印象を悪くするような発言して」
褒めるようなことを言つた海に、春名が眼鏡の奥から鋭い目を向ける。空はそんな春名に反発する。

「何だよ、悪いかよ。頭にきたんだからじょづがないだろ」
その言葉に春名は苦笑を漏らした。

「見た目と違つて本当に短気だな。高橋は」

春名が表情を崩すのは珍しい。空は一瞬返答に詰まつたが、春名

の言葉に引っかかりを覚える。

「お、おひ。……って見た田と違つてひびひいの意味だよ」

「そり、言葉のまんまとちやうか。おまえぱつと見、なんやぬいぐるみみたいに可愛い印象やもん」

ぬいぐるみときたか。空は大いにむくれた。自分の容姿が可愛いと人に思われる時は知つていて。背も低いし、男にしては大きな田をしているし。少し前まではよく少女に間違われた。だからといって空はその事実を容認しているわけではない。カッコいい男になりたいと日々思つて。そのため空は、人に可愛いと言われるのが頗る嫌なのだ。

「誰がぬいぐるみだ。人をオモチャにしやがつて。俺は可愛いって言わるのが一番嫌いだ」

「そんなん知つてるわ」

海はそうあつさりと頷いた。空はだつたら言つなど唇を尖らせゐ。そんな様子も人からみたら可愛く見えるのだとこいつに、空は気づいていなかつた。

「はいはい、話しが違う方向へ向かつてるやん。あかんで空。話し逸らしたら」

そう言つて、海はにやりと笑つ。その笑顔の意味が分からず空は内心首を傾げたが、春名は海の笑顔の意味が分かつたようだ。

少し引きつったような声で、春名は海に向かつて言つた。

「……今の、洒落のつもりか？」

「へ？ 何のことだよ」

空が春名の言葉に、声をあげる。だが、海は大きく頷いた。

「おう。思いつきりシャレやん。なんや高橋分からへんかったんか」

「だから、こつしゃれなんて言つたんだよ」

短気な空が少し怒鳴るよつて言つと、海は情けないと言つよつて首を横に振る。

「だからやな。もう一回こつで、あかんで空、話し逸らしたら。こ

「分る? 之前の空と逸らしたらの逸らとをかけたんや」

ふふふ、と笑う海に空は声をあげた。

「わっかんねーよ。そんなの」

「低レベル」

空の反論の後すぐに、春名がさつコメントを出した。海は一人の言葉に、がっくりとうなだれてしまう。

「ガーン。低レベルって言われてもうた。あかん。関西人がこんなことでは、あかんわ」

海はあかんあかんと繰り返していく。空と春名は顔を見合せた。

「どうしよう。紫藤が壊れた」

「こつものこじだらつ」

春名が容赦ない言葉を吐くと、すかさず海がつっこみを入れる。

「何でやねん。俺はいつも壊れてへんわ」

「まあまあ、本当に話しがずれてるから」

「そやな。で、どうするんや？ これかい？」

あつさつと空の言葉に同意した海が、春名に向ける。

「やうだな……どうしようつかな」

顎に手を当てて考えるように田を伏せた春名の横で、空が声を上げた。

「調べよつぜ、俺たちで。絶対犯人捕まえよつ」

「どうやって」

意氣揚々と言い切った空に對し、春名の反応は冷たい。だが空は気にした様子も無く、不敵な笑顔を作った。そして春名の肩に手を置く。

「それを考えるのはお前の仕事。お前頭良いんだから、簡単だらつ。よっしゃ。やるべ」

さう言つた空は燃えている。これは本気で事件を調べる氣だ。春名と海は顔を見合わせて、溜息を吐いた。

ウサギの小屋に空の生徒手帳が落ちていたのは、明らかに事實だ。何者かが空に罪を着せようとしたといつことだらつ。そして、その手帳を持っていた春名も疑われてこる。この状況では空の言つとお

り、自分達で疑いを晴らす以外、道はないのかも知れなかつた。

第六章 つむぎと空

翌日。クラスメートの白い田を意識しながらも、空は淡々と四時間田の授業まで終えた。

昼休みに入り、にぎやかな食事タイムが始まる。仲の良い友人同士で、机をあわせて弁当を食べ始めた女子たちを尻目に、空は溜息を吐いた。いつも一緒に食事をしていた久保達とは今朝から一言も口を聞いていなかつた。久保達は今も空を見ないよう連れ立つて教室を出て行つた。

「高橋。今日弁当か？」

空が鞄から弁当を取り出したとき、海が声をかけてくれた。

「あれ？ 紫藤は行かなかつたのか。久保たちと」

隣に立つた海を見上げて聞くと、海は首を縦に振る。

「ああ、まあな。それより今日俺弁当ないねん。パン買いに行くからついて来てや」

お願いと付け加えられて、空はしじうがないなと弁当を持つて立ち上がる。だが内心少しほつとしていた。一人で弁当を吃るのは寂しそぎる。ただでさえ友人達に無視されて、気分がへこんでいるのだ。空は先を歩く海の後ろについて歩き始めた。だが教室を出る時にふと気になつて足を止めた。教卓の前にまだ春名がいたのだ。空はドアの縁に手をかけて、身を乗り出すよつに春名に声をかけた。

「春名。一緒に飯食おうぜ」

つい一人でいる春名を見ていられなくて声をかけたのだ。だが、どうせ春名は断るだろつと、空は思つた。いつも空が春名を気にかけると、春名は余計なお世話だといつよつな態度を取る。しかし予想に反して、春名は頷くと空の方へやつてきた。

「あれ、一緒に来るの？」

つい驚いてそう聞いてしまつた空に、春名は眉を寄せた。

「お前が誘つたんだろ？」「

「ああ、でも、いつもだったら断るじゃないか」「

「まあな」

そこまで言つて春名は声を落とした。

「調べるつて言つてただろ？ ウサギ殺し」

そこで、空は納得した。春名はその話をしたかったのかと。

「高橋、春名。早よ来いや。俺パン買いにいかなあかんねん。早よ行かな売り切れてまうやん」

教室のドアの横で立ち止まって話をしていた空たちに、廊下で待っていた海が痺れを切らしたように声をかけた。

空たちは今にも走り出しそうな勢いの海に追いつくべく歩き出した。

今日は本当に暖かい。青空に輝く太陽がとてもまぶしい。緩やかに吹く風には少しまだ冷たさが残っているが、日が経つにつれこの風も熱を持つていくのだろう。

教室を出た空たち三人は、購買部に寄つてパンを買った後、裏庭に出ていた。

春名が人目に付きにくい場所が良いと言つたためだ。校舎の壁に背をつけるようにして三人並んで座り、裏庭に設けられた花壇を見ながら食事をする。花壇にはオレンジ色の花がたくさん咲いている。この花の名前を空は知っていた。マリーゴールドだ。小学生の時、この花をペン代わりにして絵を描く授業があつたなと思い出していた。

「まず、何から調べるんや？」

紙パックのジュースを飲んだ後に、口を開いたのは海だった。言った後、海は三つめのパンを袋から取り出し、口をつける。空はからになつた弁当箱を包みながら、言つた。

「順番にいつたら教室の事件からだよな」

当たり前のこと言つたつもりだったが、空の言葉を聞いた春名

が驚いた様に口を開く。

「教室の事件まで調べるつもりか」

「え？ 何でだよ。あつたりまえじやん」

「でも、あれは疑われてへんやん」

「口を出した海に空は首を振る。

「春名が疑われてる」

春名を見て言つと、春名は眼鏡の奥の目を見張る。海は始めて聞いたというように、驚きの声を上げた。

「ええ、そうなん？ 僕聞いてへんかった」

「俺も、コイツから聞いたんだけど。先生達の態度から言つてもそんな感じだった」

空は親指を春名に向けて言いながら、昨日校長室にいた教師達の態度を、思い出していた。特に担任の黒田はあからさまに空や春名を犯人扱いしていた。

「へえ、だったらそつちも調べなあかんな」

納得した様に頷いた海に、空も頷く。だが、春名は慌てたようこの声を上げた。

「何でだよ。別にいいよ、そつちは」

「よくない！ あれのせいであの、体操服ダメにされたんだぜ。おかげであんなみつともない格好で体育しなきゃならないんだからな。犯人見つけて、とつちめてやらなきゃ」

拳を握り締めて力説した空に、海が脱力した声を出す。

「……春名のためやなくて、そつちかいな」

その言葉を聞いた空はきょとんとして、海と苦笑している春名を交互に見る。

「違う、両方だよ。一石一鳥だろ」

「……一石一鳥ね。でもまず優先させるべきは、ウサギの方だろ」

春名が言つと、空が何でと首を傾げる。

「教室の事件で僕を疑っているのは教師達だけだ。でも証拠がない。けど、ウサギの事件ではお前の生徒手帳っていう立派な証拠がある。

まあ、僕の証言のせいで、いやむやになつていいけどな。それが無かつたら確実にお前は無実の罪を着せられてた

空はその言葉を聞いて顔を引きつらせた。

「まあ、確かに今から調べるんやつたら、ウサギ小屋の方から調べる方が楽かもな。昨日のことやし、証拠になるもんがまだ残ってるかもしねへん」

海の言葉に、空は手をついて立ち上がる。掌を叩いて手についた砂を払うと、春名と海を振りかえった。

「よーし。飯も食い終わつたし、聞き込み調査に行こぜ」

空の言葉に不敵に笑つた海は、ノリの入つた袋を手のひらで丸めると、空を見上げた。

「よつしゃ、それやつたら久保には俺が聞くわ。お前と春名は飯田にでも頼んでウサギ小屋に入れてもらえや」

「ええ？ 僕ウサギ小屋はちょっと……」

さつきまで威勢の良かつた空の声が急に小さくなる。

「ウサギが殺された小屋が怖いのか」

からかう口調の春名を、空は睨んで否定した。

「誰が怖いつていうんだよ。失礼な奴だな。別に怖いわけじゃないよ」

「じゃあ、決まりだな」

あつさつそう言われて、空は一の句が告げなかつた。

「ところで、なんで飯田なんだ？」

隣をゆつくりと歩く春名に、空は歩調を合わせながら聞いた。空たちは今、教室へ向かっていた。海に言されて、飯田を探しているのだ。別行動の海は久保たちがいるはずの、食堂へ向かっていた。

「飯田も生物部だろ？ 確か……」

「そななの？ 紫藤の奴なんでそんなこと知つてたんだろう？」

「さあな」

四階に上がつて、教室へ向かうために角を曲がつた時、ちょうど

教室を出てくる飯田と田があつた。朝倉も一緒だ。

「あ、春名君」

「」の間春名にされた仕打ちを覚えていないのか、朝倉の春名を呼ぶ声は甘い。語尾にハートマークでもついていそうだ。

「私達これから、ウサギ小屋見に行くんだけど、一緒にいかない」

朝倉は春名に駆け寄つてくると、笑顔で春名を見上げて言った。空は思わず、春名を見る。「」ちらから頼む必要が無くなつた。朝倉の横に来た飯田は、顔をしかめて、朝倉の袖を引く。

「ちょっと、有紀ちゃん」

「いいでしょ、リン」「ちやん。春名君誘つても、春名君なら何か分かるかもしないし」

朝倉が、飯田を振り返る。飯田は硬い表情のまま、春名に目を向ける。春名はにこりともせず、飯田を見返した。そんな春名と飯田をなんとなく不審に思いながら、空は飯田に言った。

「なあ、飯田。俺も見てみたいんだけど。ダメかな。俺が疑われるの飯田も知つているだろう。無実を証明する為にも見てみたいんだ、頼むよ」

そう言つて空は飯田の前で手を合わせる。飯田は掴んでいた朝倉の袖を離すと、溜息を吐いて領いた。

「いいわ。行きましょう」

先ほど上つてきた階段をまた下り、四人は靴を履き替えウサギ小屋に向かう。昼休憩は残り一十分を切つていた。校門の脇を通り過ぎ、新校舎とテニスコートの間にある道を進む。

しばらくして飼育小屋を囲つている背の低いフェンスが見えた。フェンスの扉には鍵がかかっていたが、鍵は飯田が持つていた。
「生物部は皆持つてるの？ 鍵」

空が聞くと飯田は鍵をあけながら首を横に振つた。普段から大人しい飯田だが、やはりウサギが殺されたことがショックだったのだろう。顔色が悪く、いつも会話の端々に見せる柔らかい笑顔が今は無い。

「鍵は三つあって、部長と、週番の人気が持つことになつていて」

「週番?」

「ええ、ウサギと鶏の係りとヤギの係りで分かれているの。私はヤギの係りだからウサギ小屋の鍵は持っていないの」

「じゃあ、中は見られない?」

空の問いに飯田はまた首を振る。肩に垂らした髪が揺れた。

「小屋の中は外からでも十分見えるわ。それに今鍵は壊れているから、中に入りたいなら入る事も出来る」

そう言つた飯田を先頭に、飼育小屋のスペースへと入つていく。そのスペースには長年風雨に耐えてきたせいか、変色した飼育小屋があり、その小屋の前は結構な広さの空き地になつていて。たまに動物達を小屋から出し、ここで運動させるのだという。小屋の周りがフェンスで囲まれているのはそのためらしい。

空は一通り辺りを眺めたあと、小屋に目を向けた。小屋の中はコンクリートの壁で三つに仕切られている。正面にはコンクリートの壁はなく、フェンスで仕切られていた。飯田の言つた通り、中に入るまでも無く、外から中の様子が良く見える。

小屋の一一番右端にヤギが一匹入つており、その隣には鶏が数羽動き回つている。そして一番左端が、ウサギ小屋だったのだろう。中にウサギはいなかつたが、小屋の床が赤黒く染まっている。春名と朝倉はその小屋の前まで近づいていった。それを空と飯田は後ろで見守る。

「ひどいな」

春名が呟くように言つた声が聞こえた。朝倉が頷いた。

「六匹いたウサギが全滅だなんて……とっても可愛かつたのよ。ウ

サギ」

涙ぐむような声が朝倉の口から漏れた。しばらく無言だった。誰も何も言わない。学校中にウサギ小屋の事件は知れているはずなのに、周りには野次馬はない。皆余り関心が無いのだろうか。それとも休憩時間が残り少ないからなのか。そんなことを空が考えてい

た時だつた。春名が振り返り、飯田に聞いた。

「飯田、君は見たのか？ ウサギが殺されているといいわ」

飯田は頷いて、春名たちの方へ歩み寄る。空はそれを見送った。

「見たわ。週番だつたから。昨日の朝、久保君と一緒にここに来て見つけたのよ。ウサギの死体」

飯田はウサギ小屋を仕切るフェンスに手をかけ、握り締める。そんな飯田を悲しげに朝倉が見る。

「リンゴちゃん……」

「高橋の生徒手帳はどこに落ちていた？」

春名の声に飯田はフェンスから手を離し、指で小屋の真ん中辺りを指し示した。

「あの辺り。見つけたときはビックリしたわ。高橋君の生徒手帳が、こんなところにあるなんてって」

そう言つて飯田は空を振り返る。つられて朝倉と春名も振り返つた。

「高橋、お前もこっち来いよ。見ないと何のために来たのか分からぬいだろ？」

空は顔を顰めた。だが、少しでも中を確認した方がいいだろうと判断し、足を小屋の方へ向ける。本当はこんな所、近づきたくがないのだが。

空はゆっくりと小屋に近づき、朝倉と春名の間に立つた。その瞬間。

「ハ、ハックション。ハ、ハ、ハックション」

空は大きなクシャミを立て続けに繰り返し始めた。「コレでは見るどこひではない。

「だ、ダメだ……、ハックショ。やつぱ、無理」

「……高橋。お前、もしかして動物アレルギーなのか」

空は二三度首を縦に振りながら、クシャミを繰り返す。

春名は呆れたように溜息を吐くと、空の腕を掴んで歩き出した。

空はその動きにあわせて後ろ向きに歩くことになる。何度も転びそ

うになりながら、空は春名に連れられ、小屋を囲うフロンスの入り口をくぐった。そこからしばらく歩いてようやく立ち止まる。

「お、おい。ちょっと何で……」クシユ

「アレルギーがあるなら先にそう言つとけ」

春名に睨まれて、空はうなだれる。

「……悪い」

「でも、コレで分かつたな、久保。コイツが犯人じゃないって春名は空ではなく、その背後にそう呼びかけた。驚いて振り返つた先に、海と、海に腕を掴まれやつてきたらしい久保がいた。久保は空を見つめたまま何も言わない。

「あんな状態じゃ、ウサギを殺すなんて無理だ。見てたんだりつ。久保。コイツがクシャミを繰り返しているところ」

春名にそう言われ、久保は俯けていた顔をあげた。今日一度も合わなかつた目を合わせて、久保は空に言つ。

「……そうだな。あんな状態じゃ、無理だ」

「ホンマにな。ここまで聞えてたで、高橋の大きなクシャミ」

「アレルギーなんだ、しょうがないだろ」

「でも、コレで分かつたわ。高橋が小動物苦手つて言つた意味」

空は海の言葉に頷いた。やつとクシャミも収まってきた。

「見る分にはいいんだけど、半径一メートル以内に来るとクシャミが止まらなくてさ。触つたら蕁麻疹も出る。あーなんか痒くなつてきた」

そう言って、空は制服の上から腕を搔く。

「……だったら、始からそう言えればよかつたんじゃない？ そうすれば高橋、犯人から除外されてたでしょ」

もつともな言葉は、飯田と共に歩いてきた朝倉から発せられたものだ。

空はその言葉に、一瞬動きを止めた。そう言われば、そうかもしない。全く考え付かなかつたが。

「ほんまやな」

海が同意の言葉を示した時、久保は海につかまれていた腕を振つて、海から逃れると、地面に膝をつく。そして土下座の格好をした。

「悪かった高橋。疑つたりして。この通り」

それに慌てたのは空だ。空は久保に走り寄ると片膝をつき、久保の肩に手を添えた。

「やめろよ。あんな所に生徒手帳が落ちてたら、誰だつて俺が犯人だと思うよ。お前は悪くないって。な、だから顔上げろよ」

久保はゆつくりと顔を上げる。空が笑顔を向けると、久保も弱々しい笑顔を作る。

すると、隣で手を叩く音が聞えてきた。見上げると、海がなぜか拍手していた。

「おお。友情復活やな」

その言葉に苦笑して、空は久保に手を貸しながら立ち上がる。コレで万事解決とは行かなくても、少なくとも自分の疑いは晴れた。幾分ほつとした空だが、立ち上がった久保が放つた言葉に愕然とした。

「高橋が犯人じゃないとしたら、一番怪しいのは高橋の生徒手帳を持つていた春名だな」

久保が睨む先にある春名の顔は、至つて冷静だ。春名の領きにあわせて、眼鏡が太陽の光を反射して光る。

「そうだな。そう言うことになるな」

まるで人事の様に春名はそう口にする。久保の言葉に真つ先に反論したのは、朝倉だつた。

「ちょっと久保。変なこと言わないでよ。春名君が、そんなことするわけ無いでしょ」

だが、そんな朝倉に久保は冷笑を返した。

「でも、考えても見ろよ。コイツ、体育の授業サボつても教師に何も言われないんだぜ。教室の事件だつて疑われているのに、学校側はなにも春名に処分を下してない。今回の事件だつて、トロ吉やカメ子が殺されたつていうのに、先生達は犯人を捜そうともしない。

警察にも通報しなかつたんだ。俺達がどれだけ言つてもな！ 先生達はお前に気を使つて、何もしないんじやないのか。おまえはいつも特別扱いされてるからな

久保の言葉に、誰も何も言わなかつた。
ただ無言で全員の目が春名に向いた。

第七章 動き出した犯人

その日も雨が降っていた。

「コーチの葬式から早くも数日が経過していた。事故後、ようやく自力で起き上がるようになった彼は、半身を枕に預け、窓の外を見ていた。風に煽られた雨が窓にある。窓に張り付いていた雨粒をまきこみながら、つたいおちていく。

無言で窓を見ていた彼の耳に、ノックの音が届いた。

彼は窓から目を離し、ドアを見る。返事を待たずに、ドアが開いた。開いたドアから病室へ入ってきたのは、彼の主治医の女医と両親だつた。

『あら、起きていたの』

母親が笑顔で聞いた。だがその表情はどこか硬い。無理に笑顔を作っているのが、彼にはよく分かつた。

女医が彼のベッドの脇で、足を止めた。彼を見下ろし、口を開く。『今からあなたにお話があるのよ。聞いてくれるかしら』

女医の声は柔らかく病室に響いた。両親は彼に近づくのを恐れるかのように、ベッドから離れた場所で、彼と女医を見つめていた。彼はこの時、何となく女医が何を言おうとしているのか、分かつていた。

……そう。分かつてていたのだ。

彼は頷きもせず、女医を見上げた。女医の顔が少しほやけて見るのは、事故の後遺症で視力が落ちたせいだ。

『あなたの足のことなんだけど』

女医はそういうながら、彼の足に視線を送る。彼も自分の足を見た。骨が折れた足はギブスで固められている。

『……治らないんですか』

彼が小さな声で聞いた。女医ははじかれたように彼を見て、首を横に振った。

『いいえ、治るわ。日常生活に支障が出ない程度には』

それを聞いて彼は目を伏せた。女医の言葉は、彼にとって死の宣告と同等の意味を持っていた。それでも彼は少しの希望を胸に、この言葉を口にした。

『じゃあ、スケートは?』

彼はしつかりと顔をあげ、女医の顔を見た。相変わらずぼやけて見える顔が、悲しそうに歪んだのが分かつた。しばらく女医は赤く塗った唇を開いたり閉じたりしていたが、意を決したように声を出した。

『あなたには、もう……』

女医の言葉は、彼の母親の悲痛な叫びによって遮られた。

『やめて。お願ひ、もうやめて。これ以上この子を苦しめないで』

彼は絶望を胸に母を見た。

泣き崩れた母を父が支える。

彼は無意識に胸を手で押さえた。母の言葉が物語ついていた。彼にはもう、スケートをする事が出来ないのだと……。

『……この子には、スケートしかないのに』

鳴き声の中、そう呟くように漏れた、母の言葉。

ああ、ダメだ。

自分はもう何の価値も無い子どもになり下がってしまった。

両親は失望したのだ。

自分は両親の自慢の息子で、居続けなければならなかつたのに……

不意に胸が苦しくなつた。呼吸が激しくなり、彼は目を開けた。最近いつも繰り返し、あの時の夢を見る。そして決まって発作を起こすのだ。

子どもの頃治つたはずの喘息は、事故後再発した。

彼はぜえぜえと胸を上下させ、ベッドの傍らに置いてある棚に手

を伸ばした。小さな棚の上に置いてあった目覚まし時計に手が当たる。音を立てて目覚まし時計が床に転がった。

彼は目覚まし時計の置いてあった、棚の引き出しを開け、手で中を探る。

携帯用吸入器を手にし、荒い息がひつきりなしに出る口元に当た。音を立てて、吸入薬を吸い込む。

暗い室内に、しばらく吸入器の音が響いた。

朝が来た。

カーテン越しに明るい光が入ってくる。彼はベッドから起き上がり、二階にある自室を出た。夜明け前におきた発作は随分前におさまっていた。最近夜明け前に必ずと言つていいほど発作がおき、彼は寝不足の日々を送っていた。

彼は部屋を出て、階段の横を通り過ぎ、一つ目のドアを開けた。そこは脱衣所で、鏡がついた洗面台がある。そこに彼の歯ブラシが置いてあつた。彼は歯を磨き終えると顔を洗う。彼の疲れたような顔が、鏡に映つていた。その顔が少しほやけて見えるのは、彼が眼鏡をかけていないからだ。

部屋に戻り、制服に着替えると階下へ下りた。眼鏡をかけていため視界はぼやけているが、慣れた家ではさほど不自由さを感じない。階段をゆっくりと下りると、ダイニングルームに入った。広いダイニングの真ん中には白い大きなテーブルが置かれている。庭に通じる大きなガラスドアから、朝の光がさんさんと室内に入っていた。彼はドアを閉めた後、一度驚いた様に目を見開いた。

「母さん。いたの……」

ダイニングテーブルの前に座つてコーヒーを飲んでいた女性が、その声に顔を上げる。カップをテーブルの上に置いた。

彼女の前の席には、トーストの乗つた皿と、サラダ。そしてオレンジジュースの入つたコップが置いてある。それら全てにラップがかけられていた。

「おはよう、光。いたのとは『』挨拶ね」

母はいつも彼が起きる前に、仕事へ行つてゐる。その母がいたことに驚いて出た言葉を、母親は聞きとがめたらしい。

「『』めん母さん。ビックリしたんだよ。どうしたの。仕事は休み？」

「そう、やつとひと段落したから一連休貰えることになつたの。あら、光。あなた顔色悪いわね。また発作が起きたんじゃないの？」

近づいてきた息子を見て、母が顔を顰めた。色白の顔に無理やり笑顔を作り、春名光は言った。

「大丈夫だよ」

「大丈夫って顔じゃないわ。今日は学校お休みした方がいいんじゃない。病院へ行きましょう」

眉を寄せてそう言った母の前の席に着くと、光は首を横に振つた。

「だから、大丈夫だつて。病院には放課後行くから」

「ああ、今日は検診の日だつたわね。今日は第三土曜日だから……

学校は昼までね」

母親の言葉に光は頷いた。光の通う清秀高校は私立校で、各週休二日制をとつてゐる。公立の高校へ行けば休みだつた土曜日も、毎週第一、第三土曜日は授業があつた。

「それ、早く食べてしまいなさい。お母さん車で送つてあげるわ」

母親はそう言つて席を立つた。服を着替えていくのだろうか、それとも化粧をしにいくのだろうか。そんなことを考えながら、光はコップに被されたラップを取つて、オレンジジュースに口をつけた。本当は食欲などない。

しかし、母親がいる。

朝食は残せないと、光は思った。

良く晴れた空には、雲ひとつない。高橋空は紫藤海と並んで歩きながら、学校へ向かつてゐた。あと少しで校門の前に着くという所

で、空たちを追い越した車が校門の脇に止まった。

車のドアが開き、春名が下りてくる。運転席の人間と何か話をした後、ドアを閉めて走り去る車を見送った。

校門へ歩みを進めようとした春名は、一いち方に気づいたようだ。空は春名によつと手を上げて見せた。

「重役出勤やん。春名」

「まあな」

海がいうと、春名は眼鏡を中指で押し上げてから頷いた。三人は並んで校門を通り抜ける。

「今の車、運転してたのつてもしかして、お抱え運転手とか？」
空が興味を覚えてそう聞いたのは、春名にまつわる噂の一つを思い出したからだ。春名は物凄い金持ちの家のボンボンらしい、とう噂だ。

だが、空の予想を裏切る返事が春名からなされた。

「まさか、母親だよ」

「なんだ、運転手いないのか」

小声でそう言つと、春名が返事を返した。

「いるぞ、運転手。父親のだけど」

当たり前のことにそう言われ、空は海と顔を見合せた。

「やっぱ、マイシんち金持ちや」

「ああ、金持ちだな」

先程よりも小声で言つたので、春名には聞えなかつたらしい。

教室に入った瞬間、教室中が静まり返つた。また何かあったのかと、空は訝つた。その時、無言で海に袖を引かれ、空は海を見る。海は黒板の方を指で示した。

「なんじやこりやー」

黒板を見た瞬間、空はそう叫んでいた。耳を劈くような叫び声に、教室中の視線が空に集中した。だが、空はそんな視線に気づかず、黒板を凝視した。

『死ね』

『もう学校にくんな』

『地獄へ落ちる』

そんな悪口雑言が、黒板全体を埋め尽くすほどに書き込まれている。そして、その言葉に囲まれるように、一人の人物の名が黒板の中央に書かれていた。

春名光と。

「誰だよ！ こんなことした奴は」

空がもう一度そう怒鳴った。だが、誰も名乗り出る者はいない。空は、無意識に舌打ちして、クラスメート達を睨みつけると黒板消しを手にし、黒板に書かれた文字を消し始めた。海も一緒になって黒板に書かれた文字を消す。しばらく無言で手を動かしていた空は、不意に手を止めた。

「何だ？」

空は首を傾げた。空が気になつたのは、黒板に書かれた悪口の中の一つだ。

『人殺し』

変な悪口だな。ウサギ殺しを疑つていて普通人殺しなんて書くか？ その文字は一番春名の名前に近い位置に、春名の名前とほぼ同じ大きさで書かれていた。

「人殺しか……」

不意に後ろから声が聞こえ、驚いて空は振り向いた。

「びつ、びつくりした。急に背後に立つなよ、春名」

「……」

春名は空の声が耳に入つていなかのように、黒板に見入つている。春名が見ているのは人殺しと書かれた部分だ。空はその部分を黒板消しで素早く消すと、春名を見て言つた。

「気にすんなよ。春名」

「……ああ。大丈夫。こういつの慣れてるから」

空は春名の答えに、内心首を傾げた。慣れてるつてどういう意味

だろう。

そう思つて、質問をしようとしたが、担任教師が鳴り始めたチャイムと共に教室に入ってきた為に、聞くことは出来なかつた。黒板の文字は、ちょいと消し終わつた所だつた。

四時間目は体育の授業だ。空は今日こそ、春名を体育の授業に出させようと決意して春名の席に目をやつた。春名は立ち上がり、教室のドアに向かつて歩こうとしていた。その後ろから、クラスメートの男子が四、五人近づいていく。何をするつもりかと見ていると、男子の一人が春名の肩に思い切りぶつかつた。誰がどう見てもわざとだ。春名は踏ん張りがきかなかつたのか、机に縋りつく様に倒れた。

「うわ、こけてやんの。かっこわりい」

わざとぶつかつた男子が言つた。久保と仲が良い、三宅だ。三宅の横にいた久保は春名を見て、ニヤニヤと笑つてゐる。その周りからも笑い声が上がつた。

「お前ら。何やつてんだよ」

つい、そう怒鳴ると、久保たちの冷たい目が空に向いた。

「別に、ちょっとぶつかつただけじゃん。それをコイツが大げさにこけたんだよ」

三宅がそう言つと、久保も頷く。

「そうそう。こつとも体育サボつてる理由つて、超運痴だからだつたりして」

またもや久保の周囲から笑いが起つる。

「何言つとんねん、コイツ元オリンピック選手やぞ。運痴な訳ないやんか。春名がちょっと頭ええからつて。妬んで、嫌がらせするなんて、みつともないで」

その声に久保たちは振り向いた。入り口に近づいていた海が、珍しく怒つた顔をしてゐる。

「別に妬んでなんかねーよ。悪いことやつた人間が、のうのうと俺たちと一緒に授業受けてることが、我慢ならねーだけ」

三宅が海を睨んだ。海も睨み返す。

「それは、ウサギが殺されたこと言つてるんか」

「それだけじゃねえよ。教室の事件だつて、コイツがやつたって話しだろう」

「誰が、そんな根も葉もないこと言つたんだよ」

空が我慢できずには聞くと、久保が答えた。

「噂になつてゐるよ。学校中でな。行こうぜ皆。授業に遅れる」

そう言つと、久保たちは教室を出て行つた。後に残つた空は春名に駆け寄ると、まだ床に尻餅をついたままだつた春名に手を差し出す。さつきからずつと黙つたままだつた春名が、顔を上げて空を見た。顔色がやけに悪い。

「大丈夫か。春名」

「いや……ダメかも知れない」

強がる声が返つてくると思つていた空は、どう返事をしていいか分からなくなつた。

「どうしたんや」

海も駆け寄つてきて、春名の前にしゃがみこむ。

「顔色悪いで。保健室行くか？」

春名は首を横に振る。空は春名が、久保たちにされた仕打ちで、落ち込んでいるのかと思つていたのだが、どうやら違うようだ。春名の顔色は今や青さを通り越して白いといつた方がいいだろう。呼吸もだんだんと荒くなつてているようだ。肩が大きく上下している。とても苦しそうだ。春名の口から咳がこぼれた。喉からぜいぜいと苦しそうな音が鳴る。

「おまえ、喘息か？」

海が春名に聞いたが、春名は答えることも出来ずに、身体を折り曲げる様にして咳を繰り返している。

「コレはかなりやばいかもしない。空の頭の中で、そんな言葉が

浮かんだ時、海がいきなり立ち上がった。

「高橋。春名の鞄空けて薬ないか探してくれ。俺は保健の先生呼んで来るわ」

言つなり海は走つて教室を飛び出した。残された空は、春名の鞆を持つてくると、春名に確認する。

「薬つて、どれ」

すると、春名が顔を上げ、震える手で鞄を掴んだ。中から何かを取り出すと、口にくわえる。

「アシユ」と言う音が静かな教室に響いた。春名は吸入薬を全て吸い終わり、ゆっくりと田を閉じて近くの机に寄りかかる。

「遅いな、紫藤のやつ。何やつてんだ」
て、出て行つたきり戻つて来ない海のことを口にした。

「何かあつたのかな？」

「ああ、軽い発作だつたから。それに薬吸い込んでから、もう随分
たつてるし」

「そうか……遅すぎるな。紫藤の奴」

空は改めて、黒板上の壁に取り付けてある時計を見た。もう授業が始まつてから十五分近く経つてゐる。

「行ってみようか。保健室」

「お前、動いても平氣か」

心配して聞いたのだが、春名は案外しつかりとした調子で頷いた。

春名から頼み」とをされるなんて始めてかも知れない。空は少し
ドキドキしながら春名の言葉を持つ。い。

ドキドキしながら春名の言葉を待つた。

「後ろのロッカーに折りたたみ式の杖が入ってるんだ。それ取つて

「は？」
なんでそんなもん持つてるんだ。つていうか何に使うんだ

よ

「せつせつとぶつかつた時に、古傷やられたんだ。今だつて痛いんだから、この分じゃ歩けない。いいからさつわと持つて来いよ。グダグダ言つてないで」

「だからなんで、そんな偉そななんだよ。人に物を頼む時にはお願ひしますって、下手に出るものだらうが、普通は」

空は春名の古傷のことを深く考える前に、春名の言い様に腹を立ててしまった。そのせいだ、古傷とは何の事かと聞きそびれた。空は春名に取つてきた折りたたみ式の杖を渡して、組み立て終わるのを待つ。そして春名に手を貸して立ち上がりせると、とりあえず保健室へと向かった。

「え？ 階段から落ちたんですか

「そうなのよ」

保健室を訪ねると海はベッドで眠つていた。

「大丈夫なんですか」

「ええ。頭にたんこぶが出来てゐるけどね。それより、春名君。あなた顔色悪いわね。四時間目が終わるまでここで横になつていきなさい」

保険医はそう言つて、海が眠つてゐる隣のベッドへ春名を促した。空は授業へ出る様に言われ、もう半分以上終わつてしまつた授業へ出るべく、体育館へ足を向けた。

第八章 春名の見解

終礼が終わると、空は春名と海の荷物を手に、保健室へと急いだ。保健室のドアを開け、中を見ると、保険医の姿はなかつた。空は薬品臭い部屋を横切ると、ベッドへ歩み寄る。

仕切りのカーテンを開けると、海と曰があつた。海は丸椅子に腰掛け、ベッドの上で半身を起こしていいる春名と、話をしていたようだ。

「あ、大丈夫なのか。紫藤」

「おう、平氣平氣」

へらへらと笑つてそう言うが、頭の包帯が痛々しい。春名にも同様に聞くと、春名も大丈夫だと頷いた。その顔色が常に近くまで戻つていることにほつとする。

「お前急ぎすぎて足滑らしたんだう。間抜けだなあ」

心配した分だけ、少しからかいとなつて、空は海に言つた。だがその言葉を聞いた海と春名は、顔を見合せた。

「何だよ。どうしたんだよ」

不審に思つて尋ねると、海が口を開いた。

「それがさ、実は俺、足滑らせたわけやないねん

「は？ どうこいつことだよ」

「紫藤は、一階と一階をつなぐ階段の上で、背後から誰かに突き落とされたらしい」「

空の問いの答えを春名が引き取つてそう答えた。空は首を傾げる。

「なんで。誰がそんなこと」

「さあな。でもあの時ちょうど授業始まるチャイムがなつたところで、周りに人おらんかつたんや。それで目撃者がおらへんねん」

「先生には、勘違いだつて言われたそつだ」

「……つとここの学校つて事なけれ主義だよな。むかつく」

空は海が先ほどまで寝ていたベットに腰かけた。傍らに二人分の

鞄を置く。

「でも、勘違いつて事はないんだよな」

「なんや、お前まで疑うんか」

「疑うわけじやないけどさあ」

軽く睨まれて、空は人差し指で頬を搔きながら言葉濁す。

「紫藤のポケットにコレが入っていたんだ」

そう言つて春名が差し出したのは、ノートを手で半分にちぎったもののがうだつた。それがさらに半分に折られている。空は差し出された紙を受け取つて、開いた。

わざと崩したように文字が書かれていた。酷く読み辛い。空はそれを声に出して読んだ。

「Jの事件から手を引け……。Jの事件ってどの事件だよ」「空は紙に落としていた目を上げ、一人の顔を交互に見る。

「さあ、ウサギの事件か……」

「教室の事件。もしくはその両方か。どちらにしろ、調べられたら困る奴がいるつてことだらうな」

そう結論付けた春名に、海は頷いて肯定を示している。だが、空は少し引っかかりを覚えた。

「でも、何で紫藤を突き落とした犯人は、紫藤が事件を調べてるこ^トと知つてたんだろう。……つうかまだ何もやつてねえし」

「あー、アレかも知れへん。昨日の昼さ、久保たちに話し聞きに言った時、結構大きな声で言つてもうたんや。俺らがウサギ殺した犯人を捕まえたるつて」

「じゃあその時に、犯人もその場にいたかも知れないつてことか」空がいうと、まあそだらうなと、春名も頷いた。空は手にしていた紙をとりあえず春名に返した。その時、空の頭にふと疑問が過ぎつた。

「でも、犯人はどうやつてこれ、紫藤のポケットに入れたんだろう」海の顔を見ると、海は情けなさそうに口を開く。

「さあ、分からへんわ。俺、落ちてすぐに気絶してもうたみたいや

し。この紙がポケットに入つたことやつて、春名が気づいたがらいやし

「春名が？ どうして」

空が春名を見ると、春名はベッド脇の棚の上に置いてあった、海のブレザーを顎で示した。

「そのブレザーのポケットから落ちかけてたんだよ。この紙」

「ふーん。……そういえば、紫藤はどうやってここに運ばれてきたんだ」

今更ながらにそこには思ひ至つて、空は海に尋ねる。海に顔を向けて聞いたのだが、答えを返したのは春名だった。

「先生と坂木先輩が見つけて運んだらしい」

「なんで、知つてゐるんだよ」

訝つて空が問うと、春名は何でもない」との様に言つ。

「保険医に聞いたんだよ。気になつたから」

「へえ。でもさつき紫藤は近くにはいなかつたて言わなかつたか」「それはアレや。俺の背後つていうか、落ちる前に近くに人の姿が見えへんかつたつてだけで……」

「落ちてきた一階には、ちよつど職員室から出てきた先生と、坂木先輩がいたんだ。職員室と階段は近いだろ」

「ああそうか。なるほどな」

「でも、……あてが外れたな」

納得した空の耳に、春名の呟く声が聞こえた。良く聞き取れなかつた空はもう一度聞き返す。

「え？ なんて言つた今」

「いや、別に」

顎に手を当てて何かを考えているような春名は、やつけない返事を返す。だが、海が春名の思考を遮るように言つた。

「あてが外れた、つて言つたよな。今」

「……」

「何だよそれ、どういう意味だよ

空は座っていたベッドから身を乗り出して、春名に尋ねる。春名は少し言い辛そうな顔をしたが、二人の視線を受けて、口を開くことにしたようだ。

「……犯人は同じなんじゃないかと思つてたんだよ。教室の事件とウサギの事件」

「まあ、ありえることではあるわな。でも、なんでそれが、あてが外れたつていう言葉になるんや」

海の疑問はもっとともだと空は思つた。春名の言い分では、まるで今回の件で二つの事件が、別の犯人のせいかもしないといつているようではないか。

「はつきりとは分からぬけど。今回の事件の犯人は坂木先輩じゃないかと思つていたんだ」

いきなり核心を突いた春名の言葉に、空は声をあげる。

「……なんでさ。生徒会長だろ。ありえないし」

海も空に同意するように頷く。

「そうや。あのめつちや人望あるやん。そんな人が、教室あらしたり、ウサギ殺したりせえへんやろ。もし見つかったら今の地位全部アヤやん」

「ああ、それはそうなんだけど。あの人は明らかにおかしな態度を取つていたんだ」

「おかしな態度つてなんだよ」

空が尋ねると、春名は少し疲れたように溜息を吐いた。先程、発作を起こした春名を思い出し、空は少し心配になる。まだ、本調子ではないはずだ。余り話しあせすぎるのも、良くないかもしれない。だが、春名は顔を上げて、また話し始めた。

「……まず、最初の、教室にペンキを撒かれた方だけど。あの時、先輩が現れたのを覚えてるよな」

「ああ、誰も入ろうとしなかつた教室に一人でズカズカ踏み込んで行つたよな。でもそれがそんなおかしな行動つて言えるのか」

空はその時の生徒会長の行動を思い起こしながら口を開く。あの

時生徒会長は、臆することなく、床や机が真っ赤に汚れた教室に足を踏み入れた。

「違う。その後だよ。その人が見つけたのが何か覚えているか」

春名は空と海を交互に見比べて問う。空は春名に頷いた。

「鍵だろ？ 確か教室の真ん中辺りで、拾つてた」

「そう。問題は鍵なんだ。あの時何であんな場所に鍵が落ちていたか、疑問に思わなかつたか」

「確かに思つたわ。その前の日。春名がなくしたつて言つとつたから、何となく教室の床やら隅やらに目え光らしつたけど、あんなところに鍵なんて落ちてへんかつたもんな」

「でも、あれは犯人が置いていつたんだろ？」

空が言つと、春名は空を見た。

「何でそつと思つた」

春名が空にそう尋ねた。

空はだんだんイライラしてきた。もつといつづバッと確信に迫つた喋り方をしてくれないだろうか。春名は空や海に考えを出させようとしているのかもしれないが、空にはそれがとてももどかしい。だが、海は春名のもつたいぶつた話し方を余り気にした様子はない。考えるような顔をしながら、空より先に口を開いた。

「あ、生徒会長が言い出したんや。鍵は犯人が落としたか置いていつたかしたんやないかって」

空は覚えていなかつたが、春名が肯定したので、黙つておくことにする。

「そう、でももしそうだとすると、犯人はどうやって教室の鍵をかけたんだと思う？」

そう問われて、空は思いついたことを口にする。

「予備の鍵を使つたとか？」

「ああ、それしかないやろうな」

空の言葉に海も同意するが、春名は首を横に振つた。

「いや、それは無理だ。予備の鍵は僕がその日用務員さんに返して

から、用務員さんがずっと肌身離さず持っていたんだ。事件は用務員さんが教室の鍵を閉めてから後のことでの、予備の鍵を犯人は使う事が出来なかつた

空と海は顔を見合わせる。空は覚えていた。春名が教室にペンキが撒かれた日に、鍵をやけに気にしていたことを。きっと春名はある時すでに、何かに気づいていたに違いない。

「教室に鍵をかけるには、教室の外に出て鍵をかけなければならぬ。でもその鍵は教室に落ちていた。犯人は、密室状態の部屋からどうやって、教室を抜け出したんだろう？」

「ああ、もうつ。訳わかんねえ」

空が頭を抱えて喚いた。その声に顔を顰めた春名に、海が問う。

「で、結局春名は何が言いたいんや」

「坂木先輩が言つた、鍵は犯人が落としたか置いていったかしたという見解には無理がある。なのに、どうして先輩はそんな事を言い出したのか。それはもう一つの可能性から目を逸らしたかったんだと思うんだ。……一度どうやって密室を完成させたかは置いといて、考えてみよう」

「分かつた。でももう一つの可能性って何だ？」

空が問うと、海は椅子ごと体を揺らしながら、考え考え答えた。

「じゃあ、例えばやで。犯人は用務員さんが鍵を閉めに来るまで教室の中に隠れとつて、鍵を閉められたあと、ペンキを撒いて後ろのドアから鍵を開けて外に出たんや。後ろのドアの鍵は中から開けられるやろ」

「えー、でもそれだつたら、鍵閉まつてないじやん。後ろのドアは中からしか閉められないし。朝、鍵は全部閉まつてたつて朝倉言つてたる。春名がしつこいくらい朝倉に確認してたから俺憶えてるぜ。それに鍵はどうなるんだよ。あそこに鍵が落ちてた理由」

「えーっと。もともと落ちとつたとか。犯人が見つけて、分かりやすいどこに置いといてくれたとかー？ 親切な犯人さんやな……なんちやつて」

海はそう言つて舌を出した。空はそんな海に反論する。

「えー。でもさ、鍵が誰にも見つからず落ちてたとしたら、鍵にペンキがついているだろ?あの鍵にはペンキは全然ついてなかつたぜ。それにお前がさつきといったんじやないか。前日には教室に鍵は落ちていなかつたって。俺もそう思うし」

空がそう反論すると、海は顔を顰めて頭を搔いた。

「そりやんなあ。自分で言つてなんか変やなつて思つたもん」

海がそう言つたところで、春名が口を挟んだ。

「でも、高橋が言つた、鍵にペンキがついていないのはおかしいってこと、坂木先輩が言つてた二つの可能性にも当てはまると思わな
いか」

「なんで」

空は首を傾げた。ペンキを撒いた後に落としていれば、ついてい
なくとも不思議はないじゃないか。

「教室の床はペンキで真っ赤になつていただろ?足跡一つ無かつ
た。ということは、犯人はペンキを撒きながら、後退して教室のド
アまで戻つたんだ。その証拠に、教室のドアの前あたりにペンキで
全く汚れていない箇所があつた。犯人は最後にドアの前に立つて、
ペンキを撒いたんだ。自分が汚れないようにしなければならないか
ら、足元までペンキは撒けなかつた。もし、ペンキを撒いていると
きに鍵を落としてしまつたとしたら、鍵にはペンキがついているは
ずだ。鍵は教室の真ん中に落ちていたんだから、ペンキを全体に被
ついててもおかしくない。いや、むしろそっちの方がしつくづぐる
な」

言われて見ればその通りである。空はしきりに感心して、春名を見
る。眼鏡をかけているのはやはり伊達ではないと、空は感心した。
空には眼鏡をかけている人は頭がいいという、妙な偏見がある。

「そう言われればそうやな。じゃあ、犯人が鍵をわざわざ置いてい
つた場合は?……あ、その場合も一緒か」

海は自問自答するように言つた。空は何のことか分からず首を傾

げる。

「そう、その場合も同じだ。犯人はすぐさま現場を立ち去りたいと思うだろう。長く現場にいればいるほど、人に見つかってしまう可能性が高い。僕なら、すぐに逃げ出すだろうな。でも犯人がもし、鍵をわざわざ教室の真ん中に置いていったのだとしたら、ペンキが乾くまでの間ずっと待っていたことになる。そんなリスク、犯人は犯さないだろう」

「ほー、なるほどねー。お前あつたまいいな」

思わず感心して漏れた空の言葉に、嬉しそうな顔一つ見せず、春名は疲れたように溜息を吐いた。

「誰でも、少し考えれば分かる事だろう」

そう言つ春名に、空は自信満々で答えた。

「分からぬよ。そもそもそんな風に小難しく考えたりしないもんな。俺」

「はは。高橋らしいわ。ところで春名。それは分かつたけど、もう一つの可能性ってなんや。坂木先輩が俺たちの目えくらましたかった、もう一つの可能性」

海が空の最も聞いたかつた答えを、春名に要求した。春名は一呼吸置いてから話します。

「もう一つの可能性。……鍵は最初から教室には落ちていなかつた」
「はあ？ 何言つてるんだよ。あそこに鍵があつたから、坂木先輩が拾えたんだろう」

反論を口にすると、春名は首を横に振り、静かに言葉を紡ぐ。

「そもそも、坂木先輩はある場所で、鍵を拾つたのかな」

「何言つて……」

またも反論しようとした空の言葉を遮るように、椅子を揺すつていた体の動きを止めて、海が興奮気味に口を開く。

「そうか。そういうことか。俺たちは教室の入り口から坂木先輩を見とつた、坂木先輩は鍵を拾うときドアを背にして鍵を拾つたんや」
「だから、それがどうしたんだよ」

海が興奮している意味が全くもつて理解できないでいる空は、ちつとも面白くない。幾分不機嫌な調子で言つたが、海は氣づいた様子も無く話し続ける。

「だから、俺たちは見とつたけど、ちゃんと見てへんかったってことや」

「だから分かんねーつつの。俺見てたぞ、坂木先輩がドアを背に鍵を拾うところ……」

空はその時の情景を思い出して、途中で言葉を切つた。何となく海の言いたいことが分かつたような気がしたのだ。空が見ていたのはドアを背にしゃがみ込んだ坂木先輩であつて、鍵ではない。

「坂木先輩が鍵を拾う振りをしていただけて言うことか」

「そう。坂木先輩が鍵を持っていたんだ。そして教室に入つて、そこで鍵を拾う振りをする。だから、鍵にはペンキがついていなかつた。もともとそこにはなかつたものだから……」

「はー。なるほどなー。そういう訳か。坂木先輩がなんでその鍵を持つてたんかっていうのは、分からへんけど」

「そりや、犯人だからじやねえの。どつかで朝倉が落とした鍵を拾つて、丁度いいやつて」

「その可能性は高いかもしねしない。それにそう考えると密室の謎も解ける。坂木先輩が犯人と仮定するなら、坂木先輩は拾つた鍵を使つて教室に入りペンキを撒いたあと、教室に鍵をかけて教室を後にする。そして、何食わぬ顔で翌日教室の中で鍵を拾つた風に見せかけた……」

「おお、なるほどねえ。さすが春名。やつぱり頭良いな」

「でも、全部仮定の話しで、証拠は一つもない」

空の言葉に否定的な声を上げた春名に、空はお前が言い出したんだろうと噛み付くように言つた。春名は少し苦笑しただけだ。そんな二人を見比べて、海が口を開く。

「じゃあ次。ウサギ小屋の方はどうやねん」

「春名はそれも坂木先輩が犯人だと思ってたんだよな」

一人に頷き、春名は言った。

「ああ。高田先生から預かつた生徒手帳が無いことに気づいたのは、委員会が終わつたすぐ後だつたんだ」

言葉を切つた春名に空が先を促すと、春名は脱いでいたブレザーを手に取り広げて見せた。

「生徒手帳は右側のポケットに入れていたんだ。まず落とすはずはないのに、委員会が終わつてから無いことに気づいた。教室と廊下を一応見て回つたけど見つけることは出来なかつた」

「でもどうしてそこで坂木先輩が出るんだ」

空がそう聞くと、春名は空を手招きする。何だと訝しく思いながらも空は素直にベッドからおり、春名の座るベッドの脇に立つ。

そんな空に春名は普段滅多にしないような行動を取つた。春名は空の腕をとつて引き寄せる。空の耳に口を寄せたのだ。驚いて固まる空に、春名は囁く。息がかかつてこそばゆい。そんな二人を海は面白そうに眺めている。

「左のポケット見てみろよ」

春名はそう言つて空を離した。空は囁かれた右耳を擦りながらも、左手で左ポケットを探る。何も入れていなかつたはずだが、指に何かが当たつた。それを取り出してみる。

それは四つに折られた紙。少し厚くて硬い紙を広げる。その紙には小さな赤ちゃんが三人写つていた。

「何で写真がポケットに入つてるんだよ」

驚いた空に、春名は少し口元を緩めて言つた。

「僕のポケットに入つてたんだ。生徒手帳からそれだけ抜け落ちたんだろうな」

「ああ、そうか……つて、そうじやなくてつ。俺が言いたいのはどうやつてこの写真がこのポケットに入つてたかつてことで……」

「分からへんかったんか。高橋」

海がニヤニヤしながらそう聞いてくるが、空にはいつの間にこの写真がポケットに入つたか分からない。

「だから何でだよ

考へても分からぬなら聞くまでだと空は開き直る。春名は海を見て言つた。

「お前は気づいただらう」

「ああ。春名が高橋の腕を取つて耳に口を寄せた時、左手で高橋のブレザーのポケットにその写真を入れとつた。それが写真やつていうのは分からんかったけど」

空は呆然と春名を見やつた。春名は珍しくしてやつたりと呟つような顔をしている。空は全く気づかなかつた。春名に耳元で囁かれたことに気を取られていたのだ。

「今と同じようなことをされたんだよ。あの日坂木先輩に

「え？ ポケットに何か入れられたのか」

驚いて尋ねると、すかさず海がつっこみを入れる。

「ちやうぢやう。春名の場合は抜かれたんやろ。ポケットから生徒手帳を」

「ああ、なる程な。じゃあ、同じじやなくて逆つて言えよ」

少し恥ずかしくなつて空が春名にあたると、春名は肩を竦めてみせた。

「同じつていうのは、状況をさして言つたんだけど……」

ウサギ殺しのあつた前日の委員会で、春名は坂木に肩を組まれ、事件を調べているだらうと聞かれたことを話した。その時にポケットから空の生徒手帳は盗まれたのではないかと春名は言つのだ。あの日生徒手帳を手渡され、委員会が終わるまでの間、春名が接触した人間は坂木だけなのだ。

「まあ確かにそれで、高橋の生徒手帳が春名のポケットからウサギ小屋まで移動した理由の説明はつくな

「でも全て憶測で、証拠はない」

まあ、確かにと空は頷いた。空はまだ手にしていた写真を見て、ふと何か忘れている事があつたよつた気がした。少し考えてすぐに思い出す。

「ああ、孤児院」

空はつい大声を上げた。保険医がいたら叱られていたところだ。怪訝そうな春名とは違い、空の大声で海は椅子から立ち上がった。

「ほんまや。緑園。忘れてた」

「何時からだつけ」

空と海は今日自分達が少しの間過ごした孤児院を、訪問することになっていた。春名の発作や、海が階段から落ちたことなどが重なつて、ついさっきまですっかり頭から抜け落ちていた。

「まだ、大丈夫や。一時半の約束やから……今からすぐ出れば間に合うわ」

海は壁に掛けてある時計を確認して、空に言った。空も頷く。時計の針は一時半を少し回っていた。

「どこか行く予定でもあるのか」

一人話しが見えなかつたのだろう。春名がそう聞いてきた。

春名に聞かれて、空と海は顔を見合わせる。大事なことを忘れていたことに愕然として、春名がいるのに思い切り孤児院などと大声を出してしまつた。なんと言い繕つべきか。空と海はどうしようかと、目を見交わす。そんな二人をなんと思つたのか、春名は二人を促すように言つた。

「緑園ならここから一駅先だから、今からならぎりぎりだろつ。すぐに出た方がいい。僕も今から病院へ行かなきやならないから」

「ああ、ありがとう。行こう。紫藤」

そう言って海を促して空は保健室を走り出た。どうして春名が緑園を知つていたのかという疑問が頭を過ぎつたのは、二人が大急ぎで電車に駆け込んだ後だった。

第九章 兄弟

空たちと別れ、春名光は病院へ向かった。学校から病院まで、徒歩で四十分はかかるので、途中でタクシーをひらひつ。

病院へ着くとさほど待たされることもなく、光は診察室へと入ることができた。

診察室の薬品くさい臭いが鼻をつく。病院の臭いだ。余り好きな臭いではないといつも思う。

くたびれた感じの丸椅子に、細身の医師が座っていた。医師は力ルテに目を落としながら、光に椅子へ座るように促した。

光は医師が座っている椅子と、同じような丸椅子に腰を下した。椅子が抗議の声を上げるように、軋んだ音をたてる。その音が合図の様に、医師は顔を上げ、光と目を合わせた。

「前より少し悪化しているね。ちゃんと杖を使って歩いてる? だめだよ、杖は使わないと。歩けなくなったら嫌だろ?」

こちらに引っ越してから見てもらっているこの医師は、小さな子どもに言い聞かせるような調子でそう言つた。目尻に笑い皺を刻んでいる。

光は優しげな容貌をした医師に、感情の伴わない聲音で答える。「別に歩けなくなつてもいいです。いつそ歩けない方が楽なんじゃないかと思います」

光の答えに、医師は眉を寄せた。だが優しい話し振りは変わらなかつた。

「どうして? 足は動いた方がいいだろ? 動かせなくなつたら今よううんと大変な思いをすることになるよ」

医師の言葉に光は首を横に振る。

「一緒ですよ。動こうが動くまいが、僕にとつてはどつちでも……一緒になんです」

痛みを伴いながら動く足になんの価値があるというのか。光には

それが分からなかつた。前の様に動かない足なら、光には必要ないのだ。

医師が何か言つてゐる。だが光の耳にはもづく、何もとどいていなかつた。

電車に乗つて一駅で、目的の駅に着いた。途中で買つたおにぎりを電車の中で食べ終えた空と海は、ゴミを駅構内のゴミ箱に捨て、電話で聞いたとおりの道順を歩く。

目的地に近づくにつれ、二人の口数は減つていつた。

ようやく目的地についた。

空の胸元辺りまでしかないフェンスで囲まれた敷地内には、かなり古びた建物が見受けられる。その敷地内の端にはブランコや滑り台などの遊具も設置されていた。子ども達が歓声を上げて、遊んでいる。

フェンスが途切れた所に門があつた。石造りの門にはその建物の名を示す物がかけられていた。

「緑園……ここか」

音を立てて鳴り出した心臓をなだめることも出来ずに、空はそう呟いた。

隣で頷く気配に顔を上げてみれば、海も緊張した面持ちでひそかにを見返してきた。

「行くか？」

空が問いかけると、海は頷いた。

「ああ、行こう」

その言葉に頷いて、空と海は緑園の敷地へと足を踏み入れた。

受付で用件を告げると、二人は職員室に通された。

職員室の、端には衝立で隔たれた場所があり、そこが応接室変わりになつてゐるようだ。空たちは少し古びた感じのソファーに、二

人並んで腰かけた。お茶を出してくれた若い職員は姿を消し、入れ替わりに年配の女性がやって来た。

女性は白髪交じりの髪を後ろで束ねている。穏やかそうな顔には笑顔が浮かんでいた。手にはアルバムを持っていた。

「ごめんなさい、お待たせして」

優しい響を持つ聲音だった。女性は空たちの前に座ると、二人の顔を交互に見比べた。

「ふふふ。面影があるものね。あんなに小さかつたのに、こんなに大きくなっちゃって。あなたが、空くん。で、あなたが海くんね」中島と名乗った女性は、にこやかに空と海の名前を当てた。

「すごい、良く分かりましたね」

素直に感心した空に、女性は頷いた。

「実はね。さっきアルバムを見ていたのよ。ほら、あなた達の写真もあるでしょ?」

そう言つて中島は、手元に置いていたアルバムを開いて見せた。幾つか貼つてある写真の一つを指差し、中島は続ける。

「ほら、コレ。あなた達が貰われていく少し前に撮ったのよ。かわいいでしょ。二人とも面影があるし」

「そうですか? ……あの。俺たちってやっぱり、本当の兄弟なんですね」

空が問うと、中島は写真に向けていた目を上げ、きょとんとした表情で空を見返した。

「あら、知らずに来たの?」

驚いた様に中島が問うので、一人は頷いた。空と海は持っていた赤ん坊の頃の写真を中島に示して、一人がこの写真を見て兄弟じゃないかと思うようになったこと、ここに来てそれを確かめたかったことなどを話した。

「そう。大丈夫よ、あなた達はちゃんと兄弟だから。……大丈夫っていうのもへんよね」

そう言つて中島は小さく笑う。空たちもつられて笑つた。

「もう一人の兄弟のことなんですかけど、中島さん分かりませんか。何処に住んでるとか」

海が中島に訪ねた。それを横で聞いていた空は、敬語の時は関西弁じゃないんだなど、余計なことを考えた。

「今年のはじめ頃かしら。見えたわよ。」

「ええ？」

「ホンマに」

驚いて同じタイミングで、違うことを言つた二人に、中島は鷹揚に頷く。

「ええ。でも……」

そこで、中島は言ひよどんだ。空と海は顔を見合わせる。何か良くないことでもあるのだろうか。

「事故にあわれたらしくて、車椅子に乗つていらしたのよ。とても大きな事故だつたみたいね。顔にも大きな絆創膏を貼つて……。今は随分良くなつてお手紙貰つたから、一人ともそんな顔しなくても大丈夫よ」

よほど悲壮な顔でもしていたのだろうか。中島は最後に笑顔をつくつてみせた。

「良かった……」

ほつと胸を撫で下ろした空の横で、海も安心したよつて息を吐いた。

「あなた達を捜してらしたのよ。会いに行こうと思つていろいろしゃつてたわ」

「え？ で、でも、誰も尋ねて来なかつたよな。紫藤」

「ああ。来えへんかつた。俺と兄弟やつていう奴なんか」

「まあ、そうなの。住所と電話番号はお渡ししたのだけれど。身元もちゃんとしてらしたし、大丈夫だと思つたのだけれど、いやだわ。どうしましょ」

口元に手をあて、少し不安そうな表情になつた中島に、空は問う。

「その、もう一人の兄弟の名前とか、住所とか分かりますか。こつ

ちから尋ねて行きたいんですね」

「ええ、分かると思うわ。えっと、名前は……あら、なんだつたかしら。えーと、確か、苗字に季節のどれかが入つていたようないやね、年をとるとなればぽくなつて」

中島は少し待つていてねといい置いて、席を立つと応接スペースを出て行つた。

「なあ。今、季節つて言つたよな。名前に入つてる文字」

小声で空が言つと、海は頷いた。空は思いついた名前を口にした。

「春名じやないのか。もしかして」

「……できすぎた話しじやけど、俺もそう思つ。だつてなあ。あいつこの場所しつとつたみたいやし」

「ああ。写真も意味ありげに見てたし……」

そこまで言つた時、中島が戻ってきた。中島はメモ用紙を空に手渡した。

そこに書かれていた名前は、一人が予想していた通りのものだつた。

緑園を出て、空と海は駅に向かつて歩いていた。どちらも口を開こうとしない。空は腹を立てていた。何故、春名は俺たちに何も言わなかつたのだろう。自分は空たちと血の繋がつた兄弟だと、どうして言わなかつたのだろう。何故、春名は知つていて知らないふりをしていたのだろうと。

考へても分かりはしない。だが自分ならきっと、すぐに話していつたと思うのだ。この世でたつた三人きりの、血の繋がつた兄弟だということを。

「なあ、直接本人に会つて聞いてみいひんか。なんで黙つとつたか」

「ほそりとそう言つた海を軽く見上げて、空は立ち止まつた。

「今からか？ でもどうやつて連絡とるんだよ」

「電話するわ」

そう言つて海は背負つていた鞄から、携帯電話を取り出した。す

ぐに耳に当たると、春名は短縮に入っていたのだろう。

「あ、春名か。おー、今からお前ん家行つていい？ え、まだ病院？」

しばらく話した後、海はすぐに電話を切つた。振り向いた海に、空は聞いた。

「春名なんて言つてた？」

「家に来いつて。まだ病院やけど家で待つてろつて」

「へえ。そうか。ところでお前、なんで春名の携帯番号知つてたんだ」

「この間聞いたからに決まつてるやん。俺はいろんな人の携帯番号持つてるで」

「ふーん、まあ、ちよづび良かつたな。春名に色々聞きたい事あるし。とりあえず行つてみよづば。春名の家に」

携帯電話の通話を切つて、春名光は病院の壁に背を預けた。ちよづび病院から出てきたところに海から電話があつたのだ。

きっと電話があるとは思つていた。光はそう考えて、壁から背を離した。杖を使って歩き出し、光は持つていた携帯電話を、ズボンのポケットに入れだ。

歩くたびに走る痛みに、少し顔を顰めて、光は歩みを止めた。医者の言葉が頭を過ぎる。

『足が動かなくなつてもいいのかい』

医者はそう言った。だが、何が違うと言つのだ。今だつてまともに動かないではないか。いつそ完全に動かなくなつた方が、痛みを感じなくてすむ。

いつその時、足がなくなつていれば……

今もこんなに、未練を感じなくてすむのに……

第十章 春名の過去

「本当ここにだよな」

空は呆気にとられたように言った。緑園で貰つた住所を頼りに春名の家の前に着いたのだが、余りに立派な家で驚いた。家ではなく、屋敷と形容したくなるほど大きな白い建物が、門の奥にそびえている。

「ここにやな。表札出とるし」

門の横についている表札を見ながら、海が言った。言われて見ると確かに表札に春名とある。春名の家は金持ちだと噂されていたが、この家を見る限り、噂が真実だと知れた。

空が海の顔を見ると、海が促すように顎をしゃくつた。空は眉を寄せたが意を決し、インターホンを押す。――三回押すと、ほどなくインターホンから女性の声が聞こえてきた。

『はい』

「あの、俺……僕たち光君の……」

『ああ、はい、聞いてますよ。門を開けるから玄関まで来てください』

最後まで聞かず、インターホンから聞える声が告げた。そうかと思ふと、門がいきなり動き出した。

「自動だよ」

ついにそう呟いて、海を見る。海は空に頷いて、まだ開ききっていない門から、敷地内へと足を踏み入れた。暫く歩くと玄関の前に着く。空がドアをノックするかどうか迷つていると、ドアがこちらに向かつて勢い良く開いた。

ドアにぶつからないよう慌てて避けた空たちに、女性が明るく声をかけた。

「まあ、いらっしゃい。光から話しさ聞いているわ。どうぞ上がりて」

声の主を軽く見上げると、三十代くらいの女性が華やかな笑顔で立っていた。かなりの美人だ。暫く彼女に見入った程だ。

黙つて突つ立つている空たちをどう思つたのか、女性は何かを思ついた様にアッと声を上げた。

「あら、やだ。ごめんなさいね。自己紹介がまだだつたわ。私は春名みさき。光の母です」

「母ー」

空は思わず海と同時に叫んだ。女性、春名光の母親はにっこりと笑つて同じ言葉を繰り返した。

「はい、母です」

「すっげーびびつた。こんな若くて美人なお母さんなんて、いいなー。すっげー羨ましい」

空は思つた言葉を、そのまま口に出した。しかも大声で。

春名みさきと名乗つた女性は、嬉しげに声をあげた。

「やだ、そんな褒めないで。恥ずかしいわ。さ、上がって」

口ほど恥ずかしそうなそぶりは見せず、みさきは家の中に入つていぐ。空と海は一度顔を見合させ、促されるままに空から先に、家の中へ入つた。

モデルルームみたいだと、空は思つた。入つてすぐの玄関ホールは吹き抜けになつていて、上から明るい光が入つてくる。壁際に置かれた白い大きな花瓶には、ピンクと白い小さな花が活けられていた。埃一つなさそうな玄関ホールを抜け、階段を上り、一つの部屋に案内される。

思つたより小さな部屋だつた。正面に大きな窓があり、青いカーテンがかかつている。部屋の真ん中には小さな四足テーブルが置いてあり、その横にはソファーがあつた。ソファーの後ろには、ベッドが置かれている。

ソファーと相対する様に置かれた大きなテレビが、その存在感を放つていた。絶対三十六インチ以上はある。と、空は思つた。実際に三十六インチあるのだが、それは空の知るところではない。

空たちにソファーに座るようになつたみさきは、飲み物を持つて
くると言つて、一階へ下りていつた。

一人して並んで白いソファーに座る。絶対に飲み物をこぼせない
と空は思つた。

「凄いなー」

空の横で、海が呟いた。空はソファーに向けていた口を上げ、海
を見る。

「何が」

そう問いつと、海はこらへを見もせずに顎をしゃくつた。空は海の
視線を追つた。

テレビの横に大きな棚がある。ガラス戸がついた棚には数多くの
賞状や盾や、トロフィーがあつた。

「おお、すつげ。コレみんなアイツが貰つたのかな
「やうやうつな」

「ノンノンと、ドアがノックされた。入ってきたのはみさきだつた。
手に盆を持ちその上には飲み物だけでなく、ケーキも乗つていた。
甘いもの好きの空には思つても見なかつた幸運だつたが、喜びを
表面に出すほど、空は子どもではなかつた。

「どうぞ。簡単なケーキだけど。良かつたら食べて頂戴」

笑顔でみさきは言つた。空は、前に出されたショートケーキとみ
さきを交互に見て、口を開く。

「口、みさきさんが作つたんですか」

尊敬の眼差しで言つと、みさきは頷いた。

春名の母親をみさきさんと呼んだのは、みさき本人にそう呼んで
くれと頼まれたからだ。おばさんと呼ばれるのは嫌なのだそつだ。
空自身みさきのような美女を、オバサンとは呼べない。

「美味しかつた。ご馳走様です」

空と海は無言でケーキを食べ終わつた後、声をそろえてそう口こ
した。無言で食べていたのは氣まずかつたわけではなく、思いのほ
かケーキが美味しかつたからだ。

空は心底こんな美人で若くて、ケーキ作りの上手い母親がいる春名が羨ましくなった。

「お粗末さまでした。もつすぐ光も帰つてくると悪いから、もつ少し待つていてね」

そう言つて食べ終わつた皿を片付けて出て行ひとするみさきを、空は呼び止めた。

「みさきさん、待つてください。教えて欲しいことがあるんです」空が言つと、海も頷いた。みさきは少し困惑したような顔をしたが、皿の乗つた盆をテーブルの上に置いて、床に直接座つた。

「教えて欲しいことつて何かしら？」

二人の顔を交互に見て、みさきが問う。空は海を見る。海は促すよづに頷いた。

「実は俺たち、春、じゃなくて……光君と血の繋がつた兄弟なんです」

「知つてるわよ」

結構勇気のいった告白に、みさきはあっさりと頷いた。

「へ？」

「知つてるわよ。光と一緒にあなた達の様子見に行つたこともあるし」

「ええ！」

空と海は同時に叫んだ。動じた風もなく、みさきは笑顔を見せている。

「俺、全然知らなかつた」

「俺もや」

空と海の言葉に、みさきは苦笑いを返した。

「ゴメンなさいね、実は、物陰からこつそりと見てただけなの。自分が訪ねて行くことで、あなた達の生活を乱したくないって、光が言つたから」

「……」

思いもしなかつたことを言われて、一人は暫く言葉が出なかつた。

みさきも、何も言わない。黙つて一人が口を開くのを待つてゐる。

「そんなこと、気にしなくても良かつたのに。俺、自分がもらわれつこだつて、知つてたし。訪ねて来てくれたら、多分、いや、絶対嬉しかつたと思う

「俺も」

空の言葉に海が同意した。みさきは、悲しげな笑みを浮かべた。

「そう。でもあの子は、自分が私達の子ではないと知つたのが最悪な形だつたから、あなた達に、同じ思いをさせたくないなかつたんじやないかしら」

普段の春名からは考えられないような行動だ。いつも自信満々で、命令口調の嫌な奴だつたはずなのに。それでも一緒にいたのはきっと……春名が、実は優しい奴だつて気づいていたからかもしれない。空はそう思つてみさきを見た。

「教えて欲しいことつていうのは、今聞いた事ともう一つあるんです」

「何かしら」

「アイツがなんでフイギアスケート辞めたのか。アイツに聞いてもたぶん、答えてくれないと思うんですけど」

「ここにある盾とかつて春名がとつたやつですよね。何で辞めたんですねか。辞めた理由と、アイツが体育サボつてる理由は一緒ですか」

空の問いに、海が重ねて問う。みさきは困つた顔をした。言つべきか言わざるべきか迷つてゐるようだ。

空と海は、春名が体育に出ない」と、クラスメートから反感を買つてゐることをみさきに告げた。内心春名には悪いと思つたが、言わなければ、教えてもらえないと思つたのだ。

「そう、あの子何も言つていないので強情なんだか

「ら

溜息をついて、みさきは居住まいを正した。話す気になつたようだ。本人のいないところで、こんな話をするのはフェアじゃない氣もするが、春名に直接聞いたところで一蹴されて終わる可能性が高

い。何せ春名は頭がいい。

「あの子がフイギアをやっていたのは、誰に聞いたの？ それとも知っていたのかしら？」

「いえ、学校で話題になつて。雑誌見せてもらつたんです。でもあいつ、その雑誌、口元箱に捨てたんですよ」

「まあ」

空の言葉に驚いたように、口元に手をやつてみさきは俯いた。息子がそんなことするなんてと言いたそうな顔をしている。もしかしたら、春名は家で、良い子ぶつているのかもしない。

「そう、家では結構普通にしてるのに、やっぱり……」

呟くようにそう言つたみさきの言葉を、最後まで聞き取れなかつた。みさきの名を呼んでこちらに注意を引くと、みさきはまつとじたようにひつむけていた顔を上げた。

「『めんなさいね。なんでもないの』」

氣を取り直したように、みさきは微笑んで話し始めた。

「あの子がフイギアスケートをやめた理由は、事故だつたの」

「事故ですか？ 結構大きな事故なんですか？」

その問いに頷いたみさきは、思い出すように盾や賞状が並んだ棚に顔を向けた。

「車の衝突事故だつたの。あの子とコーチが乗つた車に大型トラックが突つ込んだのよ。その時の事故で、追突した大型トラックの運転手と、光を庇つたコーチが亡くなつたの」

一人同時に息を飲んだ。それ程大きな事故だつたのなら、春名も大きな怪我をしたのだろうか。空は思い出した。春名は折りたたみ式の杖を持っていた。もしかしたら……

「足、怪我したんですねか。アイツ」

「……知つてたの？ 普段は何でもない風に歩いてるから、気づく人は少ないのよ」

「ええ、まあ」

空は言葉を濁した。今日、孤児院で車椅子に乗つていたと言つた

を聞いていたし、春名が発作を起こしたあとに春名のロッカーに杖が入っていたのを見ている。

「あの子は大事故だつたにも関わらず、奇跡的に助かつたけど、ひしゃげた車の間に足が挟まつてしまつて……脚に大きな損傷を受けたの。お医者様は歩行を出来るまでには回復するだろうつておつしやつてくれたけど、あの子には何の慰めにもならなかつたでしようね。あの子はスケートが本当に好きだつたから」

みさきが棚からこちらに視線を戻した。空と海は言葉もなくみさきを見つめる。

「お医者様が光にそのことを告げた時。私達もいたの。あの子はもうスケートが出来ないつて知つても、顔色一つ変えなかつたわ。私の方が耐えられなくて、泣き出してしまつたけど。あの子はそんな私に謝つたのよ。あの子は何も悪くないのに。嘆くことも、取り乱すこととも、悲しむそぶりも見せずに。ただ、申し訳なさそうに謝つたの。私達に、『ごめんなさい』って」

その時の春名の気持ちは、どんなものだつたのだろう。自分だったらどうだらうと空は考えた。きっと自分なら信じられなかつたらうづ。いきなり、もう今までやつてきたことが出来なくなるなんて。そしてきっと取り乱したに違ひない。自分ではどうしようもない事態に困惑して。

「あの子は、それからも様子は普段と変わらない様に見えたわ。もちろん、見た目は事故のせいで随分酷いことになつていたけれど。顔にも大きな傷が出来ていたしね。頬に大きな絆創膏をはつてたの……。傷が治つて本当によかつたわ。あの子の顔に傷が残つたら最悪よねえ。息子ながらあんなに綺麗な顔してるんだもの……」

話がずれてきた。春名が小さい時からどんなに可愛かったかを話し始めるにいたつて、一人はようやく止めに入ることが出来た。「あのー、ちょっと春名の顔のことはもういいんで、足の具合とかの話しひを聞きたいんですけど」

呆れた声で海がいふと、みさきは照れたように頬に手をあてた。

「あら、いやだ。私ったら、光には内緒ね」

そう言つて口元に人差し指を当てる仕草がやけに似合つている。

「お医者様の言つたように、歩ける様になつたの。でも、運動で走る回復には回復できなかつた。歩くとね、痛みが走るのよ。走るうとしても五、六歩でうずくまつちゃうの」

「……だからあいつ、体育の授業でないんだ」

否、出られないのだ。どんなに出席したくても。体育の授業に出ないことを責めた時、春名はどんな気持ちだったのだろうか。出たくても出られないと、言いたかったのだろうか。心中でそり、反論していたのだろうか。

「先生が何も言わへんのは、それを知つとるからか」

呴くように海が言つた。みさきが頷く。しばらく無言の時間が過ぎた。みさきが何かを思いついたように手を打つた。

「よかつたら、あの子が滑つてるところ見ない？ 摄つてあるのよ思わぬ提案に、空と海は同時に頷いた。

「ぜひ見せてください」

空には暗くなつた気分を、少しでも変えることが出来ればという気持ちがあつた。何より、春名がオリンピックに出られるほどのスケーターだったことを聞いていても、いまいちピンと来なかつたのだ。それを見られるといつなら是非見たい。

空の家にあるテレビの倍以上は大きなテレビに、映像が流れ出す。みさきはDVDをセットした後、今度は冷たい飲み物を持つてくると言つて、階下へ行つてしまつた。

『さあ、次は日本の選手、春名光の登場です』

アナウンサーの声だらけ。画面から流れ出た声はやけに綺麗な発音でそう言つた。

画面には小さな人影が、リンクの中央に滑り出てきた姿を映している。映像が変わって、春名の顔がアップになつた。緊張した顔をしている。今の春名より、少しだけ頬に丸みがあるが、その顔は確かに春名だった。

曲が流れ出した。この曲は空も知っている。題名は覚えていないが、世界的に有名なアニメ映画の主題歌だ。曲に乗つて滑り出す春名は、その白い衣装の印象もあってか、まるで妖精のようだ。

『今期のオリンピックでは、日本人選手は一人出場しています。春名は今大会では最年少選手です。加藤さん。春名はどういう選手ですか』

アナウンサーの声に解説の加藤が答えている。

『彼の一番の特徴はジャンプですね。難しいジャンプも軽々とこなしている様に見える。そこが春名の凄いところです。いつもの演技が出来ればメダル圏内にも入つてくるかもしませんね』

おおすげー。と空は思った。今まさに解説者が褒めたジャンプを、春名がしたのである。本当に軽々といった感じだ。背中に羽でも生えているようだ。

「あつ」

思わず声がでた。次のジャンプで、春名は失敗した。完全に尻がついてしまったのだ。痛そうだ。だが春名はすぐに立ち上がって滑り始める。軽やかなステップ、転んだことはまるでなかつたような滑りだ。

『尻餅をついてしましたね、加藤さん。コレは大きく減点されるでしょう』

『そうですね。一回目のジャンプは綺麗に決まりましたが、二回目のジャンプは踏み切る時に少し軸がぶれていきました。やはり、緊張していたのでしょうかね』

などと言っている解説者に、空は少し腹をたてた。

次のジャンプもまた失敗した。それでもめげずに滑り出す春名。みさきさんも、どうせなら失敗していない映像を見せたらよかつたのにと空は思つた。

演技が終わった。案の定春名の点数は低い。点数の結果が出た後すぐに、画面が切り替わった。また、オリンピックの映像だ。画面の中に五輪のマークがあるのでそれと分かる。

「なんで、一回もオリンピックの映像があるの」

「あれやろ、フィギュアスケートって、一回やるやん。えーと、ショートプログラムと、何とかプログラム」

「何とかって、なんだよ」

海に顔を向けると、眉を寄せた海と田が合つた。

「覚えてへんもん。しゃあないやん」

答えはすぐに分かつた。画面の中で、アナウンサーが言つたのだ。

二人は画面に視線を戻す。

『大会一日目。男子フィギュアスケート、フリープログラムがまもなく始まるうとしています』

画面はリンクの中で複数の選手が練習している姿を映しだしている。その中に春名もいた。

「じつやつて見ると、知らん人見たいやな」

「ああ、なんか雰囲気も違うしさ」

すぐさま画面が切り替わった。春名の出番があるところだけ、映つているようだ。

さつきの白い衣装と打つて変わって、春名が着ているのは黒っぽい、どこか忍者を思わせる衣装だった。曲もアナウンサーの言つところでは、オリジナルの、日本を意識した曲らしい。

先ほどは、画面から伝わるほど緊張の面持ちをして滑つていたが、今度のフリーでは緊張感がさほど伝わっては来ない。もちろん、緊張していいわけではないのだろうが、前回の演技の時より、リラックスして見えるのだ。空の氣のせいかも知れないが。もしかしたら、ショートプログラムで失敗したことによつて、良い意味で色んな事が吹つ切れたのかもしれない。

春名が滑り出した。太鼓のリズムに合わせて、ステップする春名の顔には笑顔も見える。観客たちがその音にあわせて手拍子を始めた。

「あ、ジャンプする」

春名がジャンプの体勢を取つたとき、思わずそう口走つていた。

ふわりと春名の身体が浮いた。ぐるぐると回り、危なげなく着地したと思った時、またもジャンプした。連續ジャンプだ。三回連續でジャンプした春名の顔に、今まで見たことも無いような笑顔が浮かぶ。

こんな顔で笑えるんだ。空は画面に見入った。解説者が、今のジャンプの種類を言つていたが、もう空の耳には入つてこなかつた。春名が、笑顔で滑る。観客達の手拍子が鳴る。空と海は完全に魅せられていた。春名の演技に。

この演技が春名にとって、最後の演技になつてしまつたことを、二人は知らない。知つていたらきっと、辛くなつて見ていられなかつただろう。

演技が終わると、観客達が立ち上がり拍手をしている。リンクに花束や、ぬいぐるみが落とされた。その一つを手にとつて、春名はリンクを出た。

映像はまだ続く。上気した春名の頬はうつすらと赤みがかつている。息遣いは荒く、その運動量が察せられる。見ている間は今の演技が、それ程激しいようには見えなかつたが、やつてている方は、それはしんどいのだろうと空は思つた。

春名はリンクを降りた後、コーチと思しき男性と抱き合つた。男性は春名に良くやつたとでも言つてゐるのだろう。笑顔で、春名の背を叩いてゐる。

「この人が、亡くなつたんかな。……事故で」

言われて、空は思い出した。みさきが言つていた。事故で、運転手とコーチが亡くなつたと。

春名と男性が並んで採点が下るのを待つてゐる。アナウンサーが、春名の隣に座る人物を、コーチだと紹介した。

長瀬コーチと紹介された男性は春名に何か言つてゐる。春名は、観客からプレゼントされた小さな白いクマのぬいぐるみの手をとつて、ぬいぐるみに手を振らせながら、何か言つてゐる。音声が入つていないうで、何を言つてゐるのかまでは解らない。

「なんとかチャンツて言つてるで、春名のやつ」

「えつなんで分かつたのか、そんなこと」

驚いた空に、海は画面を指差して言つた。

「唇を見れば分るやん。ほらまた」

そんなことを言つている間に、点数が出たようだ。会場が沸いた。かなりの高得点だつたらしいが、良く分らない。画面の中で、春名とコーチが立ち上がつた。そこで、画像が止まつた。空はテーブルに置かれていたリモコンで、電源を切つた。

「どうだつた」

聞かれて驚いた。その声は海からではなく、部屋の入り口の方から聞えてきたのだ。

ドアにもたれるようにして春名が立つていた。手にはコップが三つのつた盆を持つてゐる。コップの中身はオレンジジュースだろうが。いつの間に部屋に入ったのだらう。空は全く気づかなかつた。

「いつの間に……」

「お前らが、バカみたいに口あけてテレビ見てる時」

そう言つて春名は少し足を引きずるようにして歩き、コップを一人の前に置いた。そして自分の分のコップをもつたまま、ソファーの背後にあるベッドに腰掛けた。

いつもなら春名の物言いに腹を立てる空だが、今はそんな気にはなれなかつた。

「あのさ、俺たち、実は……」

春名は空の言葉を最後まで聞かず、手をあげて制した。

「母親から聞いてる。全部聞いたんだらう? 僕がお前らのこと知つてたことも、事故で足を怪我したことモ」

「ああ。ごめんな」

するりと、謝罪の言葉が出た。自分でも驚くほどに。

「別に、謝る事はないよ。こつちだつて、お前のこのこと勝手に見に行つたり、ストーカーじみたことをしてくるからな」

「ストーカーつて。お前……」

「隠れて見られてるなんて、いい気はしないだらう」

春名がそう言つて、コップに口をつける。つられて、空と海もオレンジジュースを飲んだ。味が濃い。絶対果汁百パー セントだ。

「そんなんは別にいいねん。なあ、さつきの映像で、おまえ誰かの名前呼んどったよな。なんとかちゃんと。彼女の名前か」

それこそどうでも良いような海の間に、少しの間考えるような顔をした春名は、思い出したように答えた。

「ああ。コーチの娘さんの名前だよ。のんちゃんって言つてるんだ、あれは。コーチに頼まれたんだよ。娘の名前を呼んでくれつて」

そう言つ春名の顔に嘘はなかつた。本当のことなんだらう。空は、気になつたことを聞いていた。

「あのコーチつてさ。もしかして、事故で亡くなつたつていう……」

そこまで空が言つた時、春名は持つていたコップを強く握り締めた。酷い事故だつたといつ。思い出したくはないのだらう。コップを見つめている春名の表情は分かり辛い。

「あの、言つたくなかったら、別に言わなくとも」

空がそう言つと、春名は顔を上げた。

「いや、別に。……そうだよ。亡くなつたのはあの人だ」

「そうか。……なあ、春名。何でお前、足が悪いこと皆に言わんかつたんや。知つたら皆、お前のこと悪う言わんかったと思つで」

ソフナーの背もたれに腕を置いて海が聞いた。春名は淡々と口を開いた。

「言つたところで、そう変わらなかつたと思つけど。足に怪我してなかつたつて、陰口は言われてたからな。今も世も」

「……それはお前の態度の問題だろ」

ついそう言つていた。春名はまだ固い表情だが、口元が笑つようにな動いた。

「悪かつたな、態度悪くて」

「ほんまやで。態度の悪いお前と短気な高橋の間に入つて、俺はもう苦労ばかりや」

大げさに海がそう嘆いて見せた。暗い気分だつた筈なのだが、なぜか笑いが込み上げて、三人して笑つた。

「あーあ、なんかさ、俺たちが兄弟だつて分かつて、気になつてたお前の過去も分かつてさ、お前には悪いけどちょっとすつきりした」一頻り笑つたあと、空はベッドに座る春名を軽く見上げて言つた。「でも、まだ何も解決してないんだぞ。教室の件もウサギ小屋の件も」

「まあそれは、そうだけど」

「はーい。ここで提案」

突然海が手をあげた。

「せつかく俺達がほんまの兄弟やつて分かつてんし、今日は暴露大

会しようや」

「暴露大会?」

春名が訝しげな表情で問う。

「つまりや、俺らだけお前の過去知つてもうたやんか。それつて何か不公平やろ?だから、今度は俺達の話しあつちゅうこと」

「ああ、それいいかも」

空は海の提案に大きく頷いて賛同した。そして海を真似て手をあげる。

「ついでに俺からも提案。兄弟だつて分かつたんだしも、名前で呼ばねー? 苗字で呼ぶのって変な気がする」

空の提案に、二人は嬉しげに頷いた。

第十一章 事件捜査

彼は理科室の扉を開けた。中は薄暗い。電気はついておらず、室内に入つてくる夕焼けの明かりだけが頼りだ。

彼は中にいた男に声をかけた。彼に背を向けていた男が、こちらを振り向く。

「遅かつたな。待ちくたびれたよ」

「……僕は色々忙しいので。先生は知っていますよね」

「彼が言うと男、一年二組の担任教師である黒田が笑った。

「ああ。今日も委員会があつたつけな。それより、例のものは持つてきたか？」

彼は無言で、カバンから封筒を取り出した。それを黒田に差し出す。黒田は封筒を奪うように受け取つた。早速封筒の中身を取り出し数え始める。封筒の中には一万円札が十枚入つていた。黒田は満足そうに笑んだあと、もう一度札を数えながら言う。

「払えないなんて言つといて、ちゃんと持つてくれるとはね。本当についてたよ。あの日残業してなければ、お前がウサギ小屋を荒らすところに出くわすこともなかつたんだからな」

黒田の言葉に、彼は苦い顔をする。あの時、うさぎ小屋にいる所を見られたために、彼は黒田に強請られていた。

「次は十五万用意しろ。お前の家は金持ちなんだし、用意するのは簡単だろう?」

「そんな、話が違います。十万払えば、誰にも言わないって……」

「いいのか？ 学校中に知られても。お前がウサギを殺した犯人だつて

「……」

黒田は嫌な笑みを浮かべ、彼の肩を叩く。

「一週間以内に頼むぞ」

そう言うと黒田は彼を残し、理科室を出て行つた。一人理科室に

残された彼は、唇を噛みしめる。自分への疑いをそらすことが出来たと思っていたのに。何故こんなことになつたのか。彼は失態を犯した自分を激しく呪つた。

「あー、ムカつく。あいつらマジムカつく」

日曜日明けの月曜日。空は移動教室からの帰り、一階の渡り廊下で、傍らに並んで歩く紫藤海に憤然と言い放つた。海は苦笑いだけしてコメントは控えますと言つよつて、渡り廊下の窓に顔を向けた。昼休みに入つたばかりのせいか、廊下には生徒の姿が多く見られる。空が腹を立てている理由。それは、先ほどの授業での出来事が原因だつた。先ほどの授業は調理実習だつた。その調理実習の最中、久保が光の腕に熱湯をこぼしたのだ。アレは絶対わざとだと空は思う。幸いすぐに水をかけ、家庭科の教師が応急処置を施した為、軽い火傷ですんだ。だが、もしかかつた場所が顔であつたり、熱湯をこぼす量が多かつたりすれば、もっと大事になつていたはずだ。久保はある時平謝りしていたが、真意はどうか分からぬ。

「久保の奴、文句を言つてやるつと思つたのにさつさと教室から出て行きやがつて……つておい、何やつてんだよ。海」

隣を歩く気配がなくなつたことに気づき、空は歩みを止め、後方にいた海に声をかけた。海はいつの間にか立ち止まり、窓の外を眺めていたようだ。空は海の側まで歩み寄つた。海は窓の外に気を取られている。

「何見てんだ。海」

海は空を見もせずに、窓の外を指差した。

「ほら、こいつから保健室見えるやろ、光が出て来えへんかなあと思つて見とつてんけど。あそこ、一階の廊下見てみ、飯田が男としゃべつとる」

「あ、本当だ」

空は海の横に並んで、海の指差す方向を見た。そこには確かに飯田倫子が、廊下で男子生徒と立ち話をしている姿が見えた。

「彼氏かな」

少し複雑な気分になりながら、空は呟いた。そのまま背後から、誰かが声をかけてきた。

「はつるくん」

「わあ、何や、朝倉。俺光とちやうで」

海の叫び声に我に返った空は、背後に立っていた朝倉を見た。朝倉は海の顔を見た途端、可愛い顔に仏頂面を作った。

「ちょっと、何で紫藤なのよ。春名君だと思ったのに……春名君と紫藤つて、後姿そっくりね

「そうか？」

そりや、兄弟だからな。と、空は思つ。

朝倉はそんな空にはお構いなしに、何見てたのよと言いながら空を軽く押しのけて、窓の外を見やる。そして絶叫した。

「あー、リンコちゃんと坂木先輩じゃない」

「どわつ、びびつた。何だよ、朝倉。うるせーよ」

「何だよって何よ。一人して何見てるかと思えば、リンコちゃんだったのね。はつはーん。一人の関係が気になるって訳か。いいわ教えてあげる。坂木先輩はリンコちゃんの幼馴染よ。まだ付き合つてはないけど、時間の問題つて気がするわね。高橋もリンコちゃんに気があるなら、今のうちにアプローチしどきなさいよ」

言ひだけ言ひと、朝倉は空の背中を思い切り叩く。結構いい音がした。

「痛つて、馬鹿力だな、朝倉。光に言ひてやろ」

「な、何よ。やめてよね。春名君に変な事言わないでよ。私の恋路邪魔したら呪つてやるからつ。分かったわね」

指を突きつけられて、空はたじたじと壁に背を押し付けた。横で見ていた海が、笑いを堪えているのが視界の端に映る。笑つてないで助けるよバカ。

「なあ、朝倉。坂木先輩のこと何か知ってるか。あの一人つて生物部なんやろ」「

「へ？ うん。そうだけど。……何よ。紫藤までリンゴちゃんに気があるわけ？ リンゴちゃんつてばモテモテね。あつそつか。敵の情報収集をしようつて訳ね。いいわ、知つてる事は教えてあげる、教室に戻るまでね」

勝手に解釈して、朝倉はにっこり笑つた。空は海を見たが、海は別段否定する気もないようだ。ただ呆れて言葉が出ないだけかも知れないが。

三人は教室に戻るべく階段を上る。朝倉が話し始めた。

「坂木先輩は学年一の秀才で、スポーツ万能。生徒会長と生物部の部長もやってて、しかもルックスは抜群。コレでモテないわけないよね。それなのに彼女はいないのよ。私、密かに坂木先輩はリンゴちゃんのこと好きなんだと思ってるのよね。リンゴちゃんのお父さんが亡くなつたときも随分慰めていたし」

「え、飯田のお父さん亡くなつてるのか」

驚いて聞いた空に、朝倉は頷いた。

「そうなの。リンゴちゃん隨分落ち込んじゃつて。リンゴちゃんお父さん大好きだつたから。あの頃はホントに、リンゴちゃんまで死んじゅうんじゃないからって心配したくらい。でも、坂木先輩がずっとリンゴちゃんに付き添つてくれて、お父さんはリンゴちゃんに笑つていてもらいたいはずだよ、なんて言って慰めてた。そのおかげか、リンゴちゃんも次第に笑うようになつて、一安心したものよ。リンゴちゃんが笑うようになったのは、先輩のおかげね」

「へー、いい人なんやな。先輩……」

「そう、いい男だしね。だからあんた達、リンゴちゃんをモノにして」

で

教室が見えると、朝倉はパタパタと走つて教室のドアの向いへ消えていった。海は教科書を持った手で、頭を搔きながら言った。

「なんや、こいつが話す隙をあたえへんやつちやな朝倉は……俺すっかり飯田に惚れてることにされとる。空やあるまいし」「おい、俺だつて別に飯田に惚れてるわけじゃねえつうの」そりや、かわいいなとは思うけど。と、心の中で付け加えた。「優等生で、やさしくて、人望もあつてつて、火の打ち所がないつてこのことやな」

不意に口調を改めて海が言つのを聞き、空も気持ちを改めた。

「うん、でも、そう言う奴に限つて、悪い事するじやん。あとは光みたいに性格悪いとかさ」

「悪かったな、性格悪くて」

不意に曲がり角の向こうから声が聞えて、空はゆっくりと振り向いた。

「あ、あはは、聞えてた?」

角から姿を現した光は、いつものポーカーフェイスだ。

「ああ。空は地声が大きいんだよ」

「悪かったな」

「それより、大丈夫なんか? 腕

「ああ、たいしたことない。すぐ治るよ」

光がそう言って軽く腕を振る。そうするとシャツの裾から白い包帯が見え隠れした。

「そういえば、お前、昼飯食いそこなつたんじゃねー? 今から購

買行くか

空がそう尋ねたのは、先ほどの調理実習で作った料理が、昼食を兼ねていたことを思い出したからだ。火傷を負つたせいで、光は食べ損ねているはずだ。

「ああ、それは平気。保健室に久保が持つて来てくれたから、さつき食べたよ」

「久保が? マジかよ」

「ああ、僕が火傷したとき、久保がわざと熱湯かけたと思つたんだろ? でもあれはわざとじゃなかつたよ。たまたまぶつかつただ

け。それなのに、久保は自分が悪かつたって頭下げに来た

「あいつも、根は悪い奴とちゃうからな。それにしても、光。久保が出て行つてから随分経つけど、そんなゆっくり食事しどつたんか」「いや、ちょっと職員室に寄つて來たんだ」

「何しに行つたんだよ」

「ちょっと聞きたい事があつて。ここじゃなんだから、教室へ入ろう。座つて話したい」

光に促されるまま、空たちは昼休み中で、人気の少ない教室に足を踏み入れた。教室の入り口に一番近い海の席の周りに集る。海は自分の席に座り、空はその前の席。そして光は左隣の席に椅子を引いて座り、背もたれに肘を乗せた。

普段弁当のにおいが充満する昼休みの教室だが、今日は食べ物のにおいがしない。調理実習のおかげで、いつも弁当を食べ終えた後、机をつけて話しに花を咲かせている女子たちの姿もほとんど無かつた。今は教室の隅に数人の女子が集まつて会話しているだけだ。その中に朝倉もいる。

「職員室で、須波先生に話しさ聞いてきた」

「須波センセつて誰や」

空も聞き覚えがなかつた名前なので、海と同じように光を見る。光は白けた表情で、眼鏡を中指で押し上げた。

「あんな。お前を助けてくれた先生の名前だよ。階段落ちたとき、坂木先輩と一緒にお前を運んでくれた先生が、須波先生。生活指導の先生だから見たことあるだろ? 校門の前によく立つてるじゃないか」

空は言われて思い出した。朝たまにジャージ姿の、頭の禿げた先生が校門前に立つてゐる。

「ああ、あのツルピカ先生か」

ついそつ口に出した。

「あはは、ツルピカ先生つて、ツルピカ先生、あははは、上手い事言つたな。空。最高や。あははははは」

笑い出した海を、光が軽く睨む。

「あんな、笑ってる場合じゃないんだよ」

「あー、へいへい。そうでした。分かりましたよ。で、その須波センセに何を聞きに行つたんや。階段落ちたときの事か」

「そう。先生と坂木先輩が海を見つけたときの状況を、出来るだけ詳しく聞きたかったんだ」

「へー、で、どうだつた。何か分かつたか」

空が聞くと光は軽く頷いた。空と海を交互に見て口を開く。

「あの日、先生は授業で使う物を忘れて、職員室に坂木先輩を連れて取りに戻つたんだ。そして、荷物を持つて坂木先輩が職員室を出た直後……」

そこで一度言葉を切り、光は海を見た。つられて空も海に向ける。

「……お前の悲鳴が聞えた。先に職員室の外に出ていた坂木先輩が階段の方へ走つていったのを見て、先生も先輩を追つて職員室を飛び出した。職員室から出て、階段のある渡り廊下に行く為に角を曲がつた時、しゃがみ込んで階段を見上げている先輩と、先輩にかくされて倒れているお前の足が見えたそうだ」

「じゃあ、やっぱ、先輩は突き落としてないってことか。先輩は今度の事件とは無関係つてことかな」

「それは、どうかな。少なくとも先輩は、あの脅迫文が書かれた紙を海の制服のポケットに忍ばせることは出来たはずだ」

「んー、確かにそれは可能やろうけど、じゃあ俺を突き落とした奴と、教室を真っ赤にした犯人とは別やつちゅうことか」

海は顎に手をやつて、考え込むような仕草をする。その海の顔を覗きこんだ空は、からかう口調で言った。

「おまえ、どつかで恨みでもかつたんじゃないの？ 妙なギャグで教室寒くしやがつてつとかぞ」

言葉の後半で背中を突き飛ばすようなジェスチャーをした空に、海は眉を顰めた。

「おひこり。俺がいつ、寒いギャグなんて言つた？　俺のギャグはいつも大うけやん」

海の言い分に賛同する者はいなかつた。空は思いつきり顔をしかめ、光は静かに首を横に振る。

「おまえら……　眞実は時に人を傷つけるんやで、憶えとけよ」

海はどこか悄然と呟いた。そしてふと、何かに気を取られたように視線をずらす。

空はその視線が気になつて海の目線を追う。その先には教室の隅でかたまって談笑している女子達がいた。朝倉達がこちらを見ながらヒソヒソと話をしている。

「また見とるわ。なあ光、朝倉なんとかしいや」

唐突に海が言つた。言われた光は意味が分からぬといつよひ、首を軽く傾げる。

「どういう意味だ」

「さつきな、朝倉にお前と間違われてん。後姿がそつくりなんやと」
海の言葉に意外そうに目を上げた光に、空はうんうんと頷いた。
「そつそつ、朝倉の奴、すっげー可愛い声ではつるなくん、なんて海のこと呼んでたんだぜ。おまえも罪な男だよなあ」

そんな風にからかつたのだが、光は空が予想したような反応を示さなかつた。空としては恥ずかしがつて欲しかつたのだが、光は恥ずかしがるそぶりも見せずに考え込むような顔になつた。

「僕と海の後姿がそつくり？　まあ、身長は似たようなもんだけど」
何かを考えるように目を伏せた光に、空は声をかける。

「なんだよ、似てるのが嫌なのかな」

「いや、そうじゃなくて……」

どじか上の空で何かを考えているような光の反応に、空は海と田を合わせて肩を竦めあつた。光がこうこう反応を示している時は何を言つても、たいした返事は返つてこない。

話が途切れちゅうどいいタイミングで、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り始めた。空は光を促して、自分の席に戻る為に腰

を上
げ
た。

第十一章 まさかの殺人？！

放課後である。掃除を終えた教室で、空は海と光を待っていた。海はこの間借りた包帯を返しに保健室へ、光は体育教師の高田に呼ばれて職員室へ行っている。

西口が入ってくる教室の自分の席で、一人が来るのをただ待っているだけのはかなり退屈だ。どちらでもいいから、早く戻つて来てくれないだろうか。

そんな事を考えた時、ドアが開く音を耳にした。ドアに背を向ける格好で座つていた空は、その音に海か光が戻つたのかと振り返る。だがそこにいたのは、飯田倫子だった。

「あ、高橋君一人？ めずらしいね」

少し小さな声で、飯田は空に話し掛けてきた。空は頷く。

「ああ、光と海待つてるんだけど、コレがなかなか戻つてこないんだよ」

「……いつの間にか、すっごく仲良くなつたみたいね、春名君と。前は仲悪そうだつたのに」

飯田が空の方に近づいてきた。飯田の席が空の右斜め前の席だからだろう。空は飯田の言葉に、光のことを何て偉そうで嫌な奴だと思つていた事を、思い出した。

「ああ、ま、色々あつてさ。あつ、そうだ飯田。おまえ坂木先輩と仲良いんだって？ この間も廊下で話してたよな。先輩と」

そう言つと、忘れ物をしていたのか、机の中から教科書を取り出していた飯田が、手を止め振り返つた。

「……幼馴染なの。だから色々と頼っちゃつて

「へー、いいよな。生徒会長が幼馴染か。勉強とか教えてもらえそ

う

「あはは、高橋君は春名君に教えてもらえばいいじゃない。頭いいでしょ。春名君」

「あーでも、同じ年の奴に教えてもらつてのも何か嫌だなーみたいになさ」

そう言つて頭を搔くと、飯田は少し目を見張つてから微笑んだ。

「結構プライド高いんだね。高橋君」

「そうでもないけどさ、なあ、坂木先輩つてどんな人？」

「……どうしてそんな事聞くの？」

そう問われて空は返答に窮した。幼馴染の飯田なら坂木先輩の裏の顔を知っているかもと、思いつきで聞いただけだったからだ。そのため返答はしどろもどろになる。

「え、えーとだからさ。あれだよ、ほら、坂木先輩は有名人じゃん。ただたんに好奇心だつたんだけど。聞かないほうが良かつたか」「ううん、別に。皆が噂している通りの人だよ。優しくて、頭が良くてスポーツ万能。でも、ちょっと抜けてるところはあるかも。あの人結構天然入ってるから」

「え？ そうなの」

「こ」の間も、ケータイとテレビのリモコン間違えて持つて来てたし」飯田の言葉に空は噴出した。そんなベタなボケをかますような人だとは思わなかつた。空が笑い出したので、飯田もつられるように笑つた。一人して軽く笑つたあと、飯田は空に言った。

「今度は私の好奇心なんだけど、ウサギのこととか調べてたよね。犯人はもう分かつた？」

空は返事に詰まつた。まさか飯田に、君の幼馴染が犯人じゃないかと疑つていると、告げる訳にもいかない。空はただ首を横に振るだけにしておく。

「そう。春名君とか、結構ウサギ好きでよく見に来てたでしょ。ウサギ好きの久保くんが、春名君を熱心に部に勧誘してたし。それが、あんな事になつて、久保君はまだ春名君のこと疑つているみたいだし、心配だつたの。でも、そつか、まだ犯人は分からないのかあ」残念そうに呟く飯田の言葉に、空は驚いた。光がウサギ好きだつて？ 光は一言もそんな事を言つていなかつた。

だが待てよ、光は久保がカメ子とトロ吉と言うのを聞いてすぐにウサギだと言い当てていた。不思議に思つたものだが、よく見に行つていたなら話しさ分かる。

「あ、じゃあ、私もういかなきや。下で有紀ちゃん待たしているの。またね」

「ああ」

飯田は少し速い歩調で、教室を出て行つた。

飯田が教室を出て行つてしまはらくすると、海と光が連れ立つて教室に戻つてきた。その後少し教室で話をしてから、空は一人と共に教室を出た。

階段を一階まで、他愛もない話をしながら下りる。一階についた。玄関に向かうため、職員室横を通り過ぎようとした時、空たちは職員室から出てきた理科教師に呼び止められた。

「お、わるい、お前達。第一理科室の鍵閉めてきてくれないか。終わつたら鍵は職員室に持つて来てくれたらいいから。頼んだぞ」

そう言って理科教師は笑顔で職員室に戻つて行つた。鍵を手渡されてしまつた空は不満げに頬を膨らませる。

「なんだよ。出てきたんなら自分で閉めにいけよな」

「第一理科室つていつたら、新校舎やんな。逆方向やんか。それに、鍵つて用務員さんが閉めてくれるんやろ」

「違う。特別教室の鍵は担当の先生が閉める決まりだよ。ほら、文句言つてないで、さつさと済ませよう」

そう言つと、光はさつと歩き始める。さつとといつても歩調はゆっくりだ。足が痛いのかもしれない。空と海は光の隣を、並んで歩く。第一理科室は一階だ。階段を上らなくてよかつたのがせめてもの救いか。これが第一音楽室だつたら四階まで上がらなければならなかつた。

渡り廊下を渡つて、新校舎に移ると、その先に第一理科室が見えた。空は先行つて閉めてくると言つて第一理科室に向かつて走り出す。人気がないせいか廊下に足音が大きく響いた。

理科室の前に着いた。ドアは開いている。空は何となく中を覗いた。中は暗かつた。電気がついていないだけでなく、遮光カーテンが引かれているのだ。だがそのカーテンが一箇所だけひらひらと揺れている。風のせいだろう。どうやら、窓が開いているようだ。

「窓開いてるみたいだから、俺ちょっと閉めてくる」

そう言つて、空は理科室に足を踏み入れた。

遮光カーテンのせいで、かなり暗く視界が悪い。空はカーテンが揺れている場所を目指して歩く。動かないように設置された実験用の机に手をおきながら、ゆっくりと足を運ぶ。

揺れるカーテンばかり見ていたせいだろう。何かに足が引っかかって、空はあつと声を上げてみごとに転んだ。何かを下敷きにしてしまったようだ。空はそろそろと床に手をついて体を起こす。

何かがこぼれていたのだろうか。手に液体がついて、空は思わずシャツに擦り付けた。その手を下へおろしたとき、手に何かがあつた。堅い感触。「レなんだろう。そう思つて、空は手にあつた物を掴んだ。その時、背後のドアから海が声をかけてきた。

「おい、大丈夫か？ 何こけてんねん」

「電気つけて行けば良かつたんだ」

光はそう言つて、ドアの近くにある電気のスイッチを入れた。力チカチと何度も点滅し、蛍光灯が明るい光を教室に振りまいた。

空は明るさに目をつぶり、ゆっくりと瞼を開いた。そして、空は自分が手にしていた物を見て、絶叫した。

「うわあー」

慌ててそれを放り出して、空は尻を床に着けたまま、手と足を使つて後ずさる。そして、空は見た。いや見てしまつた。自分が何に躓いたのかを。もう一度大声で叫んだ空に、一人が近づいてくる気配がする。だが、振り向く事が出来ない。目の前のものから目が離せなかつた。

息を飲む音がすぐ近くで聞えて、空はそちらを見上げる。傍らには海が立っていた。青ざめた顔で、空が見ていたものを凝視している

る。

「黒田や……」

そう呟く声が擦れている。

海が驚くのも無理はない。そこにいたのは紛れもなく人。それもよく見知った顔の。空の前に倒れていたのは、担任教師の黒田、その人だつた。

黒田は床に仰向けに倒れていた。腹部には赤黒い染みが広がっている。衣服をぬらしているものがベンキではない事は分かる。横たわる黒田の脇に、服のシミを作った原因である血液が、水溜りのようになつていた。

「せ、先生……」

呼びかけて、空は震える手を黒田に伸ばす。手が黒田に触れる前に、その手を掴んだ者があつた。

「やめろ、空。死んでる」

空の手を掴み、淡々とした口調で光は言った。

「し、し、死んでるって何で。そんなの、まだ分からぬじやないか」

光を見上げて言うと、光は首を横に振つた。

「見たら分かるだろう」

そう言つて、光は空の手を離すと、黒田の脇に立つた。黒田の顔を覗きこんで言う。

「瞳孔開いているし、これだけ出血してたら、まず助からないよ」「何で、何でそんな冷静なんだよ。し、死んでるなんて、ど、どうして」

「お前がさつき放り投げた那個のナイフで、誰かが先生を刺したんだ」光が言つた通り、先ほど空が手にしていたのは、血の付いたナイフだつた。空は先ほど放り捨てたナイフに視線を送る。ナイフは床を滑つて、空から一メートル以上離れた位置に落ちていた。

「誰つて、誰だよ」

空は光に問う。光は分からぬじやないといつて首を横に振つた。

「と、とりあえず、警察に電話したほうがええんか？ それとも先生呼ぼか？ その前に救急車……」

「ああ、どうしよう。俺、思いつきり先生の上にのつかつちゃたよ。制服に血がついてる。ああ、もうどうしよう？」

空の制服には擦り付けたような赤い後がある。先ほど手についた液体を、シャツで拭つたような気がする。あの液体は黒田の血だったのだ。

「とりあえず、先生に連絡して……」

光の言葉を遮るように、後方から声があがつた。

「ひ、人殺し……」

その声に、空は慌てて振り返る。そこには空たちがずっと気にしていた人物がいた。

坂木だ。坂木はドアの縁を掴み、こちらを凝視している。

「先輩……」

光が少し驚いたように呟いた。坂木は、血の氣の失せた顔を、廊下に向けた。

「誰か。誰か来てくれ、人が、人が死んでる」

坂木が叫んだ声に答えるかのように、一いち方に向けて廊下を駆けてくる複数の足音が大きく校舎に響く。

まもなく教師達が数名、理科室に踏み込んできた。

そして、全員が黒田の死体を前に絶句した。

第十三章 犯人は誰だ？

第二理科室へ向かう途中の廊下に、立入禁止のテープが張り渡され、その前には人垣ができていた。まだ残っていた生徒達が野次馬と化していたのだ。

テープの内側では、警察関係者たちが所狭と立ち働いている。

事件現場となつた第二理科室の隣の教室に、空たちはいた。事態を知つた校長が慌てて警察を呼び、駆けつけた警察が関係者達をちようど良いとばかりに理科室の隣で待機させているのだ。

教室の中では、殺人現場に駆けつけた教師数名と、坂木が壁にもたれるようにして立つてゐる。そこから少し距離を置いて、空は椅子に座らされていた。その傍らには光と、海もいる。扉の前には警察官が一人立つてゐた。

「ああ、俺絶対犯人にされるよ」

頭を抱えた空に、光が声をかけた。

「それはないだろ。警察だつてバカじやないはずだ」

「でも、俺、凶器触つちゃつたんだよ。暗かつたからわからんなくて、つい。あのナイフ、俺の指紋ついてるし」

「……でも」

海が何か言いかけたとき、教室の扉が勢いよく開いた。

そこに現れたのはまだ若い男性だつた。顔立ちは悪くなく、どちらかというと整つてゐる。だが、着てゐるスーツはよれよれで、染めていない黒髪は中途半端に伸びていた。男は室内を見回して、頭を搔きながら口を開いた。

「あー皆さん。お待たせしました。一人ずつお話を窺いたいんで、呼ばれた方は隣の理科準備室へお願ひします」

そして教師の一人が名指しされ、教室を後にする。その後しばらくして教師が戻つてくると、別の教師が呼ばれ教室を出て行く。そういうこゝりしているうちに、いつの間にか呼ばれていないのは空たち三

人だけになつた。今は坂木が別室で事情聴取を受けているはずだ。空はどんどんと不安になつていく。制服に着いた血液、自分の指紋が残つたナイフ。これだけあれば、自分が犯人にされてもおかしくはない。空は尋問される自分を思い浮かべ、体を震わせた。脳裏には黒田の空虚に見開かれた目が思い出される。

ガラガラと扉が開いて、坂木を伴つた刑事が現れた。

「次、えーとそこの中君」

海に肩を指でつつられて、空は俯けていた顔を上げた。刑事に指名されたのはどうやら空だったようだ。どうしようかと、傍らに立つ光と海を交互に見る。

「あの、刑事さん

「ん？ なんだい」

刑事は眠そうに目を細めて、呼びかけた光を見る。

「僕達三人、一緒ではダメでしょうか」

刑事は少し考えるそぶりをしながら、頭を搔いた。何故か視線を空に一度据えてから、頷いた。

「ああ、まあいいよ。三人一緒にいで」

あつさりと刑事はそう言つて手招いた。空は立ち上がり刑事の後ろについて行く。

少し埃臭い理科準備室には、壁をふさぐように棚が並べられていた。ただでさえ狭い部屋が余計に狭く見える。棚には何かよく分からぬ標本やホルマリン漬けの瓶が並べられていた。薬品の瓶が置かれた、鍵の付いた棚もある。

狭い部屋にイスを運んだのか、一脚の椅子が部屋の真ん中に対面するように並べられている。その一脚に年配の刑事が座つていた。少し中年太り気味な男は、眉間に皺を寄せて若い刑事を睨む。

「おい、^{きさいち}私は。一人ずつって言つただろうが、何で三人も連れてくるんだ」

「まあ、まあ、良いじゃないですか。蛇さん。^{あぶ}三人一緒にした方が、時間も短縮できますし」

「だがあ……、ああっ、まあい。とりあえず、えー、そこの、一番小さいの。」
「こち来て座つて」

年配の刑事は手招きしながら空に向かつてそつと言った。空は刑事の物言いに少し腹を立てながらも、言われるままに、年配刑事の前に座つた。

その時。ノックの音と共に理科室と準備室を繋ぐドアが開いた。
「あ、虹さん。ちょっとすんません。寺坂さんが呼んでます」「ちつまだ終わっていないんだぞ。まあ、良いわ。おい、私市。お前やつとけ」

そう言って、虹さんと呼ばれた年配刑事は、呼びに来た刑事と一緒に部屋を出て行つた。

「あー、じゃあ、事情聴取します」

私市と呼ばれた刑事はそつと聞いて、年配の刑事が座つていた椅子に腰掛けた。眠そうな顔で、懐から革張りのメモ帳を取り出す。

「えーと、まず、名前と学年教えてくれるかな」

そういうながら、刑事は一人一人に確認する様に顔を向ける。二人はそれぞれに名前と学年を答えた。

「君達が第一発見者だったようだね。ビックリしただろ? 被害者は君達の担任の先生だったんだって?」

「はい」

「君達は、そもそもどうして理科室に来たのかな」

「加賀見先生に言われて、理科室の鍵を閉めに……」

空は自分たちに使いを頼んだ、先生の名前を告げる。そもそもあの先生が鍵閉めなんて頼まなければ、こんな面倒ごとに巻き込まれずにするんだのに。

「加賀見先生つて?」

「生物の先生です」

答えたのは光だった。私市と呼ばれた刑事はフンフンと頷きながらメモを取つていて。

「なるほど、君達はその加賀見先生に頼まれてこの理科室の鍵を閉

めにきたんだね。それで、該者を発見した、と

「はい……」

空が力なく頷くと、私市はボールペンを振り回しながら尋ねた。

「じゃあ、その時の様子を詳しく話してくれないかな」

空たちは私市にその時の様子を話して聞かせた。時々私市がはさむ質問にも素直に答える。もつと厳しく質問されるのかと思つて、空は、あつさりとした私市の反応に少し戸惑つ。

「あの、俺、犯人にされませんよね」

恐々聞いた空に、私市は笑みを見せた。その笑みを見た空は安心する所か逆に不安になる。人を不安にさせる笑顔を見せた私市は、口を開いた。

「それは何とも言えないな。でも、それを言つたら君達全員容疑者にはなるしね。でも、心配する事ないよ。きちんと調べて、調べて調べ上げて、結論を出すからね」

「はあ……」

空は分かつたような、分からぬような気持ちで、頬を搔く。そんな反応を気のせいかもしけないが楽しげに見ていた私市は、視線を光に移した。

「えー、ここからは、刑事の質問とは別で個人的に聞きたいんだけど。君はオリンピックに出てたよね。スケートで」

笑顔で問い合わせた私市を、空と海は睨んだ。余計な事を言いやがつてと思つたからだが、光は気になった様子を見せなかつた。

「そうです」

軽く頷いた光に、私市は持つていた手帳を背広の内ポケットにしまつと、光の前に立つた。無理やり光の手をとつて握る。

「いやー、嬉しいよ。こんなところでオリンピック選手と会う事が出来るなんてつ」

「……刑事さん。ミーハーですか？」

「ははは、よく言われるよ」

とげのある声で聞いた空に、私市は気を悪くする事もなく頷いた。

私市は光に笑顔を向ける。

「悪いんだけど、後でサインもらえないかな」

「うううしきそなことまで言い出した私市に、空たちは呆れた。この刑事は場所をわきまえるって事を知らないのか。大人のくせに。」

「……幾つか、僕の質問に答えてくれるなら、書いてもいいですよ。サイン」

スケートをしていた事を言われるのを嫌っていた光の言葉とは思えず、空と海は光を見た。光はじつと刑事を見詰め、答えを待っている。

「うーん。そうだね。僕が答えられる事なら、構わないよ」

そう言って、私市はやつと握っていた光の手を離した。

「じゃあ、一つ目の質問です」

そう言って、光は眼鏡を中指で押し上げた。私市は何でも聞いてくれと言わんばかりに笑顔で頷く。

「僕たちが理科室に着いたとき、窓が一箇所だけ開いていました。そこに誰かが出入りした痕跡はありましたか」

私市は眠そうにしていた目を見開いた後、口元に一ヤリと笑みを乗せた。

「なかつたよ。少なくとも見た感じではね。あの窓枠や窓の棊にはかなり埃が溜まつていてね。例えば、そこから出ようとして手や足をかけたとしたら。その部分だけ埃がとれるだろ？ それが全くなかつた。あの高さにある窓から出ようとしたら、どうやっても、手と足をかけるしかないからね」

黙つて聞いていた光は顎に手をやつて考えるように床を見ていた。だが、やおら顔をあげると理科室と準備室を繋ぐ扉を指差した。

「では次の質問です。ここでの、理科室と準備室を繋ぐ扉の鍵と、あっちの準備室と廊下を繋ぐ扉の鍵は閉まつていましたか」

この準備室は理科室と準備室を繋ぐドアと、準備室から直接廊下に出られる扉と出入り口が一つある。何故光はこんな事を聞いているのだろうか。空はそう思うのだが、今聞いてもうるさいと言われる

るのがおちだらうと、黙つて口をつぐむ事にする。

私は親指を立てて理科室と準備室を繋ぐドアを示してから口を開いた。

「このうちのドアは鍵が閉まっていたけど、そつちのドアは開いてたよ」

今度も親指を使って廊下側に通じる扉を指し示す。空たちは私は指で示すたびに振り子の様に首を動かさなければならなかつた。「じゃあ、これで最後です。坂木先輩は刑事さんたちになんて説明していましたか」

この質問には私は眉を顰めた。空は突っ込みすぎだらうと思つたが、忠告を口にする前に光が言つた。

「言えませんか？」

「……この質問に答えなかつたら、君からサインはもらえない？」

私はがそう聞く。空と海は顔を見合させた。なぜ現役の選手でもない光のサインがそんなに欲しいのか。空と海は解らなかつたのだ。

「ええ」

光が私の質問に頷いたので、私は仕方がないと言つようと肩を竦めた。

「いいよ。教えよう。坂木先輩というのは生徒会長だと言つていた彼のことだよな」

私は空たちが三人同時に頷いたのを見て、背広の内ポケットからまた黒革の手帳を取り出した。

「彼は生徒会の仕事を終えて、帰宅しようとしていたそうだ。この上の階に生徒会室があるんだろう？ ま、それでだ。帰ろうと一階に着いたとき、君達のうちの誰かがあげた悲鳴を聞いたらしいんだ」その悲鳴を上げたのは俺だと空は思つ。少し恥ずかしい。

「悲鳴はこの理科室の方から聞えたと思つた坂木君は、走つて理科室にたどり着いた。そして、服に赤い染みのついた高橋君と倒れている人を見て、君が人を殺したんだと思つたらしい」

「それで、ヒトゴロシって叫んだんだ。先輩」

空は青い顔でそう叫んでいた坂木の姿を思い出す。光はまた顎に手を当てて何か考え込んでいる様子だったが、その手を下して口を開いた。田はまっすぐ私市を捉えている。

「坂木先輩は本当に走って理科室に来たって言つたんですか」

「ああ、確かだよ。彼は走って理科室まで来たと言つていた」

「念を押した光に、生真面目に私市は答えてくれた。

「じゃあ今度色紙持つて来るから、サインよろしく」

そう私市は言うと、空たちを廊下に通じるドアへと促した。これで質問は終わりだと言つよう。

第十四章 犯人である可能性

「そのまま帰してくれたらいいなと思つた空だつたが、やはりそう甘くはなかつた。空達は私市に連れられ、理科室の隣の教室へとまた戻る事になつた。

私市が教室の扉を開くと、教室にいた人間がいつせいにこちらを見る。空はその視線を避けるように俯いた。

「刑事さん。いつまでここに居ないといけないんですか」

まず口を開いたのは坂木だつた。その声に顔を向けると、坂木は眉間に皺をよせていた。

「まあ、そう言わず、もうしばらく待つててくれないかな」

穏やかに言った私市に、坂木はくつてかかる。

「僕はこの事件には関係ありません。そこの彼が犯人でしょう？ 制服に血がついているじゃないですか」

坂木はそう言つと、空を指差した。空は身体を竦める。私市はそんな空の反応に苦笑いを浮かべ、坂木を見た。

「まあ、まあ。まだ調べは終わつてないからね」

「でも、僕らは彼らより後から來たんですよ。僕達が先生を殺せるわけがないじゃないですか」

「だから、今それも含めて調べているんだよ、少し大人しくしてくれないかい」

私市がくいさがる坂木に、面倒くさそうに答えた。だが、私市の言葉は坂木に余り通じていなかつたようだ。

坂木は私市が取り合つてくれないと見ると、今度は空達に詰め寄つた。

「おかしいじゃないか。君達の周りでばかり妙なことが起きる。赤いペンキが撒かれたのも君達の教室。殺されたウサギ小屋には君の生徒手帳が落ちていた。それに今度は制服に血までつけて。もう犯人じゃないとは言い逃れできぬいぞ」

そう言つて空を睨む坂木に、空は言葉を返せない。そこに、私市が割つて入つた。

「おい、ちょっと待つてくれ。赤いペンキに、ウサギ殺し？ 一体何の事だい」

この言葉に、教室にいた教師達が慌てたような顔をしたが、もう遅い。私市の言葉を受け、教室で起きた事件と、ウサギ小屋の事件を私市に話すことになった。

立つたままではなんだからと、教室にいた全員がイスに座る。坂木はその後、我が意を得たとばかりに、二つの事件について語つた。私はそれに頷いたり質問を挟んだりしながら、坂木の言葉を最後まで聞いた。

坂木が私市に話している間、空はどんどん自分達がふりになつていくような気がした。

教室の事件では光が犯人ではないかと噂になつてゐるし、ウサギ小屋の事件では空の生徒手帳が落ちていた。空は体育教師の証言と、アレルギーの話をすれば、犯人から除外されそうだが、そうなると光が疑われてしまう。

それに今回の事件では、空の指紋のついた凶器のナイフがある。それを証拠として押し通されたら、どうすればよいのか。空には分からなかつた。

「これだけ、彼らの周りで事件が起こつてゐるんです。今回も彼らが犯人でしょう。大方、二つの事件の犯人であると先生に見破られ、先生を殺した。浅はかな行動ですが、そんなところでしょうね」「ふーむ。なるほどねえ」

納得するように私市は呟いた。空の不安がよりいつそう増す。

「ですから刑事さん。僕を調べても無駄ですよ。僕は急いでいるんです。もう帰ります」

言つだけいうと、坂木は立ち上がる。扉へ向かつて歩き始めた。

「待つてください」

その背を呼び止めたのは、私市でも教師でもなく、光だった。

光は立ち上がり、口を開く。

「坂木先輩。僕は、今回の一連の事件。一番犯人である可能性が高いのは先輩、あなただと思います」

光は坂木の目を見つめながら、教室にいる全員が良くな聞かれる声で言つた。坂木は黙つて光を見返した。

「おい春名。勝手な憶測でものを言うんじゃない。坂木が犯人な訳がないだろう。坂木は生徒会長だぞ」

顔を真っ赤にして教師の一人が怒鳴つた。空はそんな教師を見て、勝手な憶測を喋つていたのは、坂木じゃないかと思う。どうして坂木には言わないので。

「まあ、まあ。先生。坂木君の意見も聞いたんだ。彼の意見も聞いてあげましょうよ」

今にも立ち上がらんばかりの教師をなだめるように、私市が教師に声をかける。先ほどの眠そうな顔とは打つて変わり、どこか楽しそうな表情だ。そんな私市に見つめられ、教師は居心地悪そうに、怒鳴つた時に浮かした腰をおろした。

「さ、春名君。続きをどうぞ」

言われて、光は頷いた。教師から坂木へと視線を移す。

「では、教室の事件から。……僕がまず疑問に思つたのは、なくしたはずの鍵が何故教室に落ちていたかということです」

「それは、お前がなくしたとウソをついて隠し持つていたんだろう。みんなそう言つてる」

坂木が反論するように声を上げた。そんな坂木に、光は首を横に振つて見せた。

「それはありえません。何故なら、鍵は教室の中で見つかったからです。それは先輩も知つていますよね。何せ、その鍵を見つけたのは先輩、あなたですから」

「どういう意味だ。僕は鍵を拾つただけだ。鍵を拾つたからといって何故僕が犯人になるというんだ。お前が教室にペンキをばら撒いた後、鍵を教室に捨てたんだろう」

「先輩の話しさは矛盾しています。仮に僕が犯人で、教室にペンキをばら撒いた後、鍵を捨てて出て行つたなら。どうやって教室の鍵を閉めたんですか？ 先輩は知っていますよね。あの朝、事件が発覚するまで、教室の鍵が閉まっていたのを。そして、予備の鍵は用務員さんが持つていて使えなかつたのを。僕が直接先輩にお話しましたですから」

「……」

坂木は黙つて、光を睨んだ。光は中指で眼鏡を押し上げると、また口を開いた。

「そこで僕は考えました。犯人はどうやつて密室を作り上げたのか。でも、難しく考える必要はなかつたんです。一番簡単にそれが出来るのは、鍵を拾つた人物なんですから」

「……」

「犯人は教室にペンキを撒いた後、教室を出て、持つていた鍵で教室のドアを閉める。そして、翌日何食わぬ顔で、教室に鍵が落ちていたと見せかければいい……」

「確かに、そう言われれば僕が犯人のように聞えるな。だが、全て推論ばかりだ」

坂木が光の言葉の途中で口を出した。それを咎めるでもなく、光は頷いた。

「ええ。確かにそうです。でもそれは、先輩も同じでしそう？」

「……」

「次に、ウサギ小屋で、ウサギが殺された事件ですが。先輩は空を犯人のように言いました。でも、彼には犯行は不可能です。彼はアレルギーを持つていて、ウサギに近づく事さえ出来ないのですから。それに、彼の生徒手帳はウサギが殺される前日まで、僕が持つていました」

「なら、お前が犯人じゃないのか？」

坂木は光を指差した。その顔は心なしか青白い。

光はただ静かに首を横に振つた。

「……僕は事件のあつた後、一度ウサギ小屋を見に行きました。その時思つたんです。どうしてウサギ小屋の鍵は壊されているのに、飼育小屋のあるスペースへ入る入り口の鍵は壊されていないのだろうと……」

言われて、初めて空は気づいた。そうか。確かにそうだ。飯田に頼んでウサギ小屋を見に行つた時、確か飯田は飼育スペースを囲むフェンスの扉の鍵を開けていた。そして、ウサギ小屋に入れるかと言つ間に、飯田はこう言つた。ウサギ小屋の鍵は壊れているから、入ろうと思えば入れると。

あの時はちつとも疑問に思わなかつた。と、言つより、それがどうして疑問になるのか、空には分からなかつた。聞きたいが、口を挟める雰囲気でもない。

「フェンスをよじ登つて入つたんだろう」

投げやりな口調で、坂木が声を上げた。

「でも、そんな目立つようなこと犯人がするとは思えません。それに、ウサギ小屋の鍵を壊す道具があつたなら、何故、フェンスの鍵も壊さなかつたんでしょう」

「それは……」

「鍵を壊す必要がなかつたから。そう考えれば、謎は解けます。犯人は少なくともフェンスの鍵を持つていた人物。それは三人に絞られます。生物部の部長をしていた先輩か、久保、そして……」

そこまで光が言つた時だつた。いきなり坂木が笑い出した。坂木を除く全員が呆気に取られた。教室中の視線が坂木に向けられる。

「ふ、はははは。……その通りだよ。春名。僕の負けだ。お前の言う通り、僕だよ。教室にペンキをばら撒いたのも、ウサギ殺しも。そして……黒田先生を殺したのも」

誰かの息を飲む音が聞えた。坂木の突然の告白に、教室中が静まり返つた。

空はそつと光を見る。光は珍しく渋面を作つていた。

「おい、嘘だろう坂木。何だつてお前が」

教師の一人が、そう声をかけた。優秀な生徒として名が通つてい
る坂木の告白が、信じられないのだろう。

「黒田先生が僕を脅したからですよ」

「何だつて？」

「黒田は僕を脅したんですよ。ウサギを殺したところを。黒田を殺した理科室の窓から、飼育小屋へ行くフェンスが見えるんです。黒田は、僕がそのフェンスの入り口から飼育小屋の方へ入つていくの見て、早く帰るように注意しに来たんですよ。そして、見られてしまった。僕がウサギを殺している姿を」

「……そんな」

「黒田は言いました。学校にばらされたくなければ、金を持つて来
いつて。一度は金を払ったけど、黒田はそれだけじゃ満足しなかつ
た。また金をせびられて、思つたんですよ。このまま、一生コイツ
に金を払うことになるなんてまっぴらだつてね。だから、殺したん
です」

「何でことだ」

教師は、そう咳くと顔を手で覆つてしまつた。余程ショックだつ
たのだろう。坂木はそんな教師から、光に視線を戻した。

「春名。お前は気づいていたんだろう。僕が黒田を殺したつてこと
も。……どうして分かつた？」

「……」

「答えるよ」

坂木に催促されて、光は一度目を閉じてから、口を開いた。

「先輩の、登場の仕方です」

「何だそれ？」

光の言葉に、それまで黙つて聞いていた空は思わず口を挟んだ。
しまつたつと思って口を押さえたが、もう遅い。空は周囲の視線を
一身に浴びるはめになつた。

「空はおかしいと思わなかつたか？ 先輩が叫ぶまで、坂木先輩が
入り口にいた事に気づかなかつたのを」

「え？ ゼンゼン」

空が正直に答えると、光の眉が一瞬上がった。あ、ちょっと怒つたかも。そう空が思ったとき、光は海に質問を移した。

「海は？」

「ああ、確かに。あれ？ って思ったような気はするわ。でも、何でやろ？」

海は首を捻る。空も同じように首を捻つてみるが、やっぱり分からぬ。

「足音」

光がそう呟いた。空が、えっと聞いて返す間も無く、海が声を上げた。

「そうか、足音。そうや。先輩に気づかんかったんわ、先輩の足音が聞えんかったからや。先生達が来るのは分かったもんな、足音で」
そう言われてみれば、そうかもしない。空は思い出した。坂木の叫び声に答えるように、教師たちの足音が静かな校舎に響き渡るのを。

「……先輩は刑事さんにこう言つたそうですね。空の悲鳴を聞きつけて、走つて理科室に向かつたと。それを聞いて、やつぱりおかしいと思つたんですよ。走つて来たなら、確実に僕達のうちの誰かの耳には入つてきますからね。それに、先輩は刑事さんにこうも言いました。黒田先生の死体と、空の服についている血を見て、空が犯人じやないかと思つたと。でも僕らの背後にいた先輩には、黒田先生が倒れていっているところは見えたかも知れませんが、空の服についた血は見えなかつたはずです。僕らは先輩の叫びに驚いて振り向いたんですから。先輩の証言は矛盾しています」

「……なるほどな。じゃあ、僕がどうやって、お前らに気づかれずに、教室の前まで来れたのか。それも分かるか？」

坂木がなおも問う。光はよどみなく答えた。

「先輩が、僕達が行く直前まで理科室にいたからです」

「え？ でも、俺たち先輩見てないぞ」

空が疑問の声を上げた。それに、海も同意する。

「そりや。先輩が廊下に出てきたら、鉢合わせるやん」

「空、理科室の隣にあるのは？」

唐突に質問されて、空は良く考えもしないで、答えた。

「この教室？」

「ちやうちやう。理科室の隣は理科室や。さつき事情聴取受けたところやんか……つて、そつか。先輩は、理科室に隠れとつたんや」

空につつこみを入れていてる途中で思いついたのだろう。言葉の後半はやけに興奮氣味だ。そんな海に、光は頷いてみせる。

「あの時、空は走つて理科室に向かつた。さつきも行つた通り、走つてくる足音はよく響くから、先輩は気づいたんでしょうね」

そう言いながら、光は坂木を見る。坂木は口元に笑みを乗せた。

「ああ。そうだ。誰かが走つてくる足音が聞えてきて焦つたよ。慌てて、鍵の開いていた理科室に隠れたんだ。そしたら、理科室に来たのが君達だと分かった。丁度いいからこれの罪も君達に被つてもらおうと思つたのに。上手くいかなかつたな」

「先輩……」

光が何か言いかけた。だがそれを遮るように、坂木が口を開いた。
「さつきも言つたけど、僕の負けだよ、春名。うまく騙せたと思つたんだがな。結局、お前にばれたのは、全てボクの詰めの甘さが原因だつたわけだ」

坂木が光から私市へと、顔を向けた。

「刑事さん。僕が犯人です。自首します」

そう言つて坂木は、私市の前に両手を差し出した。そんな坂木の肩に手を置いて、私市は扉の前に立つていた警官に声をかけた。

「おい、時間は？」

警官は慌てたように腕時計を見る。

「午後五時五十六分であります」

「よし、午後五時五十六分。自首。憶えといてくれよ

私は警官にやう言いおいて、坂木の背に手を添えると、教室の外へ向かうように促した。教室にいる全員が一人の背を見送るよう視線を向ける。

その背に、光が声をかけた。

「先輩」

坂木はその声に足を止めた。ゆっくりと振り向く。

「海を突き落としたのは、誰ですか？」

その問いに、坂木は口元だけで笑んだ。

「さあな。足でも滑らせたんだろう？」

そう言つたあと、坂木は私はに断りをいれ、光のもとへ寄つて來た。

光の耳に口を近づけて、何か囁く。すぐに光のもとから離れると、坂木は私はと一緒に教室を出て行つた。

空はそつと光を見る。

光は何かを考え込むように、口元に手をあてて俯いていた。

第十五章 光の疑問

坂木が捕まつた日の夜から、マスコミ関係者がこぞつて学校の周りに集まつてきた。その光景は全国ネットで配信され、空も家のテレビで見ることになつた。

坂木の名前は未成年という事で伏せられていたが、学校名は公表されている。午後八時過ぎに学校から電話があつて、明日は休校になることが分かつた。

結局二日間休校になり、四日目。空は久しぶりに教室に入った。教室はいつもよりどこかざわついており、話しの内容は事件についての憶測がおもだつた。

「おっす、空。久しぶり

海が空に話しかけた。空も挨拶を返す。

「おはよー、外すごいな。マスク!!!? すつごい取り囲まれたよ」

「おう、でも、下手に担任の死体見つけたなんて言うたらあかんで。面倒になるからな」

「そんなの分かつてるよ」

空は海に小声で囁かれ、同じように返した。

そのあと、教室内をぐるっと見回す。この三日間気にかかつっていた事があつたからだ。

「飯田、来てないな」

ぼそりと空が呟いた。海は頷く。

「ああ。まだ見てへんな」

飯田は坂木先輩と仲が良かつた。きっと今回の一連の事件全て、坂木先輩が起こしたと知らされて、ショックを受けているに違いない。

「あ、朝倉」

朝倉はちょうど今来たのだろう。鞄を手に提げて、空の横を通り

過ぎようとしていた。

「何？」

どこか暗い表情で朝倉は足を止めて、じらりと振り向いた。

「飯田、来てないみたいだけど、何か知らない？」

「……リンコちゃんのお母さんから電話があつて、リンコちゃん具合悪いって部屋から出でこないんだって。……先輩が犯人だつて、知らされてかなりショックだつたみたいよ」

そう言つて朝倉は一つ溜息を吐いたあと、自分の席に向かつた。

「朝倉もまといつとるみたいやな」

「うん」

空は海に頷くと、あいたままの飯田の机を見つめた。

「そういえば、光の姿も見てへんな」

「鞄があるから学校には来てると思うけど」

空が、海に答えて春名の机を見る。その時視界に、教室に入つてくる光の姿が映つた。

「ほり、いた」

光を指差して、海に教える。海は空が指差した方を見ると、光に向かつて歩き出した。海は無言で光に近寄ると、いきなり光に抱きついた。

教室にいた女子達が、小さく声を上げる。

「光くーん。会いたかったわー」

海お得意の女言葉が教室に響いた。近くにいた男子生徒からは、熱いねーなどと野次が飛び。抱きつかれた光は相変わらずの無表情で、動きを止めていた。

「いやー。何やつてるのー」

空の近くにいた女子の一人が、友達に向かつて囁く声が聞こえる。嫌とか言つわりに、嬉しそうじやん。と、空は思つ。男が男に抱きついてるいだけなのに、何がそんなに楽しいのか。女子のそういう心理は、空には分からぬ。と、いうか分かりたくない。

「……海」

「ん？ 何や？」

光の呼びかけに、海は笑顔で答えた。

「いい加減離れろよ。キモイから」

「んー。確かに」

そう言つて、ようやく海は光を解放した。

海の奴、一体何がしたかったんだろう。光が自分の席につくのを見計らつて、空は光と海のもとへ行く。光に朝の挨拶をしてから、海を見る。

「海、お前バカだろ」

「なんやと、誰がバカやねん。せめてアホって言えや」

「え？ バカよりアホの方がいいわけ？」

「おう。当たり前やん」

「つて、そんな事話しに来たんじゃないんだよ」

「じゃ、何や？」

「お前、何がしたかったの？」

空に聞かれて、海は一度ポカンとした顔をした。そして思いついたように、口を開く。

「ああ、光大丈夫かなあ思うて」

「思つて？」

「確かめたんや」

「……本当にバカだな」

光は海の言葉を聞いて、溜息交じりにそう言つた。それに対して、海はまた、バカいうなど、文句を言つている。

空はしばらく考えて、理解した。成る程、海は光が心配だったのだ。元気かどうか確かめるために光に抱きついた。抱きついた時、光がどんな反応を示すかで、光の今の状態を見極めようとしたのだろう。

しかし、他にも方法はあったと思つただが。

「あの、春名……」

躊躇いがちな声が空の耳を打つた。声の方を振り返ると、クラス

メートの男子数名が集まっていた。いつも、光を無視していたはずの久保達だ。一体光に何のようだというのだろう。そう思つて、空は思わずファイティングポーズをとる。

「なんだよ。久保。また光に嫌がらせしようつていうのか」

幾分強い調子で言つた空を、少し見ただけで、久保は空から田を逸らした。久保は神妙な顔つきで、光を見る。

「あの、春名。俺たち、お前に謝りたくて」

「……」

光は無言で、久保達を見詰めている。久保は唾を飲み込んだ。

「今まで、ずっとお前がウサギ殺したと思ってたから、俺、お前のこと無視したり、嫌がらせしたり……。本当、後悔してるんだ」

「俺も」

久保の横にいた三宅が言つた。久保達はそろつて、光に向かつて頭を下げる。

「ごめん」

「ごめん、ごめんと、それぞれがそれぞのタイミングで謝る。頭は下げたままだ。謝罪の声が大きかつたせいで、教室中の視線がこちらを向いていた。

さて、光は何と答えるのだろうか。空はファイティングポーズをといて、黙つて事の成り行きを見守る事にした。

「……別にいいよ。気にしてないから」

その声に久保達は恐る恐るという感じで、下げていた頭を上げた。

「本当に？」

「ああ」

肯定を聞いて、久保達の顔に安堵が浮かぶ。だが、その中で一人、三宅が冴えない表情のまま久保を肘で突いた。

「おい、あれも謝るんじやなかつたのか」

「あ、そうか。あの、春名。俺たちもう一つ謝る事があるんだけど」「分かつた、アレだろう。黒板の落書き」

空は大きな声でそう言った。久保達の顔を見れば図星だった事が

解る。

「あの、そなんだ。あれも俺たちだつたんだ。本当に『メン』」
またも謝罪の言葉を口にした久保達を見つめて、光は口を開いた。
「知つてたよ」

「へ？」

「僕は、記憶力がいいんだよね」

「はあ……」

突然自慢じだした光に、久保達は呆気にとられたように頷いた。
「何度も一緒に勉強しただろう？ その時お前らの筆跡憶えたんだよ

よ

「筆跡、憶えてたんだよ。だから黒板に誰が何を書いたのかも憶えてるよ」

そう言って光は口元だけで笑んだ。近くで見ていた空はもちろん、
聞き耳を立てていたクラスメート達も思つただろう。
こいつ恐いと。

久保達を見ると、皆、心なしか顔色が悪い。きつと光を敵に回した事を後悔しているに違いない。久保がしばらくして口を開いた。

「あの、『冗談……だよな』

「言おうか？ 誰が何書いたか」

光の言葉に、慌てて久保達は辞退した。空は、そんな久保達に、
ずっと疑問に思つていたことを聞く。

「あのや、黒板のイタズラ書きの中に、人殺しつつあつたけど、あ
れつてウサギのこと書いてたのか？」

空の言葉に、久保達は顔を見合させた。お前書いた？ などと言
い合つていたが、結局誰も書いていないといつ結論に至る。
「あ、思い出した。アレだよ。アレはもともと書いてあつたんだよ
「どうこうことやねん」

海が聞くと、二毛が答えた。

「高橋が言つてゐのつて、名前の下に書いてあつたやつだろ？ あ

れ、俺たちが教室に来た時にはもう書いてあって、それ見て俺たちいたずら書きすること思いついたんだよな」

三咲の言葉に、久保も頷く。

「そつそつ。確かになんで人殺し？ とか思つたけど、その時はそんな気にしなかつたな……あの、本当にごめんな、春名」光が見ている事に気づいた久保は、また謝つた。光はそれに頷いた。

「じゃあ、誰が書いたんやろうな」

海の独白に、全員が首を傾げた。

放課後。空は光と海と並んで教室を出た。外にはまだカメラマンや、リポーターが待ち構えていて、教師からはくろぐれも彼らの相手をしないようにと厳重に注意された。

階段を下りながら、空は口を開く。

「それにしても、久保達の顔。あれ本気で恐がつてたよな」「ああ、ホンマに。俺もちょっと怖かったもん」「なあ、光。あれ本気で、憶えてんの？ 誰が何書いたか」「……」

空の問いに、光はいくら待つても答えなかつた。光は心ここにあらずといった表情である。

「おい、光つてば」

大きな声で呼びかけると、光はようやく空の声に気づいたように、元へと俯けていた顔を上げた。

「え？ 何。何か言つた？」

「何か言つたつて……」

「何か気になることでもあるんか？」

海の問いに、光は少し渋い顔をする。

「本当に、先輩が犯人だったのかなつて考えてた」

「へ？ だつてやう言ひ出したのお前だらつ」

驚いて問う空に、光は心なし苦い表情で答える。

「動機が解らない」

「へ？ 先輩言つてたじやないか。黒田に斬られたから殺したつて」「そつちじやないよ。教室の事件とウサギの事件の方。それに、どうして僕らの周りでばかり事件が起きたのかも気になつてて」

「もしかして、光。お前自分が狙われてたなんていうんじやないだろうな。それは自意識過剰つてもんだぞ」

「そうかな……」

空の言葉に光はまた考え込むような顔をする。その横で、海が急に声を上げた。

「あ。そういうえば、光に聞こいつと思つとつたことがあるんやつた」「何？」

「坂木先輩が刑事さんに連れて行かれる前、光に何か言つてつたやる。気になつててん。あれ先輩、何を言つとつたんや？」「海の言葉に、光はすぐに答えを返した。

「氣をつけろつて言われただけだよ」

「何を氣をつけんの？」

「さあ……」

「分からなかつたら氣をつけよつがないじやん」

そう言つ空に、光は頷きをかえした。そのあと、海を見る。

「そういうえば、海を突き落としたのが誰だったのかも、結局聞けなかつたな」

「ああ。そういうえばそつやけど。アレは俺の勘違いかも知れへんし。なんかそんな気がしてきたわ」

「でも、あの時はお前絶対に突き落とされたつて喚いてたじやん」

空がつっこむと海は口を突き出した。

「つるさいな。時間が経つとあやふやになるんや。しゃあないやん」階段を下りきつて、空たちは下駄箱へと向つ。空はせつと靴を履き替えた。ふと光を見ると、光が外履きを手にしたまま動きを止

めている。

「どうした」

尋ねると、今氣づいたよう、「光は靴を一度下に置くと、もう一度下駄箱に手を伸ばした。

そして何かを取り出す。それは白い封筒のよう見えた。

「あ、それって、もしかしてラブレター」

空は光が持っているものを手にして声を上げた。

「うるさい」

光はそれだけ言つと、興味深げに覗こうとする一人の視線を避け、手紙を開くと読み始めた。

しばらくして光は折り畳通りに便箋を折ると、封筒に戻してそれを空に向かつて放つた。

空は慌てて封筒を受け取る。

「何すんだよ」

「やる」

「はあ？ 何がやるだよ」

訝る空を無視して、光は海に視線を向けた。

「悪いけど、用を思い出したんだ。先に帰つてもいいし、待ついても構わないけど、どうする」

「え？ まあ、待つとつてもええけど。用つて何や」

「つていうかコレ、俺にどうじろつつうんだよ」

空が口を挟む。光は白い封筒に視線を向けた。

「十分たつて僕が戻らなかつたら見ていいよ。見たくなかったら捨ててくれ。じゃあ、行つて来る」

そう言つと光は一度出した靴をまた靴箱に仕舞う。そして空と海上に軽く手を振ると、さつき下りてきた階段をまた上つていった。

一人は光の背が見えなくなるまで見送つた。

「とりあえず十分は待つとくか？」

「ああ、そうするか」

「じゃあ食堂に行こうや。何か飲みながら待つといつ

そう言つて一人は食堂へと足を向けた。

空たちと別れた光は、屋上へと向かっていた。ゆっくりと階段を上る。普段滅多に足を運ばない屋上へと続く階段は、掃除が余りされていないのだろう。うつすらと埃が積もっている。光は手すりに掴まり、一度足を止めた。

息を吐くと身体を屈めて痛む足をさする。たつたコレだけ階段を上つただけで、酷く疲れた気がするのも、全てこの足に怪我を負つたせいだ。

そう何もかもこの怪我のせい、否、あの事故のせいだったのだ。それがあの手紙でやつと解つた。今度の事件の真相が知りたければ屋上に来るよう。手紙にはそんな簡単な内容しか書かれていなかつた。だが差出人の名が重要だつたのだ。

そしてその名を見たとき、光はある一連の事件全て、坂木がやつたのではない事を確信したのだった。

屋上へと続く扉が見えている。光はまた足を動かしてゆっくりと階段を上りきつた。

屋上へと続く扉は、うつすらと開いている。そこから明るい日の光が、廊下に細い線を作つていた。

光はドアノブに手を伸ばした。ノブを掴み外側に開く。薄暗い階段を上つてきたせいたのだろう。明るさに反射的に目を眇め、ゆっくりと瞼を開いた。

その目に入ってきたのは光を呼び出した者の姿だった。

光が呼び出しに応じて屋上へと向かつた、そのちょうど一時間前。私は刑事課に向う途中で、少女と同僚の若い刑事が言い争つている姿を見つけた。

可愛らしい少女だ。どこか見覚えのある制服を着ている。

「ああ、清秀高校の生徒さんだね」

声をかけると、少女と若い刑事がこちらを向いた。若い刑事はどこか安心したような顔をして口を開く。

「そうなんですよ。あの例の事件で捕まつた生徒に逢わせろつて聞かないんですよ、この子。私も、変わつてもらえませんかね。俺急いでるんですよ」

私は鷹揚に頷いて、嬉しそうな顔で踵を返した後輩の背を見つめた。

「あの、どうしても逢えませんか？ 先輩に」

恐々と呟かれた声にはっとして、私は目線を下ろした。背の低い少女のつむじが見える。そのつむじを見ながら私は答えた。

「うん。ゴメンね。まだ取調べ中だし、家族とも面会は出来ない。規則でね」

出来るだけ優しく聞えるように告げると、少女の溜息が聞えた。

少女は顔を上げて、大きな目で私は見上げた。

「じゃあ、コレだけ先輩に伝えてもらいたいんです。今日で終わりにするから、安心してと」

「今日で終わりにするから安心して？ どういう意味だい」

内心首を傾げながら問うが、少女は必死で私は見つめてくる。今度は私は溜息を吐く番だった。

「いいよ、それだけで良いんだね」

少女は頷いた。頷いた拍子に長く伸ばした髪が揺れる。

「はい。よろしくお願ひします」

そう言つて踵を返しかけた少女に、私は慌てて声をかけた。

「あ、君名前は？ 彼に誰からと伝えれば良い」

「ノリコからと伝えてください。じゃあ」

そう言つて今度こそ少女は私は背を向け歩き出した。私はそんな少女の背を、見えなくなるまで見送った。どこか寂しげに見えるな。何となくそつ思つた。

第十六章 告白

屋上の扉を開け、辺りを見渡す。そして、そこにいた人物に目をとめた。

光はその人物に声をかける。

「やつぱり君だつたんだね。飯田さん」

少女は薄く笑つた。長い髪が風で揺れる。

「いや、長瀬倫子さんと言つたほうがいいのかな」

光はドアの外へ出た。日に日に暑くなつて来る気候だが、屋上の風は思いのほか冷たかつた。飯田は光が近づいて来るのを待つ様にじつとしている。そして光が立ち止まると飯田は口を開いた。

「最初から私だつて気づいてた口ぶりね。春名君」

「いや。……君がコーチの娘だつて気づいたのは、さつき靴箱の中にあつた手紙を見てからだよ。倫子という名は他に知り合いがない」

手紙にあつた差出人の名は、長瀬倫子だつた。

長瀬……それは光の忘れる事の出来ない人物の苗字。

死んだコーチの苗字だつた。そしてその娘の名はノリコ。あだ名はノンちゃん。

どうして気づかなかつたのだろう。

どうして、気づけなかつたのだろう。

一度、たつた一度だけ、彼女と会つたことがあるのに。

彼女は黒板にメッセージを残していた。

自分を人殺しと呼ぶ人物は一人しかいない。

自分が殺したも同然の、コーチの娘である彼女しか……。
それなのに……。

「何だ。やつぱり気づいてなかつたんだ。あなた、お葬式の時も私の顔見なかつたものね。憶えてるわけがないわよね。私との約束だつて、忘れていたくらいだもの。あなたは」

非難の声を上げて、飯田は一度唇を咬んだ。

「約束したのに、もう一度オリンピックへ行くつて約束したのに。お父さんの最後の願いだったのに。……あなたは、スケートが嫌いだつてだけでお父さんとの約束を破つたのよ。あなたはただの我が今まで、お父さんの最後の願いを裏切つたのよ！」

後半は叫びに近かつた。

光は飯田を眼鏡奥から見つめて、静かに口を開く。
「僕が憎かつた？ 僕を困らせたかった？ だから教室にペンキを撒いたり、ウサギを殺したりしたの？」

「そうよ、先輩じゃない。私がやったのよ。先輩は私を庇つただけ、私はあなたが許せなかつた」

「……」

「だから、有紀ちゃんが失くした鍵を見つけた時。教室にペンキを撒く事を思いついたの。あなたが有紀ちゃんを庇つていたのを知つていたから、教室に悪戯すれば、あなたの責任になると思ったのよ」

「鍵は？ どうして先輩が持つてたんだ」

「私が鍵を捨てるところを先輩に見られていたの。先輩はそれを拾つて、翌日学校で私に返そうとした。でも……」

「教室にペンキが撒かれているのを見た」

「そう。それで先輩は、鍵を自分が今教室で拾つた様に見せかけた。先輩には解つたのよ。犯人が誰か」

そう言つて飯田は一度言葉を切つた。一際強い風が一人の間を吹きぬけていく。飯田は髪とスカートを手で押さえて、それをやり過ごした。

「でも先輩は誰にもそのことを言わなかつた。私があなたを恨んでいる事を知つていたから、私に同情してくれた。私は先輩の優しさに感謝したけど、先輩のやめろつて言葉は聞けなかつた。あなたは事件のあつた後も平然として、先生の追及もあつさりかわしてた。あの事件であなたを苦しめる事は出来なかつたつて、分かつたから」「だからウサギを殺したの？」

溜息混じりの光の問いかけに、飯田は素直に頷いた。しつかりと光を目に捉え、睨みつけるようにして話す。

「さうよ。あなたがよくウサギを見に来ていたこと知つてたから、このウサギを殺せば、きっとあなたを苦しめる事が出来るって、そう思つたの」

「……先輩が僕のポケットから生徒手帳を盗んだのは、君が頼んだから？」

飯田はその問いに首を横に振る。次々と明かされる真実は、手紙を見たときに気づいた光の考えを全て裏づけていく。

「いいえ。先輩は私がまた何かした時に、あなたに犯人になつてもらおうとしたの。そうすれば、私の復讐^{雪辱}が終わると思つたのよ、先輩は。でもあの人、頭良いくせにどこか抜けっていて。間違つてあなたのじゃなく、高橋君の生徒手帳を盗んでいたの」

そのせいで、空は疑われる事になつたのだ。高橋君には悪い事をしたわと、飯田は淡々と告げた。

「先輩は君の犯行をいつ知つたんだ」

「……お母さんが、私が家に帰らないつて先輩に連絡を取つたらしいの。それで、先輩は学校に探しに来て……」

「ウサギ小屋で君を見つけたのか」

「そうよ。先輩は自分にいい考えがあるからつて、私を先に帰らせた。その後、高橋君の生徒手帳をウサギ小屋に置いて、小屋を出たの。そしてその時、黒田に見つかつた」

飯田は憎々しげに黒田の名を吐き捨てた。顔を怒りに染めて言葉を続ける。

「黒田は、アイツは教師のくせに先輩を強請つたのよ。最低よあんな奴。先輩が金持ちじゃなかつたら、さつさと学校にばらしていたに違ひないわ。そう言う奴だつたのよ、アイツは」

「君はどうして先輩が強請られていると知つたんだ」

「先輩の様子がおかしかつたから。調理実習のあつた日に問い合わせたのよ。そしたら、黒田に強請られてるって言つじゃない。私は頭

にきた。先輩があの日も黒田に呼び出されないと知つて、先輩が

黒田に会う前に、黒田が待つてゐる理科室に足を運んだの」

そこで息をついて、飯田は少し笑みを口に乗せた。その笑みは陰惨なひかりをはらんでいた。

「あいつ、最初は何故私が来たのか分からなかつたみたいだつたわ。好都合だつた。私はウサギを殺したナイフで、今度はアイツを刺した。先輩を苦しめたあいつを、殺してやつたのよ。優しい先輩を苦しめたんだもの。あいつは死んで当然だつたのよ」

「……先輩は君を庇つて自首したんだよ。それは知つてるだろう」光は思い出していた。先輩が、自分が犯人だと告白したあのタイミング。ずっとおかしいと思つていたのだ。あの時、光はウサギ小屋の鍵を持っている人物が犯人である可能性が高いと言つた。そして、先輩は光が飯田の名を上げようとしたときに、それを遮つて自分が犯人だと告白したのだ。

その時からずつとおかしいと思つていた。少なくとも、ウサギを殺したのは飯田なのではないかと、あの時から疑つていた。

光は少し目を閉じた。そして瞼を開くと、また飯田に視線を向けて、先輩が私を庇つて自首したのは知つてるわ。私を理科室から逃がしてくれたのは先輩だもの。先輩が私を庇つてくれるのは解つていたのよ。本当はそんな事してもらいたくなかったけど。でも、私はまだ、やる事があるから」

そう言つて飯田は一度言葉を切つた。スカートのポケットにゆっくりと手を入れる。

「なんだか解る？」

先ほどまで怒りに歪んでいた飯田の顔が、どこか緊張したものへと変わつた。緊張しているのに無理に笑つてゐるような歪な表情。

「解らないの？」

語尾を上げて尋ねた飯田の声は、冷たく乾いている。

「こうすれば、解つてもらえる？」

そう言つて飯田はゆっくりとポケットに突っ込んでいた手を引き抜いた。手にした物を胸の辺りまでかかげ、折りたたみ式のそれを開いた。開く時にきらりとひかりが反射する。

飯田は手にした、折りたたみ式ナイフの切つ先を、光に向けた。

「……」

「私許せないのよ、あなたが。私のお父さんを奪つたくせに。最後の最後まで、目の前の私よりあなたを心配したお父さんを裏切ったあなたが。心底許せないのよ」

「……飯田」

「どうしてよー。どうしてなの？　どうしてあなたが生きて、お父さんが死ななきやならなかつたの？　あなたが死ねばよかつたのよ。お父さんは何も悪くないのに。私のお父さんなのに。あなたは私からお父さんも、お父さんの夢も……何もかも全部奪つたのよ」

「……」

「死んでよ。スケートをしないあなたに、何の価値があるつていうのよ」

飯田はそう叫んだ。泣き出したいのを堪えている表情で。手にしたナイフが揺れている。飯田が震えているのだ。怒りか、悲しみか、それともそのどちらもなのか。感情が抑えきれずに腕が振るえる。

光にはそう見えた。

「ねえ知ってる？　人間って、簡単に死ぬのよ」

光はその問いに自然と強張っていた体をほぐすように動いた。無意識にシャツを掴んでいた手をゆっくりと開く。

「知ってるよ」

答えた光の声は細く、飯田の耳には届かなかつた。

光を待つために食堂へ行つた空と海は、既に飲みきつて中身の無

くなつた紙コップを片手に、暇を持て余していた。

「そろそろ十分経つし、いつかい玄関戻るうや」

海が空にそう話しあげて立ち上がったのに、空も倅つ。空は紙コップを食堂の出入口近くにあるゴミ箱に捨てた。

「光、いるかな」

「どうやる。長引くかもみたいな話し振りやつたからな」

海の言葉に頷いて、空は先ほど光から渡された封筒を、ポケットから取り出した。それを海に示しながら口を開く。

「なあ、コレどうしようか。見てもいいって言つてたけど

「うーん。でもなあ」

そんな会話を交わしながら、廊下の角を曲がつた時、空は誰かとおもいきりよくぶつかつた。

「うわっ」

「きや」

空は尻餅をつかなかつたが、ぶつかつた相手は尻餅をついていた。大丈夫かと声をかけながら、海がその相手に手を差し出す。

「痛つた。でも、大丈夫。あーあ。教科書ばら撒いちやつた」

そう声を上げたのはクラスメートの朝倉だった。海に助け起こしてもらった朝倉は、ぶつかつた勢いで鞄から飛び出した教科書やノートを拾い始めた。

我に返つた空も、一緒に拾い始める。空は近くにあつた教科書をあらかた拾い終わると、他に落ちてないかと目線を上げた。少し離れたところにノートが一冊落ちている。空はそれを拾い上げた。

緑色の表紙には要点ノートと記されており、その表紙の右下にはイニシャルが書かれていた。

「N・I?」

空は朝倉のもとへ戻ると、拾つた教科書やノートを数冊朝倉へ渡した。そして最後に拾つたノートを見せて口を開く。

「なあ、朝倉。コレもお前の?」

「え?」

「イニーシャルが書いてあるけど、お前のイニーシャルじゃないよな」
そう言つて朝倉に手渡したノートを、海は覗き込む。

「N・I? 朝倉やつたら、コキ・アサクラで、Y・Aやんな」

海が言つのに、空もそつだらうと頷く。朝倉は一人笑顔で、声を
発した。

「やだ、コレはリンゴちゃんに借りたのよ」

「え? リンゴちゃんて飯田やう? 飯田リンゴやつたら、R・I
やろ」

海の言葉に、朝倉は顔を顰めた。

「ちょっと、紫藤。リンゴはあだ名よ、あだ名。本名はイイダ、ノ
リ」「倫子の字がリンゴって読めるからそう呼ばれてるの」

そう言つて朝倉はパタパタとノートを叩くと鞄にしまった。

「へー。知らなかつた」

「アンタまで。高橋はリンゴちゃんに惚れてるんじやなかつたの
「な、違つつーの」

そりや可愛いとは思つてるけど、好きとかそういうのじやなく
てと、空は心の中で一人焦つている。

その様子に感心が無いのか、何かを考えている風に押し黙つてい
た海が口を開く。

「なあ、飯田の親父さん。死んだつて言つとつたよな。何年前や
「去年よ」

何でそんな事聞くのだといわんばかりに、不審気な顔をした朝倉
が答える。だが、海は気づいていないのか、なおも問いを重ねた。

「じゃあ朝倉。飯田つてもしかして、親にノンちゃんつて呼ばれて
へんかつたか」

この問いかに、朝倉は軽く目を見張つた。

「どうして知つてるのよ

空も普段の様子と違つ海に、戸惑いの視線を向ける。

「朝倉、あと一つだけ。飯田の両親つて離婚してる? 飯田の前は
長瀬つて苗字やつたんぢやうか」

「……そうよ。どうやって調べたの？」

一層不審気に海を見る朝倉に、空は言った。

「おー、朝倉。急いでたんじゃなかつたのか」

そう言つと、朝倉はあつと声を上げた。

「そうよ。大変。行かないよ。悪いわね、紫藤。もつ行くわ」

そう言つて朝倉は廊下を走つて行つた。また、誰かとぶつからなければ良いのだが。

「空、俺大変な事に気づいてもうたかもしれん」

「はあ？」

深刻な表情で言つ海を、空は軽く見上げる。海は硬い表情のまま口を開いた。

「長瀬つて、光がスケートやつてた時の、コーチの名前や。あの死んだ……」

「ああ、聞いた事ある名前だと……つて、じゃあ、飯田つてもしかしてそのコーチの娘？ あだ名ものんちゃんで合つてるし」

田を見開いて大声を上げた空の耳に、携帯電話の着信音が聞えてきた。空は携帯電話を持っていない。この付近には空たち一人しかいないので、おのずとその携帯電話の持ち主は分かる。海は鞄からストラップを引っ張つて携帯電話を取りだすと、耳に当てた。

「はい？ ああ、こんちは」

空は聞き耳を立てるのも不味いかと、海から距離をとろつと動き出した。だが海は、その手を掴んで引き止めた。

「本当ですか？ それ。いえ、今は俺らと一緒ににはおりません。はい、捜します。じゃあ」

そう言つて通話を切ると、海は空に言つた。

「なあ、さつきの手紙持つてゐよな、見せ」

鬼気迫る様に言われ、空は頷く。封の開いていた封筒から、手紙を取り出した。

「何だよコレ」

空は手紙の内容を眼にして、少なからず驚いた。

『今度の事件の真相を知りたければ屋上へ来て。長瀬倫子』

「長瀬つて、え？ 飯田の事だよな。名前倫子だし、やつやつと言つてたし」

動転している空の肩に手を置いて、海は言った。

「とりあえず屋上や、空。今の電話の内容も含めて走りながら話す」「解った」

空は頷くとこんがらがっている頭を静めようと一度大きく息を吐いた。

そして、海に続いて屋上へと続く階段を目指して走り出した。

第十七章 大事なモノ

「あなたが死ねばよかつたのよ」

扉の外から、少女の叫びに似た声が聞こえた。ドアノブに手をかけて、今まさにドアを開こうとしていた空は、動きを止めた。

「コレ飯田の声か？」

傍らの海を軽く見上げると、海は頷いた。

「多分な。私市刑事の話によるとそうやうつな。坂木先輩が、飯田が光を殺そうとしてるって言つたそつやから」

「まだ信じられねえよ」

空は呟いた。先ほど海にかかる電話は、私市刑事からの物だった。いつの間にこの一人がアドレスを交換していたのか知らないが、この電話が無ければ、いつしてこの場に駆けつける事もできなかつたのだ。

私市は海にこう言った。飯田倫子と言つ少女が光を殺そうとしている。気をつけろと。私市は今こちらへ向かっているのだという。「良かつた。まだ生きとる見たいやな。光は」

海はそつとドアの隙間から外を覗いていた。その肩に手をかけ空もその上から背伸びして外を覗く。飯田が確かにいた。何かを身体の前で構えている。それが反射してひかりを発した時、空はそれがナイフだと知つた。その切つ先は惑うことなく光に向いている。

「早く止めなきや」

そう言つて、動こうとした空を海が止めた。見下ろした空に、海は首を振つてみせる。

「今下手に動いてみい、飯田を刺激する事になる」「でも……」

「とりあえず、ここで見といひ。飯田が隙を見せたら飛び出したらええねん」「……分かつた」

本当は今にも飛び出したかったが、空は海が言つ」とももつとも
だと思い、言葉を飲み込んだ。

一人が会話している間にも、飯田と光は緊迫した雰囲気をかもし
出している。

光に向かつて怒鳴る飯田の言葉を、光はじつと聞いているようだ
った。

「ねえ知つてる？ 人間つて簡単に死ぬのよ」

そう言つて飯田は動いた。光に向かつて一歩散に走り出す。

「あいつ、何やつてんだよ」

空はそう呟いて、ドアを思い切りよく開けた。ドアは勢いよく開
いて壁に当たる。大きな音が屋上に響いた。

その音に驚いたように、飯田は動きを止めて振り返る。光もこち
らに顔を向けた。

空は飯田ではなく、光を睨んだ。

「おい、光。お前なんで逃げないんだ」

空は怒り任せに怒鳴つた。光は恐れた風も無く、腕を組んで聞き
返した。

「どうして逃げなきゃならないんだ」

どうして逃げなきゃならないだって？ 空はその返事に驚くと同
時に、またも怒りがつのるのを感じる。

「どうしてだつて？ そのまま突つ立つてたらお前飯田に刺され
たぞ。それでもいいのかよ」

光を睨みつけて空は言った。

光は淡々と返した。

「いいんだよ。それで」

「なんで……」

そう聞いたのは空でも海でもなく、飯田だった。飯田は光から五
歩分ほどの距離を置いて立ち止まっていた。手にはまだナイフが握
られている。

空から飯田に顔を向けて、光は口を開く。

「君が言つたんぢやないか。僕には生きている価値が無いって。その通りだよ。僕もずっとそう思つてた」

「……」

その言葉に、誰も返す言葉が無い様に押し黙つた。飯田でさえ動く事を忘れたように、つり立つたままだ。

「……どうして、生き残つたのが僕だったんだろう。君の言う通りだよ、飯田。あの事故の時、死ななければならなかつたのは僕の方だつたんだ。コーチは僕をかばつて、死んではいけなかつた」

目を伏せて、光は言葉を切つた。少しづつ西に傾いていく太陽が、一度雲に隠れてすぐに現れた。また影が出来る。

「今更何？ 私を懐柔でもしようつて言つの。そんな事言つたつて、私はほだされないんだから」

「懐柔する氣も命乞いする氣もないよ。コーチが死んだのも、君に罪を犯させてしまつたのも、全て僕が原因なんだ」

「……」

「言い訳する気はないけど。僕は君に言わなかつた事がある」「……何

空たちを警戒しつつ、飯田は光に問う。光は風で乱れた髪を軽く押さえた。

「僕がスケートを辞めたのは嫌いになつたからじゃない。事故で、怪我を負つたからだ」

「怪我？ そんなの誰も言つてなかつたわ。お母さんも、あなたはまたスケートを始めたって……」

「君のお母さんにそう言つてもうよう頼んだんだよ。もうスケートができないって分かつたのは、君との約束の後で。まだ、君に言つべきではないって……」

「嘘よ」

飯田は光の言葉を、途中で遮つた。また腕が振るえている。光の言葉を信じたくない気持ちのあらわれか。

普段おとなしい飯田の叫びに気おされたのか、空も海も立ち止ま

りじつと飯田を見つめている。

「嘘よ、嘘。だって、お父さんはあなたにスケートを続けて欲しくて、だから、あなたを庇つて死んだのに。じゃあ、何でお父さんは死んだの？ 何でなのよ？」

何度も繰り返される問い。飯田は父親が死んでからずっと、この問い合わせを繰り返してきたのだろう。だがこの問いに答えなどないのだ。誰も答えなど持つてはいないのだ。事故に遭つた光でさえ、ずっと分からぬままなのに。

「ごめん、ノンちゃん。約束したのに」

光の言葉に飯田が目を見開いた。その目にうつすらと涙が浮かぶ。「ノンちゃんなんて呼ばないで。そう呼んでいいのはお父さんだけなんだから」

「飯田、もういいだろ。解つただろう。光だって本当はスケート続けたかったんだよ。飯田のお父さんが死んだのだって、事故じゃないか。不幸な事故だつたんだよ。もういいだろ。ナイフ寄こせよ、危ないから」

空がようやく口で口を挟んだ。飯田に手を差し出して、ナイフを渡すように促す。そんな空から、飯田は一歩後退る。ナイフを手に握り締めたまま。

「飯田」

もう一度、空は先ほどより強い調子で飯田の名を呼ぶ。飯田はただ首を横に振つた。まるで駄々をこねている子供ものように何度も。「ダメだ。空」

飯田に近づいて前進していた空は、足止め、光を見た。

「いいんだよ、飯田。君の気の済む様にすればいい。そのナイフで僕を刺したければそうすればいいんだ」

「おい、光」

「何言い出すんや」

驚いて、空と海は光に言つたが、光はそんな一人を睨んだ。

「お前らは黙つてろ。……飯田、僕を殺してもコーチは生き返つた

りしない。それでも僕を殺したければ、いいよ殺して

そう言つて、光は目を閉じた。無防備なその姿を、飯田は呆然と見つめていた。動こうか動くまいか迷つてゐるようだ。

空はじっと飯田に視線を注ぐ。飯田が動こうとしたら、何が何でも止めるつもりだった。たとえそのせいで、自分が怪我をしたとしても。

どれ位時間がたつたのだろう。

沈黙が落ちる中、光が静かに目を開けた。

「どうした？ 飯田。僕が殺せない？ 僕を殺したいほど憎んでいたんだろう？」

「……」

「僕に死んで欲しいって言つただろう」

静かな光の問いに、飯田は答えなかつた。じつとナイフを構えたまま、視線を下へと落とす。

光は疲れたように溜息を吐くと、飯田から視線を外した。そして、

屋上を囲む柵の方へゆっくりと向かう。

空と海、そして飯田も光の突然の動きに、呆然と見入つていた。光が柵を掴む。柵は光の腰の位置までしかない。光は柵から少し身を乗り出して下を見た。眼下に広がるのは校庭のはずだ。今なら運動部の生徒が列を作つて走つてゐる姿が目にに入るだろう。光はゆっくりと空達を振り返つた。

光は、空と海、そして飯田の顔を見回してから、普段滅多に見せる事のない笑顔を作つた。

「飯田ができるないなら、僕がここから飛び降りるよ」
穏やかな声だつた。じつさい光の心は穏やかだつた。やつと自分るべきことが分かつたと、そう思つていた。

「ふ、ふざけるな馬鹿野郎。なんでお前が飛び降りなきやなんねーんだよ。お前は何も悪い事なんてやってねえじゃねーか」

「やうや、光。少し冷静になれや。こつものお前らしくないで」
そう言つて間合いを詰めてくる空と海を見やり、光は口を開く。
「ずっと、おかしいと思つてたんだ。どうして生き残つたのが僕だ
つたんだらうつて。生きる事を望まれてもいない人間が生き残つて、
どうして愛されてる人間が死んでしまつたんだらうつて。コーチは
とてもいい人だった。飯田がこれだけ慕うんだから分かるだひつ」

「……」

「でも僕は何の価値も無い人間なんだ。生きている事自体、間違
だつたんだよ」

淡々とやう言つた光は、また眼下を見下ろすよつて柵に手をかけ
た。その背に向かつて、空と海は走り出す。

そして。

光が柵を越えた。

「光」

空と海の声が重なつた。空は光に向かつて手を伸ばした。

音がするほどに柵に身体を強くぶつけた。息がつまる。痛い。だ
が、指は掴んでいる。光の手首を。

「空、離すなや」

空は光の重みで引き摺られそつになる体を、光を掴んでいる方と
は逆の手で、柵を掴んで堪えた。その空を海が後ろから支えて、光
に手を伸ばす。

「おい、つかまれつて、光」

空の腕に掴まろうともせず、光は空と海を見上げている。伸ばし
てきた海の手を取ろうともしない。

「何してんねん。ホンマに落ちるつて。光」

「離せ、空。お前まで落ちる」

光の声が空の耳に入る。空は怒りに火がつくのを感じた。

「馬鹿野郎。離せるわけ、ないだろうが。俺にお前を見殺しにしろ
つて言うのかよ。出来るわけねえだろう。できねえよ」

本当は怒鳴りつけてやりたかった。だが怒鳴ると光の腕を掴んでいる力が弱まりそうで、自然と声がかすれたようになる。

「なあ、光。頼むから手を伸ばせ、このままやつたら空まで落ちてまう」「え？」

海が言つたが、光は手を伸ばさない。

「そうだよ、空。早く手を離してくれ」

「そうじゃねえだろ、馬鹿野郎。お前を落としてたまるか。俺はもう一度と、人が死ぬのなんて見たくなえ」

「空……」

「おい、飯田。聞てるんだろ？ お前がこんな事やつたのは、光を恨んでの事だつて分かつて。でもな、お前が父親を大事に思つていた様に、俺だつて光が大事なんだ」

光に何を言つても無駄だと空は思つたのだろう。後ろにいるはずの飯田に聞えるように、声を張り上げた。先ほどよりもしっかりと、光の腕を掴む手に力を込めて。

「そいや、飯田。手伝ってくれ。光が落ちてしまつ」

海は空を支えながら、出来る限り振り返つて飯田に訴えた。飯田は身体を震わせて首をただ横に振る。

「頼むよ。お前の父親がたつた一人のように、俺にだつてコイツは血の繋がつた、兄弟なんだ」

「え？」

「飯田。俺たち三人、血の繋がつた兄弟なんだ。コイツは俺たちにとって、大事な大事な兄弟なんだよ」

空が吠える様に言つた。光の手首を掴んでいる手が震えている。限界が近かつた。ずるずると、光の体が少しづつ滑り落ちていく。

「飯田、頼むから。俺らの目の前で光を死なせんといってくれ」

海の大声に、飯田は肩を揺らした。大きな叫び声を上げると、持つていたナイフを捨て、空たちのもとへ走つた。

空の横から身を乗り出して、光に手を伸ばす。

「春名君、手を伸ばして」

泣きながら飯田が言つた。それでも光は首を横に振る。

「ダメだよ、飯田。もう、疲れたんだ」

「光！」

「疲れたんだよ」

囁く様にいわれた光の言葉は、不思議と三人に良く聞えた。

「くつ」

腕がしびれてきた。空は柵を掴んでいた手も離して、光の手を掴む。その空を海が必死で支える。飯田は光の手を掴もうと手を伸ばす。引き上げるのは無理だ。このまま光を死なせてしまふのか。空の頭にそんな言葉が過ぎた。

その時。

「何やつてるんだ」

背後から切迫した声が聞こえてきた。この声は知っている。そう思つたとき飯田を押しのけた男の姿が、空の視界に入った。

男は空の掴んでいた光の手を取ると、空に行くぞと声をかけて、光を引っ張り上げた。

どつと空は勢い余つて尻餅をつく。男は光の腰に腕を巻きつけて柵の中に引き込んだ。

「一体何があつたんだ」

「私市さん、どうして」

呆然と光が男を見上げた。男は先ほど海に電話をしてきた私市刑事、その人だつた。

「おい、大丈夫か？　顔色が真つ青だぞ」

光の顔を覗きこんで私市が問い合わせる。その光の足から力が抜けた。私は咄嗟に光の腕を掴んでその身体を引き寄せた。光が口元を抑えた。その手の中から咳が漏れる。

発作だ。

「光」

尻餅をついたまま呆然としていた空は、海と共に光の元へ走り寄る。

私は救急車を呼ぶために、胸ポケットから携帯電話を取り出す。

光の咳は止まらない。

「うつ、わああああ」

焦っている空たちの背後で、飯田が泣き崩れる。

その泣き声があらわすものは後悔か。

それとも、光を殺せなかつた事への無念の涙か。

それは飯田にしか分からない。

飯田にしか、分からぬのだ。

第十八章 失くしたモノ

光が病院の個室で目を覚ましたのは、気を失つてから一日日のことだった。

ゆっくりと目を開けた光に、見舞いに来ていた空と海が声をかける。

「あ、目を覚ました」

「大丈夫か？ 光」

突然一人の顔が視界に入つて驚いたのだろう。光はゆっくりと瞬きをして、一呼吸おくと口を開いた。

「ここは？」

「病院だよ」

光の問いに答えたのは空だ。光はゆっくり起き上がり、静かに室内を見回した。淡い色調の簡素な部屋。光の寝ているベッドの横には点滴の袋が吊るしてある。点滴の管の先は光の腕につながっていた。

「お前が屋上で喘息の発作起こして、氣い失つてから一日もたつたんやで」

「一日……」

「そう、一日や。心配したんやぞ」

「そうだよ。病院の先生は大丈夫つていつたけどさ。もうこのまま目を覚まさないんじやないかって、不安で」

空が泣きそうな顔で光を見る。海も少し疲れたような顔をしていた。

「あの後、どうなった？」

光は顔を俯けて、誰にともなくそう聞いた。

「飯田は自首したよ。全て自分がやつたことですつて、私市刑事に頭を下げる」

「……そりゃ」

「あいつ、なんであんな事しちゃったんだろうな。お前を困らせようとか、そんな事せずに直接お前に言えばよかつたんだ。最初からさ。そしたら、こんな事にならずにすんだのに」

「……」

光は空の言葉を黙つて聞いていた。

「あ、あと俺を階段から突き落とした犯人やけど……」

海の言葉の途中で、光は言った。

「ああ、飯田だろ」

「……なんで分かつたんだよ」

驚かしてやろうと思ったのにと、空が唇をとがらせる。

「それは、考えなくとも分かるじゃないか。飯田が犯人で坂木先輩が共犯者なら、海が突き落とされた時の状況が見えてくる。どうして海が突き落とされなければならなかつたのかもな」

「当たつてるかどうか聞いてやるよ。言つてみな」

空はどこか偉そうにそう言つた。光は溜息を吐くと口を開く。

「飯田は間違えたんだ。僕と海を……」

「……どうして？」

「朝倉が言つてたんだろう？ 僕と海の後姿が似ているって。飯田は階段を下りる海の後姿を見て、僕だと思つたんだ。飯田は教室の事件でもウサギの事件でも、僕を困らせることに失敗していると思つていたらしいから、今度は直接、僕を狙つた」

「うん、それで？」

「飯田は僕を突き落とすつもりで、間違えて海を突き落としてしまつた。海が落ちて倒れた後、気づいたんだろうな。先輩が駆けつけた時、たぶん飯田は階段の上にいたんだろう。先生の話じや、先輩は海の傍らに膝をついて、階段を見上げていたつて言つていたから。先輩は飯田が突き落とした事がばれないように海の制服に警告の紙を入れたんだと思う」

「おお、当たつたよ」

「さっきまで寝とつたのに、よう頭まわるなあ」

海は感心したような、呆れたような声を出した。

その時、光が何度か咳を繰り返した。

「……大丈夫か？ 光」

光は咳をおさめると、傾いて口を開こうとした。だが、光が答える前にドアがノックされる。

「はい」

なぜか空がノックに答えた。三人の耳に、ドアが開く音が聞える。開いたドアの向こうに、四十代くらいの男性の姿があった。背が高くしつかりとした体つきで、高そうなスーツを身につけている。そのスーツがやけに良く似合っていた。

誰だろう。

空と海が同時に疑問を持った時、光がその人物を見て口を開いた。

「お父さん」

光に父と呼ばれて、光が目を覚ましていたことに驚いていたようだつた男性が、我に返つた様に瞬きをした。

光の父は、その顔に怒りを滲ませると、足早に光のもとへやって来る。

空と海が見ている事に気づいていなかつたのか、気づいていてそうしたのか、光の頬を平手で打つた。

「あ」

「げつ」

空と海が思わずそう声を漏らすほど、打たれた頬は痛そうだつた。打たれたとうの本人は、呆然と打たれた頬に手をやつて、父を見上げた。

「光、お前はもう高校生だ。手すりを乗り越えたらどうなるか、分かる年だろう。飛ばされた紙を取る為に屋上の柵を乗り越えるなんて、何て馬鹿なことをしたんだ」

言われて光は空たちを驚いたように見る。一人は顔を見合させて苦笑いした。

光の父が言つたのは、一人が光の両親にした作り話だ。光は大切

な書類を風で飛ばしてしまい、屋上の端に引っかかったそれを取ろうとして落ちそうになつた。それを見つけた一人が引き上げた。公にはそう言つ「」とになつていていたのだ。

「聞いているのか、光」

言われて光は空と海から父親の方に視線を戻す。普段滅多に怒る「」とのない父が怒っている。光は聞いていると答えて、静かに次の言葉を待つた。

「お父さんとお母さんが、どれだけ心配したと思つてゐる？ 田を覚まさないお前を見て、どれだけ心配したと」

父の声が震えていた。それだけで、どれだけ心配をかけたのか分かる。光は静かに謝つた。

「ごめんなさい」

「もう一度とこんな事しないでくれ」

そう言つと、父は光を抱きしめた。突然の抱擁に、光はどうしていいか分からなくなる。視線をさまよわせると、空と目が合つた。空はにんまりと笑つている。

光は急に恥ずかしくなつた。頬が熱くなる。頬の痛みは既に感じなくなつていた。

どうしたらいいのか分からぬ。だが、光は父親を突き放す事はせず、ただじつと、父親が離れるまで動かなかつた。

空と海は病室を後にした。光が目を覚ましてくれてほつとしたと同時に、力が抜けた。あの後すぐに光の母親も現れた。その母親に、父親と同じように抱きつかれて、光はまた赤面していた。

それを思い出して、空はふつと口元に笑みを乗せる。信号が赤に変わつた。

空は横断歩道の前で立ち止まると、傍らに同じように立ち止まつ

た海を軽く見上げた。

「なあ。俺、光のあんな赤面した顔見られるとは思わなかつた」

「ああ、思いつきり照れとつたな、あれは」

「しばらくネタにできるな」

「そうやな、思いつきりからかってやるつや。心配掛けさせられた分も」

空と海は共犯者の笑みで互いを見やつた。

信号が青に変わった。動き出す人々と共に空と海も横断歩道を渡る。

しつかりと先を見据えて。

テレビではひっきりなしに、空たちが巻き込まれた事件が、報道されていた。未成年という事で顔と名前は公表されなかつたが、飯田の家の前には多くの報道陣が集まつた。

最初犯人とされていた少年が、少女を庇つていたと言つことでマスコミは色めきたつた。今までかなり坂木を批判していた人の中には、坂木に同情的なコメントをするものも現れた。

空はテレビのリモコンを取ると、電源のボタンを押してテレビを消した。

まだ見ていたのにといつ、母の声を背に二階に上がる。事件の犯人が名乗りを上げたことで、また学校は休みになつていた。

事件は終わつたと、皆言つている。

だが、全て解決したわけではないと、空は思つている。

まだ、本当の意味で解決したわけではないのだと。

そしてコレを解決できるのは、自分と海しかいないのだ。

ハピローグ

墓と墓の間の、小さな歩道の先に、陽炎が見える。

暑い。

細い道の先を見つめていた空と海は、同時に腕で額の汗を拭う。

「遅い」

「遅いな。ちょっと見に戻るか」

空の咳きに返事をして、海は眺めていた道の先を示した。
空と海と光は、自分達の本当の両親の墓参りに来ていた。夏休みを利用して一度行こうと計画を立てていたのだ。場所は緑園で確認できた。

水を汲んでから行くと光が言つので先に来ていたが、墓の掃除が終わつてもまだ光は来ない。一人は持つてきた掃除道具と「ミニの入った袋を手に、来た道を戻つた。

水汲みが出来る場所まで来ると、木の桶を傍らに置いて、道の端に座り込んでいる光の姿を発見した。

「おーい。何やつてんだよ」

「気分でも悪いんか」

光の前に一人が立つと、光は顔を上げる。眼鏡の奥の瞳が一人の顔を映す。

「わるい。足痛くて……」

その言葉に、空は心配する声をかける代わりに怒鳴つた。

「おいお前な、痛かつたら痛い、しんどかつたらしんどい、無理なら無理つてちやんと言え」

両の拳を握り締めて怒鳴つた空の肩に手を置いて、海が空をなだめる。

「まあまあ、落ち着けや。光、立てるか？ 杖持つて来てるんやろ。

それ出せや。水は俺が運ぶから」

「いいよ、自分で……」

海の申しでを光が断りつとしたようだつたが、空がその言葉を途中で止めた。

「自分で出来なかつたからこんなとこでずまつてたんだひつ。好意は素直に受ける」

「……」

「ほら立つて。早く墓参りして、飯食うぞ」

空は光の肘を掴み、立ち上がらせる。光はされるがままに立ち上がつた後、右肩にかけていたリュックから、折りたたみ式の杖を取り出した。その光の耳に、海が口を近づけて囁く。

「空が不機嫌なんは、腹が減つとるからやな。間違いないで」

その断定的な言葉に、光は微かに笑みを浮かべた。

墓参りを終えた空たち三人は、墓場を後にすると、駅近くの大衆食堂で昼食をとつた。

その後すぐに家に帰るのはもつたいないと、食堂でおばさんに教えてもらつた近くにある滝を見に行つた。光に合わせてゆっくりと歩いていたので、思つたよりも時間がかかつた。

帰るために向かつた駅へ着く頃には、口が傾き始めていた。

この駅は無人駅だ。空は改札機のない駅の構内に入ると、設けてあるベンチに座つた。

それにならうように空の隣に光が腰掛ける。海はベンチの横にある時刻表を眺めると、顔を顰めて声を上げた。

「げつ、あと五十分も待たなあかんで、コレ」

「うそ！」

「ほんまやつて、今六時半過ぎやろ。最終の七時一十分までないもん」

そう言いながら、海は光の隣に腰掛けた。

彼らの正面には、反対方面へ向かう電車の停まるホームがあつた。

その先に、数件の民家と田畠。そしてその奥には夕焼け色に染まつ

た山並みが見える。夕田はその山に向かって下りてきているように見えた。

「綺麗やなあ」

海が感嘆の声を上げ、光が頷いた。だが空は海に頷く事はせず、じつと夕田を見つめていた。

「どうしたんだ？」空

いつも何かと騒がしい空がおとなしいと、氣になるのだろう。光が空に声をかけた。その声に反応するように、空が光を見る。空はいつになく真面目な表情をしていた。

「どうしたんだよ、空」

もう一度光が聞いた。

空は言った。

聞きたかった事があるんだと。

光は首を傾げた。

「僕に？」

「ああ。……光。お前まだ、自殺したいと思ってるのか」

唐突な質問に、光は眼鏡の奥の目を見開く。海がその横で息を飲んだ。

「何だよ、いきなり」

光はそれだけ言って、空から田を逸らした。

「俺は聞いてるんだよ。お前、まだ死にたいと思つてるのか」

「……いや、思つてないよ」

小さな声で光が答えた。

空はずつと気にかかつっていたのだ。あの時、あの屋上で、光は自ら死のうとした。でも結局、空たちのせいで光は死ぬ事が出来なかつた。

死ねなかつた事に後悔をしているのではないかと、空は思つていたのだ。

だが光は否定してくれた。空は光の答えに、安堵の息を吐こうとした。だがその前に、光の咳き声が耳に入つた。

「……父さんたちに、迷惑がかかるし」

その言葉を聞いた瞬間、空はきれた。立ち上がり、光を見下ろして怒鳴った。

「何だよそれ。じゃあお前は、親父さんたちに迷惑かからなければ死ぬつていうのかよ。生きたいとは思わないのかよ」

「……」

光は何も言わず、立ち上がった空を見上げている。そんな光に、海が声をかけた。

「なあ、光。お前あの時言うてたよな。自分には生きてる価値がないって、アレ?」^ういう意味や。俺にはお前に生きる価値がないなんて思えへん

「どうしてそんな事聞くんだよ」

光が咳く。珍しく動搖したように視線をさまよわせながら。

「どうして? そんなの決まってるじゃん。お前が心配だからだよ。俺たちはお前に田の前で死なれそうになつたんだ。心配なんだよお前が。お前、あの事件以来、ずっと塞ぎがちじゃないか。俺たちはお前に死なれたくない」

また大声を上げた空を見もせずに、光は踵をベンチの端に乗せ、膝を抱えた。顔を隠すようにたてた膝に顔をつづめる。

「光?」

その突然の動きに驚いて、空と海が同時に声をかける。

「もう疲れたんだよ。生きることに」

膝に顔をうづめているせいか、少しひぐもつた光の声が聞こえてくる。

「何言つてるんだよ」

空は立つたまま光を見下ろす。光の声がまた空の耳を打つた。

「……僕が、春名の家人間じゃないと知つたのは五歳の時で、初めて親族の集まりに顔を出した時だつた」

「へ?」

空は呆気に取られた。いきなり光が昔話を始めたからだ。空が海

を見ると海は頷いた。黙つて話を聞けと言われたような気がして、空も頷き返す。

「その時言われたんだ。お前は病気持ちで、なんの利用価値もないつて。どうしてお前みたいな人間を、父さん達は引き取ったんだつて。どうせすぐ、飽きて捨てられるつて、笑われた」

「何だそれ？ そんなわけないじやん」

「そうやで、光。そんなん氣にする事ないって」

空と海が口々に言う。だが光は顔を上げなかつた。光の声が空の耳を打つ。

「ああ。お前達なら氣にしなかつたかもな。殴られても蹴られても、お前達なら、向かつて行けただろうな」

「そんな事までされたのか」

驚いて叫んだ空に、海がしーっと、唇に人差し指を当てた。せつかく光が話す気になつたのに、水を差すなと言いたいのだろう。

「ああ。でも、昔の事だ」

そう言って、光は顔を上げて空を見た。いつもと変わらぬポーカーフェイスがそこについた。赤い夕日を反射して、眼鏡がひかる。その表情を見て、空は息を飲んだ。何故息を飲んだのかは、分からなかつた。

光は一つ溜息を吐くと、顔を俯けてまた話し始めた。

「親族の集まりがあつた後、僕は親にどう接すればいいか分からなくなつた。ただ捨てられたくないつて、そんなことばかり考えてた。でも、捨てられずにいるにはどうしたらいいか分からなくて。ずっと部屋に引きこもつて、三日三晩考えて出た答えが、僕が親にとつて価値のある子どもでいることだつた」

「……」

「そんな事ばかり考えて、家に引きこもつていた僕を心配した両親が、スケートに連れて行ってくれたんだ。その時、フィギュアスケートに出会つた。綺麗な女人が、まるで妖精のように滑つてた。僕はそれに魅了されたよ。その時、父にフィギュアスケートをする事を

進められたんだ」

「それでスケートを始めることになつたのか」

空が問うと、光は小さく頷いた。

その時、がたがたと大きな音を立てて、近くの踏切を軽トラックが通り過ぎた。それをなんとなく全員で見送つてから、また話が再開された。

「スケートを始めて気づいたんだ。両親は僕が試合に出るたびに、必ず仕事を休んで見に来てくれる。試合に勝てば喜んでくれる。周りの評価も変わってくる。だから、スケートさえしていれば、僕は両親にとって価値のある人間になれるって」

そこで光は一度言葉を切つた。疲れたように息を吐く音が、空の耳を打つた。

空はじっと、光を見つめる。

ずっと、強い人間だと思っていた。

何があつても動じない、光は強い奴だと。

実際。光は色々な事件が起こったときも、一人動搖を見せなかつた。

飯田に呼び出されて、屋上に行くまでは……。

だがその考えは間違つていた。光は強かつたんじやない。光は強く見せようとしていただけなのだ。

意識していたにしろ、無意識にしろ、光はずつと、強い人間に見えるように振舞つてきた。

周りの色々な攻撃から身を守るために、強さという名の鎧をつけた。光はずつと、自分を偽つてきたのだろうか。鎧の下にたくさんの傷をおいながら。

そしてその傷は、今もまだ癒えてはいないのだ。

「僕がスケートの大会で優勝して、名が挙がるに連れて、僕に冷たい態度を取つていた親戚達の態度も、少しづつ和らいでいった。父さんたちが僕のせいだ、陰口を言われる事もなくなつていたんだ。あの日までは……」

光の言つあの日とは、事故にあつた日のことだろ。一度思い出したよに、苦い顔をした光は、膝を抱く手に力を込めたようだつた。

「事故に遭つた後。医者にもうスケートをする事は出来ないと言われて、僕は愕然としたよ。僕が人に誇れるのはスケートだけだつた。普段仕事が忙しくて、殆ど家にいなかつた両親が、僕を顧みてくれるのはスケートをしている時だけだつた。だから、愕然とした……」

「光……」

海が光の名を呟いた。海の目が少し潤んでいるよに、空には見えた。夕日の加減でそう見えるのかもしけないが、きっと違う。「母さんが叫んだんだ。この子にはスケートしかないのにって。その時思つた。ああ、僕はもう価値のない人間に成り下がつたんだつて。誰に誇る事も出来ない、両親のただのお荷物になつてしまつて」

「……そつか、それでお前は謝つたんやな。お母さんに、『ゴメンつて』

海が静かに光に聞いた。光が小さく頷く。

空は意味が掴めず、えつと声を上げた。その声を聞きつけた海が、立つたままの空を見上げて口を開いた。

「言つとつたやろ、みさきさんが。光にスケートが出来ないつて言つた時、光は泣きもせず謝つたつて」

空も思い出した。みさきは言つっていた。あの子はただ申し訳なさそうに謝つたと。

光はスケートが出来ない事を悲しんだんじゃない。スケートの出来ない自分が、両親の重荷になることを恐れたのだ。

空はやつと理解できたような気がした。ずっと思つていたのだ。自分ならきつと泣くのに、どうして光は泣かなかつたのだろうと。

「……涙はでなかつたよ。僕はただ怖かつたんだ。ケガをして、人並み以下に成り下がつた僕は、両親が自慢できるようなことを何一つ出来ない。このままじゃ捨てられてしまつって。そう思つと、怖

かつたんだ」

「お前の親がお前を捨てるわけないじゃないか。みさきさんが叫んだのだって、お前がスケート好きな事知つてだからそう言つたんだ。お前の事を思つて言つたんだよ。それは光だって分かるだろ?」

空は光の隣にゆっくりと腰掛けた。光は黙つてその動きを田で追つていた。しかし光は、空の問いに答えようとはしなかつた。

「なあ、光。お前の親はお前が大好きや。価値があるとかないと、そんなん関係ない。ずっと一緒に過ごしてきたんやろう。お前にだつて分かるはずや。お前の親はお前を捨てたりせえへん。絶対や」

「……捨てはしないだろ? な。世間体もあるし、父さんたちは優しいから」

小さくそう漏らした光の言葉を、空は聞き咎めた。

どうして分からぬのだ。

どうしてそんな風に思うのだと。

「何で? 何で解んねえんだよ。優しさだけで、どうでもいいと思つてゐる子どもを育てられるかよ。屋上から落ちそうになつたつて連絡受けて、海外の出張先から慌てて戻つてきたりするかよ。お前のこと、殴つて叱つたりしやしねえよ」

空が言つたのは光の父親のことだ。光の父親は光が入院したと言う知らせを受けて、仕事そっちのけで、文字通り出張先から飛んで帰つてきたのだ。

視界が不意に歪んで見えて、空は慌てた。

そんな空を見ていた光が、眉を寄せる。

「空、何で泣くんだよ」

「泣いてねえよ。泣いてねえけど、お前が余りにも分からずやな」と言つから……

泣いていないと言つた先から、空の頬に涙がつたう。悔しかつた。

光はあんなに両親に愛されているのに、愛を注がれているはずの光に、その愛は届いていないのだ。

光は気づいてくれないのだ。

スケートが出来るからとか、そんな事ではない。光の両親にひとつ、いや、空たちにとつても。光が生きている。その事にどれだけの価値があるのか。

光にはそれが分からぬのだ。

空の涙は、一度溢れると止まらなかつた。もう泣いていないと言つことは出来なかつた。

光はどうしたらいいのか分からぬように、膝を抱いていた手を片方離して、空の肩に触れようとした。だがその手は途中で止まり、ベンチへと下された。

海が静かに光を呼んだ。光が振り向く。海は普段滅多に見せるこのない真摯な顔で光を見た。

「光。空はお前の代わりに泣いてくれてるんや。お前、自分が悲しい目に遭うても、全然泣かへんやんか。お前は辛い目に遭うて來たんや。いっぱい泣く資格はあるのに、いつも泣かへんから、涙が溜まつて、重くなつて、支えられんくなつたんや。そりや疲れもするわ。お前はもっと、吐き出さんとあかんのや」

海の言葉に、光は表情を動かした。眉をよせ、珍しく海にくつてかかる。

「……泣いてなんになる？ 泣いたらこの足が元にもどるとでも言うのかよ。泣いたらもう一度、スケートが出来るようになるつて言うのか」

光の言葉に海は首を横に振る。

そんな海に向かつて、光が口を開きかけた時、空は光を横から抱きしめた。

驚いた様に、光は動きを止める。

「空？」

困惑氣味に、光が空の名を呼んだ。空は震える声で言つた。

「スケート、……好きだったんだな」

そう言つた瞬間、光が肩を震わせた。空はもう一度言葉を繰り返

した。

「光。おまえ、スケート好きだつたんだよ」

「つ……」

光が声を詰まらせたのが解つた。

空は光が身動きするのに合わせて、光を抱いていた手を離す。また零れ落ちそうになる涙を拭つた。

光は立てていた膝に突つ伏する。

ぐぐもつた声が、空と海の耳を打つた。

「そう、だな……好き……だつたんだ。そうだよ。僕は、スケートが好きだつた。……ひんやりとしたリンクの上に立つと、いつも心があらわれる気がしてた。嫌な事全て忘れられた。本当は、ずっとあそこにいたかったんだ……」

「光

空と海が同時に呼びかけた。

光の肩が震えていた。

細かく震えていた。

空はもう一度光の名を呼んだ。

「光……」

「……なのに、足が痛いんだよ。足が、痛いんだ。もう……リンクに立つことも出来ない」

光の口から嗚咽が漏れ始めた。

光はゆっくりと身を起こし、震える手で眼鏡を取つた。

眼鏡を持った手とは逆の手で田元を覆う。

「辛いよ……」

涙で滲んだ声がそう訴えた。

光は本格的に泣きだした。ずっと流れる事のなかつた涙が、とめどなくあふれだす。

空と海はそんな光から視線を外して、夕日に田を向ける。日が沈む前の大きな太陽は、辺りを赤く染めていた。自分達を包む夕日は、暖かくせつなかつた。

一人は示し合わせたかのように、背を丸めて泣いている光の背に、腕をまわした。

やがて夕日が山に隠れて見えなくなる頃。光の涙がようやく止まつた。涙でぐしゃぐしゃになつたハンカチをポケットにしまい、光は眼鏡をかけなおした。

いつの間にか辺りは暗くなり、駅の螢光灯には、あかりがともつていた。

もうすぐ電車が来る。

三人は立ち上がりつて線路の先を見る。電車が駅に近づいてくる姿が目に映つた。

電車が駅に停まり、ドアが開く。
車内は妙に明るく見えた。

そして……

三人は明るい世界へと、足を踏み入れた。

HPLローグ（後書き）

（後書きです）

ここまで読んでいただき、本当に、本当にありがとうございました。
た。

誤字脱字、変換ミス等ひじょうに多く、申し訳ありませんでした。
少しずつ修正しています。

今回でこのお話は最終回となります。いかがでしたでしょうか？
作者的には大団円だつたんですけど……。へたくそなりに思いは
こもっていますので、少しでもお気に召していただければ幸いです。
それでは、この長いお話を最後まで読んでくださいありがとうございました。
ネット小説ランキングに投票くださった皆様。本当に
ありがとうございました。まさか、自分の作品に投票してくださる
方がこんなにいるとは思いもしておりませんでした。本当に嬉しか
つたです。評価、感想を下さった方。メッセージを送つてくださつ
た方。ありがとうございました。本当に読んでいただけていると実
感できました。嬉しかったです。

もしよければ、ちよこっと感想や評価など、していただけると嬉しいです。このキャラが好き、とかでもよいので。今後の執筆活動
のためにも気になるところなんです。（ずつずつしきですよね。す
みません）皆様の「」意見や「」感想は本当に参考になります。

それでは、またお会いできる事を願つて。

愛田美月でした。

追記

2009年7月 アルファポリスさまのミステリー 小説大賞にエン
トリーしました。
応援よろしくお願いいたします。投票していただけると励みになり
ます^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044d/>

三兄弟の事件簿

2010年10月8日13時03分発行